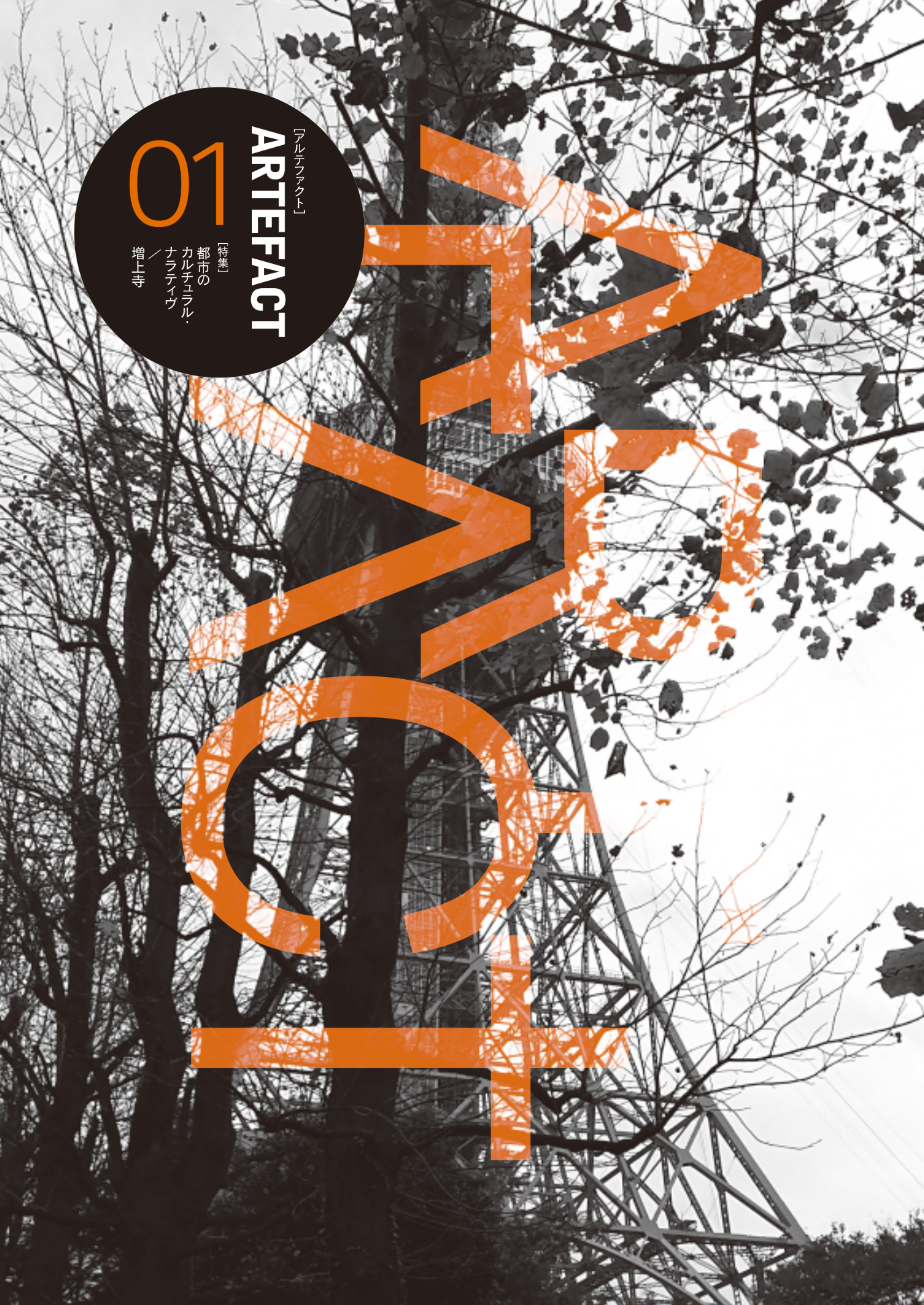

01
ARTEFACT
［アルテファクト］
［特集］
都市の
カルチュラル・
ナラティヴ
／
増上寺

photo: Ryo Yoshiya

編集前記

H 本間 友　M 松谷 芙美

H　なんとか無事にARTEFACTを刊行できそうでほっとしてます

M　最初は本間さんとイメージが共有できず、どんな雑誌になるのかなと思ってました

H　いま明かされる事実！最初はどんなイメージ？

M　最初は「カルチャー・マガジンの見た目をした報告書」程度のイメージ

H　結構いろいろ文献・・・というと堅いですけど、地域で発行されているミニコミ誌みたいなものを参考にしましたね

M　地域カルチャー・マガジンのような、ソフトな雰囲気を真似ながら、内容は研究に使えるようなしっかりした学術的なものにしたいと思ってました

H　ARTEFACTの位置づけとしては、「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクトの報告書というか、プロジェクト・マガジンですよね。第1号はいわばプロトタイプ的なものと考えています

M　気軽に手に取って読んでもらいたいよね

H　そう。でも、大学の研究所が普通に報告書を作ると、いつも同じような雰囲気になってしまって、あまり読んでもらえない印象があり・・・

M　年寄りくさいけれど、若い人に関わってもらって、柔軟な発想を生かしたかった。留学生もまきこみました

H　デザインも、慶應の卒業生である「Rhetorica（レトリカ）」というチームにお願いして。レトリカさんには、Book in Bookのような形で、独自の企画「Dr. Hillmanに聞く」も入れてもらってます

M　是非読んでほしい

H　是非！　切れ味のよい企画になっていて、楽しい。留学生も頑張ってくれたね。私たちの無茶ぶりに対して・・・

M　留学生の優秀な人材がすぐ近くにいたとはね！

H　こういうプロジェクトをやらないと、授業やイベント以外のかたちで学生と関わる機会があんまりないので、その意味でも面白かった

M　見た目もおしゃれにして、いまの感性に響くようなものにしたかったし、参加した学生さんにも面白い経験になって、この雑誌を本国に持ち帰って自慢してもらえたらいいなと思って作ってもらいました

H　当初は部分的に英語を入れる予定だったけど、結局全部英語がついたし

M　完全バイリンガルは、こだわったところだよね

H　こだわりました！予算はきつかった・・・あと、企画段階になかった記事も増えたよね。お隣研究紹介とかの知り合いが同じ様な興味を持っていたり、新しい繋がりも生まれて、仲間が増えました

H　プロジェクトを立ち上げたときは、私たちの説明も抽象的で、やっぱりわかりにくかったと思う。1年間実際にイベントをやったり、このARTEFACTを編集したりして、かなり活動が具体的になってきたような

M　具体的にすると、なんだそんなことか・・・ってなる気もしたけど、やってみることにより、新しくやりたいことも見えてきましたよね

H　来年に向けての企画も練ってます！

M　これは私のことだけど、美術史ばかり研究していると、どうしても歴史に重きをおいて、現代を見ないくせがある

H　わかる

M　だけど、こういうプロジェクトをしていると、現代のことと繋げて考える切掛をもらえる気がする。現代と過去が同じ線上にあることが、もっと自分のなかで明確になったら、また古い美術の研究の新しい発想もでてくるかもしれない

H　わたしも結構古いところに閉じこもりがちなので、現代と過去をつなぐものってなんだろうって、このプロジェクトをやっていて考えたけど、やっぱり人の視点なのじゃないかと、原稿を書き直しながら思いました。

M　ところで、雑誌のタイトルが途中で変わったよね。最初はART + FACTだったような？

H　最初の企画書ではART+FACT（[art-e-fact]）でした。「+」を「エ」と読ませて（イタリア語風）Artと Factをつなぐ？

M　元々は、芸術（Art）と、学術研究で示される事実（Fact）をつなぐというコンセプトで、繋げて「Arte-fact]」。Artefactは人工物という意味だよね

H　アートや文化資源は、基本人間が作ったもの「人工物」だものね

M　そうそう。実際に編集するときに、さすがに「ART+FACT」だと読めないということで「ARTE-FACT」にしたけど、読みは、英語の通りの「アーティファクト」じゃなくて、「アルテファクト」にしてます

H　「+」の感じを残してね

M　なにか他にチャレンジしたこととかありますか？

H　臆せずに突撃取材していったところ？コネが無くてもとりあえず電話して・・・営業みたいだった

M　確かに、かなり突進ぎみにお願いしてまわったね。でも来年は、きっとこのARTEFACTを持って行けば説明もしやすい・・・はず

H　港区民や学生、港区役所のみなさん、各研究所の先生など、沢山繋がりができました。本間さんのチャレンジは？

M　なんだろう。都市のカルチュラル・ナラティヴ自体、新しいプロジェクトなので、プロジェクトとして成立させられるかどうかの時点ですでにチャレンジングでした・・・

H　構想段階を入れるともう1年以上たつよね

M　まだまだ1年。来年度もやりますよ！

[アルテファクト]01

ARTEFACT

[特集] 都市のカルチュラル・ナラティヴ／増上寺
Cultural Narrative of a City / Zojo-ji Temple

04 **PREFACE** | 「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクト——地域の文化資源への新しいアプローチ | 本間友
06 **LECTURE** | 幕末明治の慶應義塾周辺——増上寺、愛宕社から高輪・三田界隈 | 内藤正人
19 **COLUMN** | お隣研究紹介——國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会
20 **GUIDE TOUR** | 慶應義塾と三田の名建築——建築ガイドツアー
26 **GUIDE TOUR** | 港区生まれ港区育ち、「港区建築ツアー」から考える | 遠山啓一
30 **INTERVIEW** | 留学生がきて！ 増上寺座談会
38 **COLUMN** | 建築のジェネレーション・ギャップを跨ぐ無形文化 | フランソ・ワクトメイスター
40 **REPORT** | 伊坂道子氏講演「増上寺旧境内の変遷」に学ぶ、増上寺の江戸から現代
45 **COLUMN** | 「グーグル・アースダイバー」から見る港区——架空のインタビューを通じたデザイン・フィクション | Rhetorica
51 **INTERVIEW** | グーグル・アースダイバーに聞く——〝唯坂史観〟から読む港区 | Rhetorica
51 **INTERVIEW** | Dr.Hillman Interview: The Google Earth Diver into Minato-Ku | Rhetorica
53 **COLUMN** | Notes on The Google Earth Diver: Design Fiction of a Hoax Interview | Rhetorica
56 **REPORT** | What do the Old Precincts tell us?: Report on the Lecture by Michiko Isaka on the Transition of Zojo-ji Precincts | Yu Homma
59 **COLUMN** | How Pop Music Bridges Past and Present | Frans Wachtmeister
66 **INTERVIEW** | Interview with Monks!: Exchange Students Meet Zojo-ji Temple
70 **GUIDE TOUR** | Born and Raised in Minato-ku: A Hometown Architectural Tour | Keiichi Toyama
73 **COLUMN** | Introduction of Research Neighbours: Kokugakuin University Research & Development Promotive Center Shibuya-gaku (study) Research Group
76 **GUIDE TOUR** | The Renowned Architectures in Keio University and Mita Area
82 **LECTURE** | The Keio University Area during the Late Edo and Early Meiji Eras: From Zojo-ji Temple and Atago-jinja Shrine to the Takanawa and Mita Neighborhoods | Masato Naito
86 **PREFACE** | Cultural Narrative of a City: A New Approach to the Cultural Resources in Local Area | Yu Homma

都市のカルチュラル・ナラティヴ 17／ARTEFACT

本年度、「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクトは、平成29年度港区文化プログラム連携事業の指定を受け、初の公開イベントを実施しました。プロジェクト・マガジンである「ARTEFACT」では、レファレンスを追記した書き起こしやレポート等によって、これらのイベントの内容を記録しています。イベントに参加できなかった人も、本誌を手に取ることによってカルチュラル・ナラティヴを知り、楽しむことができる。そのような誌面を作るため、あえてイベントの時系列とは異なる掲載順をとり、記録だけではなく、マガジンとしての企画記事も含めた構成にしています。

［平成29年度港区文化プログラム連携事業］
「都市のカルチュラル・ナラティヴ：文化資源の過去と現在に出会う」

講演会「都市文化の物語：港区文化資源の近世と現代」
二〇一七年十一月一八日（土）14：00－16：30
慶應義塾大学三田キャンパス 西校舎五一九教室 参加者：約80名
司会：松谷芙美（慶應義塾大学アート・センター所員）
プロジェクト趣旨説明：本間友（慶應義塾大学アート・センター所員）［4ページ］
講演
「慶大三田キャンパス周辺の幕末風景〜過去の史・資料から読む」［6ページ］
内藤正人（慶應義塾大学文学部教授／同アート・センター所長）
「増上寺旧境内の変遷〜芝地域とともに」［10ページ］
伊坂道子（建築家・伊坂デザインスタジオ共同代表）

ガイドツアー「慶應義塾大学と三田の名建築」［20ページ］
二〇一七年十二月一六日（土）13：15－16：15
慶應義塾大学三田キャンパス〜増上寺 参加者：39名
講師：米山勇（江戸東京博物館研究員）

建築公開日「慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード——建築特別公開日」
二〇一七年十一月一五日（水）・一八日（土）10：00－17：00
慶應義塾大学三田キャンパス 参加者：のべ939名

奥付

［編集・企画］「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクト（本間友、松谷芙美）
［企画制作］Rhetorica（松本友也、太田知也、遠山啓一）
［アートディレクション／デザイン］太田知也（Rhetorica）
［協力］フランソ・ワクトメイスター（翻訳・アシスタント）
高野明子（校閲）
田島遥（取材）
［発行］慶應義塾大学アート・センター
〒一〇八－八三四五 東京都港区三田2－15－45
〇三－五四二七－一六一一
http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact
二〇一八年三月十二日

本誌は平成29年度港区文化プログラム連携事業「都市のカルチュラル・ナラティヴ：文化資源の過去と現在に出会う講座」の一環として制作されました。

Colophon

Edited and Planned by the Cultural Narrative of a City project (Yu Homma, Fumi Matsuya)
Editorial Produced by Rhetorica (Tomoya Matsumoto, Tomoya Ohta, Keiichi Toyama)
Art Directed and Designed by Tomoya Ohta (Rhetorica)
Assisted by Frans Wachtmeister (Translation and project assistant),
Akiko Takano (Proofreading),
Haruka Tashima (Editorial assistant)
Supported by: FY2017 Minato Cooperation Project for Cultural Program
Published by Keio University Art Center
2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan
+81-3-5427-1621 http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact
12 March 2018

「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクト 地域の文化資源への新しいアプローチ

Cultural Narratives of a City

A New Approach to the Cultural Resources in Local Area

本間友（慶應義塾大学アート・センター 所員）

慶應義塾大学アート・センターは、一九九三年に開設された慶應義塾唯一の芸術を専門とする研究所です。展覧会やパフォーマンス、講演会など、芸術に関連するイベントを開催するだけではなく、一九九八年からはアート・アーカイヴの理論研究と実践、十一年からはミュージアムとしての活動を展開しています。

このアーカイヴとミュージアムという2つの実践をもとに二〇一六年からスタートしたのが、学術情報を通じて地域の文化資源を接続するプロジェクト「都市のカルチュラル・ナラティヴ」です。

港区という都市

慶應義塾大学は、一八五八年に創立された日本で有数の歴史を持つ総合大学で、一八六八年から港区に所在しています。慶應義塾と港区との関わりは、今年二〇一八年でちょうど一五〇年になりますが、港区は、現在においても過去においても、豊かな文化の土壌となっています。

過去に目をむけてみると、江戸の玄関口であった港区には、様々な史跡が残されています。江戸と京都をつなぐ東海道は国道一号線として町を通り、高輪では高輪大木戸をいまも見ることができます。またこの地域は、大名屋敷と寺院の町としても知られていました。徳川将軍家代々の霊廟をもつ増上寺や、赤穂浪士の物語の舞台でもある泉岳寺など、江戸時代からの寺院が多く活動する一方、かつての大名屋敷は、徳川家の屋敷跡に立つ迎賓館、あるいは松平家の屋敷跡に立つ慶應義塾など、あらたな役割と機能を得ています。

このように豊かな史跡を有する港区は、同時に現代の文化芸術の集積地でもあります。僅か20㎢ほどのエリアに、12,000カ所を超えるアート・スペースが集まり、日々あたらしい創造が試みられています。つまり港区は、歴史や伝統文化に関心がある人々と、現代の芸術文化に関心がある人々の双方を惹きつける、タイムレンジの広い文化を擁する都市と考えることができます。

「都市の文化」は伝わりづらい？

現代芸術の研究所ということもあり、アート・センターには国内外から現代芸術の研究者やアーティストが訪れます。彼らは調査研究のかたわら、周辺を非常に精力的に観光して回るのですが、彼らと話をしていると、港区の文化資源のもつ過去と現在をまたぐダイナミズムが、どうもうまく伝わっていないと感じることがあります。つまり、現代文化と伝統文化が別個のものとしてそれぞれ独立して認識され、あまり両者が関連づけられていないのです。

伝統文化と現代文化が同じ場所で展開しているとき、両者にはかならず共有の文化の物語があり、互いに影響を与えあっているはずです。しかしこの2つの文化の連関は、とくに外国からの来訪者にとっては、けして自明なものではありません。

伝統文化と現代文化、またそれぞれの文化にまつわる文化資源を結びあわせ、過去から現在へとつながる都市文化の物語を改めて示すためにはどうすればよいのか。そのような問いを立てたとき、大学や文化機関などにおける学術研究活動の重要性が浮かび上がってきました。

学術研究活動が浮き彫りにする文化のつながり

展覧会やイベントといった、文化に関連する様々な活動の背後には、その文化資源に対する学術的な調査研究の裏づけがあります。これらの調査研究は、相互に参照しあいながら、時代や場所を越えた文化資源のつながりを描きだしています。その成果は、書籍や論考、レクチャーなどの形で公にされていますが、アクセスしやすい状態になっているかというと、そうとも限りません。学会誌や専門誌に掲載された論文は、手に入れるのになかなか苦労しますし、レクチャーで配布されたレジュメなど、その場にいないと入手できない資料も多くあります。

展覧会やイベントへの参加を通じて、文化資源への知的好奇心が生まれ、その好奇心が学術情報のネットワークに出会って、関連する別の文化資源へと飛び移っていく。そのような循環を生み出すことができれば、都市文化の物語はもっと分かりやすくなります。しかし現実には、学術研究情報へのアクセスが充分確保されていないために、好奇心が行き場を失って迷うような状況になっているのではないでしょうか。

そこで、「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクトでは、文化資源を巡る学術活動のアクセシビリティを高めることによって、地域に存在する文化資源の、時と場所を横断するダイナミックな連関を浮かび上がらせたいと考えています。

プロジェクトの活動

プロジェクトの活動の中心は、調査研究と成果発信です。

調査研究では、（1）港区の「カルチュラル・ナラティヴ（都市文化の物語）」を明らかにするため、港区の歴史・文化の調査、他の都市との比較を行う（2）文化機関などに所在する文化資源を調査する（3）港区や他地域において先行するプロジェクトを調査する（4）情報発信の手法、とくにウェブベースの手法に関して、国内外の事例調査を行う　の4項目に重点を置いています。

成果発信としては、（1）港区の歴史や文化観光など、特定のテーマを設定したシンポジウムやレクチャーの開催（2）プロジェクトマガジン『ARTEFACT（アルテファクト）』の刊行（3）ワークショップやガイドツアーなど、参加型イベントの企画（4）留学生を通じた国際連携と発信の試み　を予定しています。

このプロジェクトでは、新しい情報を作るのではなく、すでにある情報を丁寧に取り上げてつないでいくこと、また、ミュージアム以外のカルチュラル・セクターの協力を得ることに力を注いでいます。とくに後者については、アート・アーカイヴを20年に渡って実践してきた経験をいかして、文化の担い手の元に眠っている、普段は注目を集めることが少ない文化資源の顕在化を計りたいと考えています。二〇一八年三月現在、増上寺、泉岳寺、虎屋文庫、味の素食文化センター、NHK放送博物館、草月会、Japan Cultural Research Institute がプロジェクトメンバーとして参加しています。

プロジェクトを育てる

二〇二〇年に東京でオリンピックが開催されることもあり、現在都内の各地で地域の文化資源を連携させる試みが行われています。たとえば、上野公園を中心にミュージアムなどの文化施設、寺社、大学が連携して文化資源の顕在化をはかる「上野文化の杜」は、文化施設や大学だけではなく、国や都の行政が関わる大規模なプロジェクトです。また、大学を拠点とした取り組みとしては、本誌の「お隣研究紹介」（19ページ）でも取り上げた、國學院大學の渋谷学を中心にしたプロジェクトなどがあります。海外では、大学が地域と一体となって行う学術・文化フェスティバルが、「Festival of Ideas」という名称のもとに行われています。

「都市のカルチュラル・ナラティヴ」は、まだはじまったばかりのプロジェクトですが、こういった先行プロジェクトによく学んで、活動を育てていきたいと考えています。

LECTURE The Keio University Area during the Late Edo and Early Meiji Eras

幕末明治の慶應義塾周辺

増上寺、愛宕社から高輪・三田界隈

内藤 正人（慶應義塾大学文学部教授／同アート・センター 所長）

1 描かれた江戸の範囲——江戸図と、江戸名所図屏風

［図1］は、もともとの江戸の海岸線を推定したものです。もちろんこれ以前、例えば中世の頃には、江戸時代「大川」といっていた隅田川の右側、いまの墨田区・江東区のあたりが浮島になっている推定地図もあります。陸地ではなかったところを、埋め立ててこの形になってきているということです。そもそも、「江戸」は、入江の戸（入口）という言葉です。その入江がどこを指すかという1つの有力な説がこの図にあります。現在の日比谷の辺りは、日比谷入江といって、江戸城に向かってかなり深く入り江になっていたということが知られています。そこへ徳川家康が一五九〇年に豊臣秀吉から国替えを命じられてやってきた。巷説によれば、そのときいまの葛飾区、つまり隅田川の上の方の青戸にも城があり、青戸とこの江戸、その選択もなされたということも言われているようです。

しかし、江戸時代に入ると、急速に市街化が図られます。例えば有名なのは、神田山と当時呼ばれていた駿河台近辺の土を切り崩して、入り江の浅瀬を埋めるということですね。市街地を増やして、そこに大名屋敷を誘致したわけです。

その古い江戸ですが、もともと中世以前には江戸は、東北へ延びていく街道のハブ、物流の拠点でした。その後家康がやってきて、土木工事を盛んに行って、どんどん拡大していった。しかもその後一六〇三年には、徳川幕府がつくられますから、これによって、全国から流入民が大量に入ってきました。江戸の人口はどんどん増えていって、幕末にはもう一〇〇万人ぐらいいた。これはパリよりも大きかったということですから、大変な人口の集積地であったということは、もう言うまでもないことです。

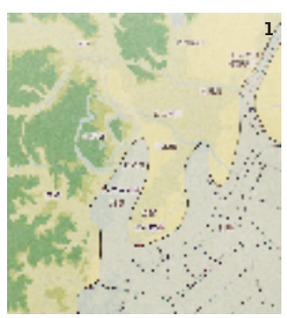
ただ、私たちが持っているいわゆる江戸のイメージというのは、恐らくはほとんど19世紀の幕末の江戸のイメージではないかと思っています。例えば、私の専門の浮世絵、それから歌舞伎、落語等もそうですが、いま、現代人が触れることのできる江戸の文化の多くは、かなりのものが江戸の後期の文化です。一言で江戸時代といっても、実際には2世紀半以上、二七〇年ほどもあるものですから、江戸時代のどこのイメージかで随分変わってくる。たとえば、いま私たちは二〇一七年に生きておりますけど、一〇〇年さかのぼると大正ぐらいです。一方江戸時代は、幕末から一〇〇年さかのぼっても江戸時代のまま。そういうタイムスケールで考えてみると、江戸の古い頃のイメージというのは、知ることは実は難しいのです。

ただし、古い江戸に関する有名な資料に、一六二四年から始まる江戸前期、寛永年間に印刷された江戸図があります。［図2］これは地図ですので、いろいろなものの位置関係や街路、道を正確に把握するためにつくられたものですが、実は現在の港区がほとんど含まれていません。江戸城、あるいはいまの丸の内界隈を中心にして、江戸というイメージが当時どんなエリアを指していたのかが、これで分かると思います。［M1］

ところで、古い江戸を絵として描いた作品は、非常に少ないのです。都市の景観図については、中世の頃、室町時代の後期（16世紀頃）から、京都で「洛中洛外図」と呼ばれる図が盛んにつくられました。［図3］洛中は京都の市街地、洛外は都の郊外で、つまり京都の中と外を一望に描く屏風絵ということです。［M2］

これは地図ではないので、ひとつには絵空事ということがあります。京都は平安京以来の伝統を誇っていますので、たくさんのランドマークが都市の中にある。すべてを描くわけではなくて、その主だったものだけ、取り上げるべきものだけをピックアップして描いて、あとの部分は金の雲で埋めてしまう。これは西洋にはない描き方ですから、西洋人にとっては、表現としては面白いようです。

同じような洛中洛外図としては、織田信長が上杉謙信にプレゼントした作品が、ずっと上杉家に伝来して、上杉本と呼ばれて、いま国宝になっています。信長が謙信に贈った意味ですが、恐らくは、「下剋上の時代、自分も、それからあなたもいずれ都を押さえたい」というイメージが投影されているとも考えられます。大きな都市の景観を描くということの背景が何だったか、意味はどういうものであるかが、ひとつ読み取れるわけです。



［図1］16世紀後半の江戸の地形　［図2］武州豊嶋郡江戸［庄］図　［図3］洛中洛外図屏風（旧町田家本、国立歴史民俗博物館、重要文化財）

本テキストは、二〇一七年十一月十八日に開催された講演会「都市文化の物語：港区文化資源の近世と現代」の書き起こし原稿を元に編集したものである。伊坂氏の講演内容については、40ページを参照のこと。

［図4］江戸名所図屏風（出光美術館蔵、重要文化財）

それに対して、われらの江戸は非常に分が悪い。つまり、新興都市・江戸は、こういった屏風絵の主題としてあまり頻繁に取り上げられないわけです。現在残っている作例は数えるほどで、特に江戸の全景をとらえるような大型の屏風というのは本当に少ないです。

ただし、寛永年間ぐらいの江戸の風俗を読み取ることができると考えられている屏風に、《江戸名所図屏風》（出光美術館蔵、重要文化財）があります。［図4］

この作品は八曲一双屏風で、右隻からはじまって、隅田川、浅草寺、神田明神など、色々な名所が描いてあります。そして左隻にかけて日本橋、江戸城、いまのいわゆる銀座界隈から湾岸があって、増上寺に来る。この構成は、冒頭の江戸図ともかなり近い。つまり、港区の描写は事実上、増上寺で止まっているということになります。この後、江戸時代の後期になると歌川広重などの浮世絵師が出てきて、港区あたりの景観をたくさん描きますが、今見ている江戸図は、江戸前期の都市のイメージを伝えているわけですね。

この屏風絵の中に、大名屋敷が描いてあります。大名屋敷は、江戸城の周りにたくさんありましたが、この屏風では1つしか描いていない。これはちょっと謎めいているんですね。そしてその大名屋敷の門［図4c］は、日光東照宮を思わせるような、非常に絢爛豪華なものになっています。これは、われわれが時代劇等で見るような、あるいは、現代に残っている東京国立博物館にある黒門や、東京大学の赤門のような地味な門じゃなくて、ど派手な金箔を貼った門です。このような門は、江戸前期、およそ江戸時代が始まってから半世紀しかなかった。というのも、一六五七年に有名な大火災（明暦の大火）があって、江戸の街が灰燼に帰してしまったからです。

このような門は「御成門」と呼ばれますが、各大名家が将軍を招こうとして、競って作った特別の門です。お金をかけて、非常にゴージャスなものをつくっていたということです。

この屏風をさらに見ていくと、いまの一般的な江戸のイメージとはかなり違う部分があります。例えば江戸城に天守閣がある。天守閣［図4d］は、何度か作られたのですが燃えてしまって、最終的には保科正之が建言して、もう太平の世だから必要ないということになりました。しかしこの屏風は、寛永年間の景観を描いているので、非常に立派な天守閣があって、しかも金のしゃちほこが乗っている。金鯱というと、いまは、御三家筆頭の尾張徳川家の居城、名古屋城の専売特許なんですが、実は江戸城に天守閣があったときには金鯱をともなっていたことを、この屏風は教えてくれます。

それから、浅草寺の境内も描かれている。浅草寺の右には隅田川が流れています。この後、下流に両国橋

［M0］本文中の注釈［M1〜9］では、ARTEFACT編集部員が作業中に参照・収集した関連情報を紹介しています。オンラインのリソースが多いので、是非チェックしてみてください。ちなみにMは、marginalia（欄外書込）のエムです。よろしくどうぞ！

［M1］国立国会図書館が、古地図の調べかたを「リサーチ・ナビ」で紹介しています。https://mavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-tonbun-101029.php　また、地図だけではなく浮世絵なども含む江戸に関する資料は、東京都立図書館（東京アーカイヴ）によくまとまっています。http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/top

［M2］国立歴史民俗博物館が高精細画像を公開中。さまざまな洛中洛外図を所蔵しています。https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/webgallery/webgallery_fo.html
さらに、洛中洛外図屏風に描かれた人物を一人一人切り出して、データベースを作っています。様々な人々の生活が垣間見えて、面白いですね！
http://www.rekihaku.ac.jp/rakuchu-rakugai/DB/kohon_research/kohon_people_DB.php

が架けられますが、これは両国橋さえもない時代ですので、全く隅田川に橋がかかっていない状況です。ずっと北の方に千住大橋というのがありましたが、基本は全部渡し船で行き来していました。浅草寺には三重塔が建っています。いまは五重塔がありますが、五重塔は江戸時代には別のところに建っていまして、別の資料によると、寛永年間頃に浅草寺の境内に、三重塔と五重塔が対になって建っていたこともあるようです。それからもう1つ、いまの景観と違うのは、能舞台があるところですね。

あと、今の言葉でいうと「コスプレ」ですが、江戸の庶民が仮装して楽しんでいる様子があります。昔の武将たちが戦場で流れ矢に当たらないように背負っていた母衣（ほろ）［図4e］が描かれていますが、これも完全なコスプレで、古い時代の武将の姿を町人が面白がってやっている。山高帽をかぶってマントを着て、南蛮人のファッションをしている人もいる。いま、ハロウィンの仮装が非常に盛んですが、日本人にはもともとこういう文化的な伝統があるわけですね。江戸時代、お祭りのときには、みんな仮装して楽しんでいた。これは三社祭ですが、いわゆる天下祭りと言われた山王祭と神田祭でも、やっぱり町人たちが仮装しています。仮装というのは、この国では、日常の鬱憤を発散する、非常に大事な場であったことが分かります。

歌舞伎小屋も描かれていますが、この時代はそろそろ女歌舞伎が禁止になる頃です。ですから、描かれているのは美少年歌舞伎です。当時の歌舞伎は非常にセクシーなものであったと言われていますが、美少年が非常になまめかしい格好をして、煽情的なダンスを踊ったりしています。観客には男性も女性もいましたが、こういう絵を見ると分かるのは、江戸の街に男性が多い事実。江戸の男女比は7対3ぐらいで、大阪や京都と違って、男性が非常に多い都市だったと知られています。

さて、舞台の上で扇をかざして舞っている人［図4f］がいますが、どこかで見た構図です。後に風俗画の画軸に描かれるようになって、これが浮世絵になるんですね。もともと浮世絵というのは単独像の美人画や役者絵が多いですが、起源はこういう大画面の風俗画にあります。このような都市景観図の姿をかりて、当時の人々の風俗が描かれている。その暮らしの中のワンシーンを抜き出していった絵が浮世絵に繋がるわけです。

吉原遊郭もあります。［図4g］いわゆる時代小説などによく出てくる吉原と違い、江戸時代が始まってほぼ半世紀の間、いまの人形町付近にあった元吉原です。それを移転して浅草の田んぼの中に人工的につくったのが新吉原という、われわれがよく言う吉原です。この絵は古いものですから、元吉原が湾岸にあって、それが興味深いですね。

4g

4h

いまの港区のあたりを見ますと、芝浦海岸がありまして、江戸湊があります。そして東海道がのびていて、大きなランドマークとして増上寺があります。［図4h］実は、この屏風の右隻の右端には寛永寺が描いてある。つまり、江戸のイメージは、湾岸に沿った細長いもので、北の果てが寛永寺、南端が増上寺です。寛永寺は天台宗、増上寺は浄土宗の寺ですけれども、どちらも将軍家の菩提所として権威がありました。この屏風でも、増上寺が南限で、東海道の先には品川があるということが暗示されています。

2 三田の周辺風景——描かれた港区の名所

ここから港区三田の周辺ということで、港区の名所を見ていきたいと思います。普通だと有名な『江戸名所図会』を出すのですが、今日はそれだと面白くないので、違う資料を出したいと思います。［M3］

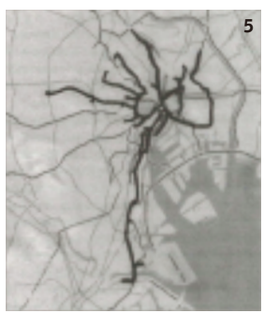
『江戸名所独案内』という、幕末、一八四六（弘化三）年に出された中本があります。もともと幕末の恋愛小説、人情本の著者として人気だった松亭金水という江戸の戯作者が、天保の改革以降、なかなかそういう著作を出せなくなってしまいまして、こういう名所ものを描いたり、あるいは教訓ものを書いたりしていました。つまりこの本は、江戸のお上りさん向けのガイドブックなんですね。地方から江戸に上がってきた人が、江戸のどこを見たらいいのかということを、懇切丁寧に説明してある本です。ガイドブックとしては非常にハンディで的を射たものです。その本の中にガイドしてある道筋を、すこしなぞってみたのが［図5］です。

江戸の東西南北のうち、南側は結構長く紹介してあります。というのも、南の一番端が川崎大師になっているからです。こうやって見ると、南にはなかなか見どころがあったんだなと思われるかもしれませんけど、実はそうも言えない。この本では、日本橋が起点になって、そこから東西南北で説明しています。

「日本橋より南の方を通り壱丁目といひ、その次二丁め、三丁め、四丁めを過て、中ばしとなる。」

「此所二丁余ありて橋あり。これを京橋といふ。」

［M3］江戸名所図会は筑摩書房から刊行されています。市古夏生・鈴木健一『新訂 江戸名所図会』筑摩書房


5

［図5］『江戸名所独案内』の道筋

中橋は、いまの東京駅辺りにあった、日本橋からずっと東海道を上ってきた最初の橋です。幕末の頃にはすでに無くなっていましたが、地名となって残っていました。

そして出てくるのが「京橋」ということで、いまの銀座の入り口ということになります。

6

7a

7b

7c

8

9

[図6] 歌川広重《東都名所 日本橋之白雨》 [図7a] 歌川広重《東都司馬八景 愛宕山暮雪》
[図7b] 歌川広重《東都名所 芝愛宕山上之図》 [図7c] 月岡芳年《東錦浮世稿談 曲木平九郎》
[図8] 歌川広重《名所江戸百景 増上寺・赤羽根橋》 [図9] 川瀬巴水《芝増上寺》(一九二五)

「夫より銀座丁、尾張丁などすぎてまた小さき橋あり。これを新ばしといふ。是より芝口にてまつ直にゆけば、芝、田町、高輪、それより品川宿へ出るとしるべし。」

「右の方に大門あり。これ芝増上寺なり。」

「是は恐多くも
上様の御ぼだい所にして、きれいさうくわん善美をつくし、御山門の広大なる御霊屋三ヶ所あり。三十六の
しゆくばうそのほか、さま〳〵の堂社多く、こゝにのべつくすべからず。」

「増上寺より西のかたにあたりて、高き山あり。これを芝愛宕といふ。石階百二十だん余といへり。」

「この山より見おろせば、芝浦のけしき、ゆきかふ船の帆じゆん風にはしるさま、いはんかたなし。この下通り増上寺までを、すべてあたご下といふ。(…)増上寺のうらてを、切通しといふ。夫より赤羽根といふ所へ出てむかふに、有馬様の御やしきあり。毎月五日さんけいをゆるされ、諸人おひたゝしくくんしゆをなせり。」

「夫より芝札の辻へ出て、」

「海辺をゆけば高輪といふ。こゝに牛小屋ありて、諸方へ車をひき出すなり。この所に泉岳寺といふ禅寺あり。こゝにむかし赤穂の義士四十六人を葬りたる墓あり。常にさんけいをゆるす。それより先に東海寺といふあり。沢庵和尚の古せきなり。それよりゆけば、右を八つ山といひ、左りは海なり。東海道品川宿へ出る。」

江戸、日本橋からずっと南の方を歩いてきているわけですが、港区周辺の名所はやはり増上寺、泉岳寺、愛宕社です。やはりお上りさん向けに江戸の戯作者がどうしても紹介したい場所というのは、こういうエリアになるようですね。[M4]

さて浮世絵といえば、浮世絵の歴史の最末期、19世紀以降に風景を描く版画が出てきます。葛飾北斎、

増上寺のあたりを見ると、浜松町にたどり着いてから、ちょっと脇道にそれます。

「上様」の部分で、上様を下におけないので改行しているのが江戸時代ですね。見どころとして、お上りさんは全員増上寺を見てください、と書いてある。

険しいですね。

慶應大学の東門を出て北に赤羽橋がありますが、その辺りのことを教えてくれます。大名家有馬屋敷の中に、水天宮があったんですね。それで一般の人に日にちを限って参詣を許したわけです。

これもう慶應を過ぎて、札の辻、今のバンダイナムコの本社があるところです。

[M4]さらに詳しく知りたい人は、アート・センター Booklet 18『文化観光：「観光」のリマスタリング』を手にとって見てください。翻刻が掲載されています。また、内藤正人先生は、慶應義塾大学の授業で江戸名所独案内をテキストにすることもあるようですよ！

10

11

12b

12a

［図10］歌川広重《東都司馬八景 田町秋月》
［図11］歌川広重《東都名所 芝赤羽根之雪》
［図12a］歌川広重《東都名所 高輪月夜》
［図12b］現在の高輪大木戸

あるいは歌川広重のような人たちが名所絵として江戸の景観を描き残してくれたわけです。［M5］

基本的に浮世絵は人がいつも集まってにぎわっている場所、日本橋［図6］であるとか、あるいは両国橋とかが多くて、このあたりを描いているものは比較すると少ないです。しかしありがたいことに広重が、「東都司馬八景」という、このエリアだけの8つの名所を描いた版画集を残しています。［M6］

愛宕山［図7a］は、いまは周りに高層ビルが建ってしまって、全く海側が見えませんが、江戸時代は、街中で最も標高があって、非常に重宝がられました。幕末にイタリア人の写真家ベアトがここで撮った写真も残っていますね。

広重が描いた愛宕社のこの版画［図7b］には、珍しいことに虹が出ています。浮世絵もそうですが、虹を表現する版画って非常に少ないですよ。だからこれはそういう意味で面白い。後年に芳年も描いた、有名な愛宕社の図には、曲木平九郎が命じられて馬で上ったという伝承があります。［図7c］あの階段を馬が上がるというのは本当に信じられないんですけど、昭和の頃にもテレビ等で実演していましたね。［M7］

増上寺は、やはり広重もどうしても落とせないということで、何図も描いています。［図8］広重が亡くなった頃に描いた「名所江戸百景」にもあります。先ほど『江戸名所独案内』に「きれいさうくわん善美をつくし」とありましたが、非常に立派な建物であるということが、版画からも解ります。近代になっても増上寺は時折描かれていて、川瀬巴水は、増上寺の山門の、雪の舞っている頃の景色を描いています。［図9］［M8］

《田町秋月》という作品が、先ほど紹介した「司馬八景」に入っています。［図10］田町八幡は東海道沿いに位置している八幡様ですが、その八幡様から見た海岸の景色を描いています。これが広重の描いた田町なんですね。

《芝赤羽根之雪》という作品では、左手に増上寺、右手に先ほど出てきた「有馬様のお屋敷」があります。［図11］このお屋敷の中に水天宮があって、日を限って毎月一般の人の参詣も許していたということが知られているわけです。いまも何となく頭の中で補完しながら見ると、こんな風景に見えなくもないですが、かなり隔世の感がありますね。

つぎに、高輪の大木戸ですが、高輪は江戸時代の月の名所として、二十六夜待ちなどの題で版画にもよく描かれています。この木戸を出ると江戸の外になり、最初の宿場である品川宿に向かうということです。ご存じのとおり、大木戸の石垣は現在も残っています。［図12］

［M5］現代の風景と浮世絵を重ね合わせて楽しむウェブサイトやアプリがリリースされています。
国立国会図書館「錦絵で楽しむ江戸の名所」http://www.ndl.go.jp/landmarks/tokyo/minato.html
早稲田システム開発「浮世絵で歩く日本の名所」https://tp.jmapps.ne.jp/ukiyoe/
また、都市の景観と結びつきが強いことから、浮世絵について CiNii などで調べると、美術史だけではなく都市計画や建築などの領域でも研究対象とされている様子がわかります。たとえば：
「広重の浮世絵風景画を手がかりとした景観まちづくり手法に関する研究」
https://ci.nii.ac.jp/naid/110009628395
「広重の浮世絵における月の景観の構成と視点場探索手法に関する研究」
https://doi.org/10.3130/aija.74.161

［M6］「東都司馬八景」は位置情報ゲーム「イングレス（Ingress）」のミッションにもなっているようです。愛宕神社ももちろん、ポータルになっています。

［M7］大正時代にNHKラジオで放送されました。http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/yukari/jl/trivia-detail.cgi?id=1

［M8］川瀬巴水の作品は、ヨーロッパの美術館にも収蔵されていて、Google Art and Culture でも取り上げられています。高精細の画像が公開されていますー https://www.google.com/culturalinstitute/beta/asset/het-zojo-heiligdom-in-shiba/7AGAXHJ0IKyrC6Q

3 松山藩松平家下屋敷の状況——俳人・内藤鳴雪の証言

最後に「松山藩松平家下屋敷の状況」ということで、明治の俳人、内藤鳴雪の自叙伝を使いながら、慶應義塾周辺の様子が記録されている資料を紹介したいと思います。

慶應義塾大学は、松平主殿頭の屋敷跡、つまり島原藩松平家の屋敷跡に建っています。北側に隣接するイタリア大使館は松平隠岐守、つまり四国の松平家の屋敷でした。綱坂を挟んだいまの慶應義塾中等部の校地は、松平肥後守、つまり会津藩の松平家の屋敷跡で、このあたりはすべて松平家の大名屋敷跡ということになります。

大学内にも、古くは大名家の遺構があったということです。例えば月波楼という、遠くを見物できる建物は『江戸名所図会』にも載っていまして、「この地の眺望、実に洞庭の風景を縮めたるがごとく、岳陽の大観を摸するに似たり。」と、中国・洞庭湖のような素晴らしい景観だと書いて褒めちぎっています。この月波楼がかつて、大学の敷地の中にあった頃の写真も残っています。[図13]

さて、内藤鳴雪は伊予松山藩士で、いまのイタリア大使館がある、松山藩松平家にいた人です。慶応3年に昌平坂学問所に入って、その後大学本校で学んだ人ですが、当時漢詩を教えていた弟子の正岡子規に、後に逆に俳句を学ぶようになり、俳人になったということで有名です。「馬方の馬にものいふ夜寒かな」「八朔の雲見る人や橋の上」など、いろいろな秀句があります。この人が晩年に自叙伝を書いて、愛宕社、増上寺から慶應義塾あたりまでのことを書き残していますので、最後にご紹介したいと思います。

「大名の屋敷はその頃上屋敷中屋敷下屋敷と三ヶ所に分って構えたもので、私の君侯の上屋敷は芝愛宕下にあり、中屋敷は三田一丁目にあり、下屋敷は深川や目黒や田町などにあった。この中屋敷で私は生れたのである。」

「ちょうど今の慶応義塾の北隣の高台で、今はいろいろに分割されているが、あの総てが中屋敷であった。慶応義塾の下に春日神社が今でもあるが、あれが、私の産土神で、あの社へお宮参りもしたのであった。」

「その頃は、今の芝の公園と愛宕の山との界の所を『切通し』といった。ここは昼の見世物や飲食店が出て、夕方には一面に夜鷹の小屋が立って、各藩邸の下部などが遊びに出かけて、随分宵のうちは賑ったが、これが仕舞うと非常に寂しくなった。」

[図13] 慶應義塾内に残っていた月波楼

つまり、今のイタリア大使館の辺りですね。

まさにこの場所で生まれ育った人です。

非常に赤裸々な現実を書いてありますね。

「その時分になると、ここで辻斬がよくあった。」

「芝の増上寺の境内は、今の公園の総てがそれで、その頃は幕府の御菩提所というので威張っていた。」

「私の中屋敷から愛宕下の上屋敷へ行くのには、飯倉の通りから、この切通しを回ったが、赤羽から増上寺の中を抜けて行くと大変近いのである。」

「私どもの君侯は上屋敷に居られ、中屋敷には若殿が居られたので、この間の藩士の往来は頻繁であった。これらが増上寺の境内を通るので、その抜ける事は許されていたが、もし弁当を携えているとやかましかった。」

「私も家族に連れられて増上寺境内は度々通った。怖い心持がいつもした。あの赤羽から這入ると左側に閻魔堂がある。あれも怖かった。(…) その隣に瘡守稲荷があって、天井に墨絵の龍が描いてあった。(…) 東照宮の祭の日にはいつも参詣をした。今の表門はその頃台徳院廟の方へ向いており、外には塀があり、中は石が敷いてあった。この表門から中は履物をつけることを禁じてあったので皆跣足で這入った。」

「私の藩邸から近い縁日では、有馬邸の水天宮が盛んで、その頃江戸一番という群集であった。毎月五日であったが、子供や女連だけでは迚も水天宮の門の中へ這入ることはむずかしい (…)」

「その次に縁日の盛んなのは、十日の虎ノ門の金毘羅であった。これは京極の邸に在った。その邸の門を出入することも水天宮の如く甚だ困難であった。次には廿四日の愛宕の縁日で、よくこの日は私は肩車に乗って男坂を上ったものだ。」

などなど、読めば読むほど三田周辺の面白い話が出てきます。[M9]

江戸時代は、われわれにとっては、近くて遠い不思議な世界です。港区の過去現在、そして未来を考える上で、今日のお話が少しでも、何らかのお役に立てば幸いです。

今はとても信じられないですが、広尾の辺りでも辻斬りがあったという記録がありますね。夜になると寂しいところだったようです。鳴雪は松平藩の藩士であり、将軍家菩提所のお寺は非常に権威があったということですね。増上寺の皆さんは、いまは非常に親切、丁寧ですよ！これは分かりますよね。ショートカットです。

つまり生臭（魚など）があると駄目だと。それで苦労したと書いています。

われわれは平気で靴で入っていますけれども、これが江戸時代らしいですね。

大変な賑わいだったことがわかります。

[M9]『鳴雪自叙伝』(一九一二) は、青空文庫でも読めます！
http://www.aozora.gr.jp/cards/000684/files/4829_35079.html

図版出典

［図1］16世紀後半の江戸の地形：港区立港郷土資料館編「江戸図の世界：平成二十二年度港区立港郷土資料館特別展」港区立港郷土資料館、二〇一〇年
［図2］武州豊嶋郡江戸〔庄〕図：国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286168）
［図3］《洛中洛外図屏風》（旧町田家本、国立歴史民俗博物館、重要文化財）：『日本屏風絵集成　第十一巻　風俗画　洛中洛外』講談社発行、一九七八年
［図4］《江戸名所図屏風》（出光美術館蔵、重要文化財）：内藤正人『江戸名所図屏風――大江戸劇場の幕が開く』小学館、二〇〇三年
［図5］『江戸名所独案内』の道筋：慶應義塾大学アート・センター Booklet 18『文化観光：「観光」のリマスタリング』二〇一〇年
［図6］歌川広重《東都名所　日本橋之白雨》：国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1302097）
［図7］歌川広重《東都司馬八景　愛宕山暮雪》：William S. and John T. Spaulding Collection, Museum of Fine Arts Boston／歌川広重《東都名所　芝愛宕山上之図》：Metropolitan Museum of Art, Purchase, Joseph Pulitzer Bequest, 1918（https://metmuseum.org/art/collection/search/37057）／月岡芳年《東錦浮世稿談曲木平九郎》：立命館アート・リサーチセンター（colGNo. arcUP5256）
［図8］歌川広重《名所江戸百景　増上寺・赤羽根橋》：国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1311897）
［図9］川瀬巴水《芝増上寺》：Rijksmuseum, Purchased with the support of the F.G. Waller-Fonds（http://hdl.handle.net/110934/RM0001.collect.47568）
［図10］歌川広重《東都司馬八景　田町秋月》：『広重　江戸風景版画大聚成』酒井雁高編、小学館発行、一九九六年
［図11］歌川広重《東都名所　芝赤羽根之雪》：Metropolitan Museum of Art, Gift of Mrs. Morris Manges, in memory of her husband, Dr. Morris Manges, 1947（https://www.metmuseum.org/art/collection/search/56495）
［図12］歌川広重《東都名所　高輪月夜》：『広重　江戸風景版画大聚成』酒井雁高編、小学館発行、一九九六年
［図13］慶應義塾内に残っていた月波楼：慶應義塾写真データベース（慶應義塾校舎一覧　東京三田　寫真版）

講師プロフィール

内藤正人（ないとう・まさと）
一九八六年、慶應義塾大学文学部史学科国史学専攻卒業、八八年慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻修士 修了。出光美術館主任学芸員を経て二〇〇七年より現職。博士（美学）。主な研究対象は、江戸時代絵画史・版画史で、数多くの著作を持つ。近年の作に、『うき世と浮世絵』（東京大学出版会：二〇一七）、「歌麿と同時代の絵師たち、および歌麿イズムの継承者たち」（『歌麿　決定版』平凡社：二〇一六）、「江戸期の浮世絵と、その享受」（『アートと社会』東京書籍：二〇一六）、『高校美術3』（平成二七年度版教科書、日本文教出版：二〇一五）など。「北斎漫画の研究――とくにその初編を中心に」で第一回鹿島美術財団賞（一九九四）、「浮世絵師勝川春章・歌川広重に関する、さらには浮世絵と貴人の支援者に関する、それぞれの独創的な研究に対して」で第九回国際浮世絵学会賞（二〇一五）を受賞。

お隣研究紹介
國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会

秋野淳一（國學院大學　研究開発推進機構客員研究員）
高久舞（國學院大學　研究開発推進機構客員研究員）

都市のカルチュラル・ナラティヴと近しい関心のもと活動している団体や研究所を紹介するコーナー「お隣研究紹介」の第一回は、國學院大學研究開発推進センター渋谷学研究会です。アート・センターの松谷と本間が、渋谷学研究会の秋野氏、高久氏にお話を伺いました。

渋谷学は、本プロジェクトの大先輩ともいえる活動で、國學院大學120周年の記念事業の一貫として2002年に発足しました。渋谷区や、東急電鉄株式会社などと連携し、民俗学者の倉石忠彦（國學院大學名誉教授）と、歴史学者の上山和雄（國學院大學名誉教授）を中心に熱心な研究活動が開始され、学生だけでなく、地域の人へ開かれた総合講座「渋谷学」が開講しました。いまや「渋谷学」という名を耳にしたことがある方も多いことかと思いますが、軌道にのるまで苦労されたとのこと。2010年に活動を再開し、渋谷学研究会では、地域と連携した活動を行い、その成果として渋谷学ブックレットや渋谷学叢書を多数刊行しています。

若者文化の発信地として、SHIBUYA109やギャルなどのイメージが強い「渋谷」ですが、繁華街の合間に、道祖神や、神社も残り、一枚層を剥げば、古いレイヤーが残っています。渋谷学研究会の開催するまち歩き「渋谷の記憶を辿る」は、センター街や、ハチ公といった現代の名所や、金王八幡宮などの由緒ある寺社などの混在する、混沌とした渋谷の街を、宗教社会学を専門とする秋野氏、民俗学を専門とする高久氏など、専門家の解説を聞きながら、現在と歴史の交差を楽しみながら歩くイベントです。特に渋谷在住の方に人気なのは、「春の小川」の歌でなじみある渋谷川を歩くコースとのことでしたが、渋谷という繁華街で行うツアーは、マイクの声が届かないなど苦労も沢山あり、我々もガイドツアーへのアドヴァイスを沢山いただきました。

國學院大學は、大学博物館と地域の白根記念渋谷区郷土博物館・文学館と連携し、共同の展覧会を企画するなど、地域との連携を積極的に行ってきました。まさに「渋谷」地域に立脚する大学としての存在感をアピールし、それを大学⇔地域の双方が生かして、新たな価値に繋げているのですね。　（記＝松谷芙美）

「渋谷学」とは

國學院が立地する「渋谷」を対象として「渋谷を科学する」をテーマに、歴史学・民俗学・地理学・宗教学・経済学などを軸に据えた学際的な研究を行うのみならず、地域社会との連携や地域社会への貢献を視野に入れた取り組み。

おすすめの刊行物

- 渋谷学ブックレット2『地元を「科学する」ということ――地域学の比較から考える』、國學院大学研究開発推進センター渋谷学研究会編集、國學院大学研究開発推進センター発行、平成23（2011）年2月
- 渋谷学ブックレット3『渋谷を描く』、國學院大学研究開発推進センター渋谷学研究会編集、國學院大学研究開発推進センター発行、平成24（2012）年3月
- 渋谷学ブックレット4『結節点としての渋谷――江戸から東京へ』、國學院大学研究開発推進センター渋谷学研究会編集、國學院大学研究開発推進センター発行、平成26（2014）年3月
- 別冊渋谷学ブックレット『渋谷らしさの近未来』、國學院大学研究開発推進センター渋谷学研究会田原裕子編集、國學院大学研究開発推進センター発行、平成28（2016）年11月
- 『まち歩き　渋谷の記憶を辿る』國學院大学研究開発推進センター渋谷学研究会・國學院大学博物館　編集・発行、平成28（2016）年3月

GUIDE TOUR

慶應義塾と三田の名建築

建築ガイドツアー

The Renowned Architectures in Keio University and Mita Area

開催概要

日時：12月16日（土）13時15分〜16時15分

講師：米山勇（江戸東京博物館研究員）

参加者：39人（慶應義塾大学在校生・留学生・塾員・港区民）

ツアー行程

1. 慶應義塾大学アート・センター
2. 普連土（ふれんど）学園（設計＝大江宏）
3. 駐日クウェート大使館（設計＝丹下健三）
4. 三田キャンパス内
   - ……演説館
   - ……旧ノグチ・ルーム（設計＝谷口吉郎／室内デザイン＝イサム・ノグチ）
   - ……旧図書館（設計＝曽禰中條建築事務所）
5. 綱町三井倶楽部（設計＝J・コンドル）
6. 芝東照宮
7. 旧台徳院霊廟惣門（きゅうたいとくいんれいびょうそうもん）
   - ……三解脱門
   - ……大殿
   - ……霊廟
8. 増上寺

「江戸切絵図」「芝愛宕下絵図」「江戸切絵図」「芝高輪辺絵図」（国立国会図書館所蔵　本別9-30-00-007/00-008を合成）

この地図は、ガイドツアーで配布した参考資料です。現代の地図と重ねて、歴史の経過と異同が分かるしくみです。次頁よりガイドツアーの行程を、講師の米山氏のコメント抜粋とともにご紹介します。

（※写真は別記のない限り慶應義塾大学アート・センター撮影）

東京逓信局「東京市芝区図」（大正10年）（東京都港区「近代沿革図集」東京都港区立三田図書館、昭和51年発行より転載）

ARTEFACT Editorial

Friends Girls Junior & Senior School

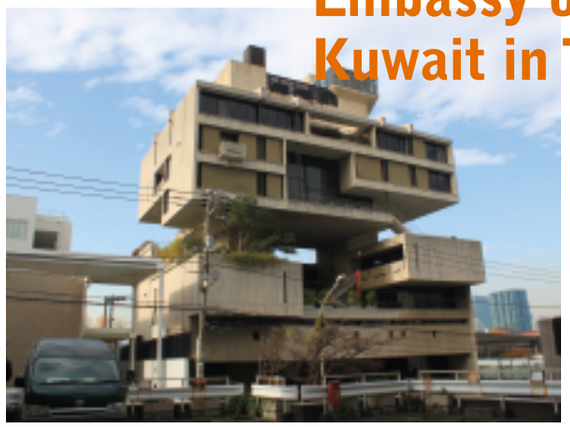
photo: Wiiii

［講師］米山勇　［聞き手］松谷芙美

普連土学園（設計＝大江宏）

「設計者の大江宏はモダニズム建築を代表する丹下健三の同級生ですが、クラシカルな要素を入れるのが大江宏さんの特徴です。」

Embassy of the State of Kuwait in Tokyo



駐日クウェート大使館（設計＝丹下健三）

「当時最先端のデザイン。外からは建築の床レベルが分からない、立体迷宮のようです！丹下健三はかつて立体的な都市計画（東京計画1960［*1］）を構想しました。菊竹清訓（きくたけきよのり）が同じような都市計画を立体的に建築として構成しています。菊竹は、鳥取県米子市の観光ホテル東光園（とうこうえん）を設計した人物で、丹下のライバル。丹下健三は、東光園を多分に意識し、クウェート大使館を設計したのでしょう。立体的に都市をつくる意識が、一個の建築として実を結んだと言えます！」

In the Mita Campus

三田キャンパス内

「慶應義塾大学の三田キャンパスは、明治時代の建築が残っている、貴重なキャンパス。」

［*1］ https://www.tangeweb.com/works/works_no-22/

Public Speaking Hall (Mita Enzetsu-kan)

演説館

「東京に残る擬洋風建築は、旧東京医学校本館と演説館のみで、極めて貴重。和洋折衷で、縦長の窓が洋風ですね。和風は瓦屋根と海鼠壁（なまこかべ）。内部は、日本における初期の吹き抜け空間といってもよいでしょう。」

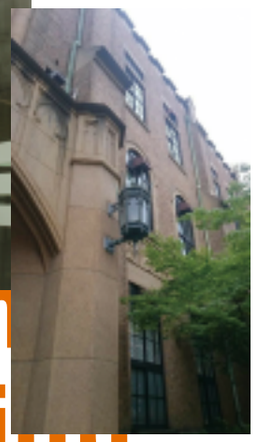
Ex Noguchi Room

旧ノグチ・ルーム（設計＝谷口吉郎　室内デザイン＝イサム・ノグチ）

「谷口吉郎は、モダニズムの流れに共鳴しつつ、日本の建築の情感を込めるのが巧みな建築家。二階は、縦長の上げ下げ窓にしているところなどが古風。それに対し、一階はガラス窓で、広く開かれているのが特徴。」

「モダニズムが理想とした材料はコンクリートとガラスと鉄。日本は敗戦国なので、コンクリートはなかなか使用出来なかった。50年代になりコンクリートが使えるようになった。ノグチ・ルームのコンクリート打ちっ放しの円柱は象徴的。コンクリートの作り方は、型枠に液状のコンクリートを流し込むので、この筋は型枠（かたわく）の跡です。」

「螺旋階段は、かっこいい！梁を隠して、どうやって支えているのかと思わせる面白さがありますね」



South Building

（南館の建築について）「ガラス壁をサッシュを使わずシーリングだけで繋ぐ。あるいはガラスをガラスで支えるのが21世紀の主流です。スクラッチタイルは、フランク・ロイド・ライトが帝国ホテルでつかったもので、日本独特の素材です。戦後は使われなくなる。南館のタイルは塾監局（設計＝曽禰中條建築事務所・大正15年竣工）で使っているタイルへのオマージュでは?!」

旧図書館（設計＝曽禰中條建築事務所）

Old Library

「すばらしい！ゴシック様式は学校建築に多く用いられましたが、その代表作。屋根が尖っているなど、垂直性を強調するのが特徴。尖頭アーチも特徴。向かいの塾監局もやや尖頭アーチになっていますね。（旧図書館は）きちんと保存すれば国宝になるかも!?」

綱町三井倶楽部（設計＝J・コンドル）

Tsunamachi Mitsui

「コンドル晩年に近い時期の作品。外観の特徴は変化がみられること。軒の線にダイナミックな動きがあり、バロック様式の特徴を有している。見所は、一階の天井には楕円のくり抜きがあり、ドームの内側が見られるところ。そして庭へのアプローチです。」

芝東照宮

Shiba Toshogu Shrine

「徳川家の菩提寺は、増上寺と寛永寺だが、増上寺の方が古く、それぞれに二代将軍以降が祀られている。日光、久能山、上野、芝東照宮が四大東照宮と言われる。芝の東照宮は焼けてしまって戦後の建築です。東照宮の特徴はなんといってもきらびやかな装飾ですね。」

旧台徳院霊廟惣門

The gate of Taitoku-in Mausoleum

「金箔が夕日に輝き、黒漆との対比が美しい。いい時間に通りかかりました。八脚門といいます。雷門などもそうです。八脚門は、通常切妻造ですが、これは入母屋造です。正面に飾り付けがあり、通常は千鳥破風といいますが、ここでは装飾的な効果が強く唐破風型なので、『据破風』と呼んで区別します。」

増上寺・三解脱門・大殿

Zojo-ji Temple

photo: Piotr Konieczny

「増上寺の遺構として最も大事。三戸二階二重門。六本の柱で、五間という規模の門は、最大規模になります。この形式の門で有名なのが大徳寺の山門。」

「大殿は戦後の建物ですが、わざと古式にしている場所があります、どこでしょう?!」

（松谷）「屋根？」

「屋根の鴟尾ですね。もう一つ、屋根は入母屋造ですが、勾配が途中で変わっている。これは錣葺きといい、飛鳥時代の様式です。法隆寺の玉虫厨子が錣葺きですね。」

GUIDE TOUR Born and Raised in Minato-ku

港区生まれ港区育ち、「港区建築ツアー」から考える

遠山 啓一（Rhetorica）

20年近くをそこで過ごしてきた自分にとっては、今でこそ綺羅びやかなイメージと切り離せないものの、港区は単に「育った街」でしかない。今回、「慶應義塾大学と三田の名建築」ツアーへの参加によって、改めて港区という街を客観的・歴史的な視点から眺め直す機会を得た。**自分が成長していくにつれ感じてきたこの街への違和感を消化する一つのきっかけとなるかもしれない**――そんなことを思いながら、当日の集合場所である母校・慶應義塾大学三田キャンパスに向かった。

聖坂――「ふつうの町」としての港区

説明もそこそこに、まず向かったのは慶應アートセンターの裏手にある聖坂（ひじり）。そして、その途中にある普連土（ふれんど）学園。丹下健三と同い年の建築家・大江宏の作品である「普連土学園校舎」の隣には巨大な宗教法人の建物があり、校舎と同じぐらいの高さで2棟が連なっていて1つの同じ法人であるかのような印象を受ける。歴史ある坂にオフィスなのか居住用なのか分からないようなビルが立ち並び、そこに外見からは素性がよくわからない宗教法人の建物が混じっているのが非常に港区的な光景だと思った。

建築を見学するツアーではあるが、この坂を含め、港区には**建築を包み込む「風景」**のおもしろさがあり、そこがツアーとして歩き巡る上でポイントになるように感じた。

自分の中での「港区」を象徴する建築物である「秀和レジデンス」シリーズの建物がこの坂にあったことも、港区らしさを感じた一因であろうか。巷で言われているような綺羅びやかな――六本木、赤坂、新橋的な――「港区」ではなく、自分が小さい頃から触れてきた、高級でも質素でもない、**色が無くまとまりを欠いた港区の街並み**がそこにはあった。

子供の頃から、「港区に住んでいる」と他人に言った時の反応と自分の感覚の差には驚いてきた。渋谷、広尾、三田周辺を行き来する生活をずっと送ってきた自分にとっては、港区は着飾った場所というよりはむしろ素朴さの印象の方が強かったし、渋谷のように東京を象徴する街でもないからだ。最寄駅の広尾も、確かに外国人は多いかもしれないが商店街は何の変哲もなく、飲食店も少ない。スターバックスの2、3階でインターナショナル・スクールの生徒が英語混じりの日本語で騒いでいる光景も、見た目の派手さを除けば郊外のフードコートに地元の学生が溜まる様子と何一つ変わらない。**麻布十番だって昔は同級生たちと自転車でゲームを買いに行ったり、親とふらっと立ち寄ってたい焼きを買うような街だった**（風情はあったが「高級」ではなかった）。

しかしいつからか、「港区」的な想像力が前景化し（たぶん六本木ヒルズが出来る前後のことだ）、いまでは全く足を運ばない場所になってしまった。だからなんとなく、聖坂周辺の風景には懐かしさを憶えた。

事業としての建築

坂の上にのぼって「駐日クウェート大使館」（設計＝丹下健三）を見る。シンプルに建物としてとてもかっこいいという感想を持ったが、もうすぐ壊されるとのこと。次の建築はどんなものなんだろうと気になった。最初に見た時はとにかく使いづらそうだなという印象だったが、その後調べるとどうやら上層部は大使公邸、下層部は大使館の事務室として用いられ、機能的にも明快な分離が図られているらしい。

この種の建築を見ると不思議な気持になる。一九七〇年代当時、これを発注した人はどのようなモチベーションとインセンティブ、どのような思想をもってこれを丹下に発注したのだろうか。現在の東京における建築や街並みについてちゃんと知らないから、もしかしたらもっと別のダイナミクスがあるのかもしれないが――建築作品としては最高だなあと思いつつも――、自分が発注者だったらどうしてこんなリスクを負うことができるのだろうと考えてしまう。「使いづらい」「維持費が高い」といった、効率性や合理性を口実としたネガティブなフィードバックと、どうやって戦ったのだろうか。**その原動力は、技術への誇りや西洋的ハイカルチャーへの羨望だったのだろうか。**

慶應三田キャンパス 演説館――和洋のキメラ

大学の敷地内に戻ると次は演説館を見学した。入ったことこそ無いものの外観は何度も見たことがあり、そしてそこまで惹かれるものは無いと感じていた建物だった。しかし解説を聞くと面白い。これが建造された一八七五年の当時は、どうやら日本に「建築家」という概念がなく、この建物は外国人建築家が作った長崎や横浜の建物を大工の棟梁が頑張って真似て作ったものらしい。作りたいものは洋風なのに、技術的には和風のものしか作れないと、――解説ではそれを**「必然的な和洋折衷」**と表現していたが、見た目は、

増上寺――江戸／明治の断絶

途中、網町三井倶楽部や東照宮にも寄りつつ、増上寺に向かう。中に入るのは初めてだったのでワクワクしていたが、実際に着いてみると**歴史的建造物というよりはテーマパークの趣があり、この日初めて世間的な意味でのいわゆる「港区」らしいものに出会ったと感じた。**

例えば、境内で売られている焼き芋。サイズが小さい割に値段が高かったり、長身のすらっとした若い女の子が売り子をやっていたり。風景としても、寺の向こう側に品川プリンス系の複合商業施設が見えたり。一旦それらが目にはいると、待合室のある建物の前に掲げられた**「寺務所」**も現代的でキッチュなものとしては**初期インターネット的な想像力を感じさせる**、脱文脈的な解釈の重層化や連鎖が随所に見られた。

例えば縦長の窓は日本の伝統だが、そこに西洋の概念である上げ下げ窓が無理やり持ち込まれることでミスマッチを起こしていた。形は洋風でも、なまこ壁や瓦屋根はやはり洋風になりきれておらず、かなり違和感がある。

内装にあるアーチに関しても同様で、そもそも日本の木造建築は軽いためアーチを作る必要がない。しかし西洋建築の象徴としては必要だったため、当時の大工がわざわざアーチを作り、そこに漆喰を塗って仕上げた。一見無理解に基づいているように見える模倣だが、限られたリソースや技術力で無理やり西洋的なものを模倣しようとしたことで、むしろ当時の独自性や日本らしさが浮かび上がっているようにも思えた。そこには個人のクリエイティビティやエゴよりも、むしろ「新しい」とされていた西洋の建築に必死に追いつこうとする工夫や焦りが見出される。結果的にそれが建築物に反映され、現在の視点で見ても新鮮に映るのが不思議だ。

Keiichi Toyama

photo: Keiichi Toyama

意匠に見えてくる。遊園地に迷い込んだ人々を、僧侶の姿をした不思議なガイドが先導するような、そんな錯覚だ。

とはいえ建物としては、個別に見ていくとやはり興味深いものがあった。二階建ての二重門も空襲で残っただけありかなりの迫力で、やはり建築が長く残らない国は景観の魅力が乏しくなってしまうな、とふと思った。しかし全体で見ると、歴史的建造物と商業施設のコンビネーションというより、特に意図なくその二つが混じりあってしまっているかのようだ。

増上寺を見終わると、江戸時代やそれ以前のものが**空襲によってぽっかりと失われてしまい、その穴を資本主義的な論理で埋めた**ような印象を受けた。それは、ここまでの間に見てきた、明治や高度成長期の文脈（広義のモダニズム）を引き継いで未だ現存している建造物たちとは、かなり異なっている。

港区――近代以前／以後が混在した風景

一方では江戸以前から続くものが戦争や天災によって断ち切られ、テーマパークとして「復元」され残っていき、もう一方では、ひたすら新しさを求めて上書きを繰り返す明治以降の近代的な論理によって、街並みが更新され続ける――港区にはその**二面性**が圧縮され、また凝集されている。

今回のツアーを通じて、自分が育った街である港区の「不思議さ」を言語化するヒントを若干ながら得られたように思う。高級でも質素でもない場所、という自分にとっての港区らしい風景の再発見と、その背景としての近代のコンテクストだ。

この原稿に着手する直前、『東京カレンダー』で「**港区の優越**」という特集が組まれていた。そこには自身の不安を消費や着飾った華やかなブランディングでごまかそうとする港区の姿が見て取れた。これもまた港区の姿であり、むしろ世間的にはこれこそが「港区」の印象そのものだろう。**自分が馴染んできた港区と、ブランド化された「港区」は、遡れば共通の背景にたどり着く。**その背景を建築という形で実際に目にすることができたのが、今回のツアーで最も大きな収穫だった。

留学生がきく！ 増上寺座談会

小篠健樹（増上寺参拝部参拝課）
服部光貴（増上寺法務部法要課）
古橋佳苗（増上寺教務部出版課）
李篠硯（慶應義塾大学文学研究科国文学専攻 後期博士課程一年）
張滌非（慶應義塾大学文学研究科国文学専攻 前期博士課程二年）
フランツ・ワクトメイスター（慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻四年）
［聞き手］本間・松谷（慶應義塾大学アート・センター所員）

中国からの留学生、李さん、張さんと、スウェーデンからの留学生フランツさんの三人が、増上寺の歴史、文化財、さらには、現在のお坊さんの生活やお勤めなど、気になる質問をインタビューしてきました。（記＝松谷芙美）

張 張滌非と申します。中国の上海から、日本文学を勉強したくて二〇一四年に日本にきました。今は慶應義塾大学国文学専攻の修士二年生です。勉強している内容は、二十四孝という、教訓書について研究しています。どうぞよろしくお願いします。

李 初めまして。李篠硯と申します。慶應義塾大学の国文学専攻、後期博士課程の一年生です。研究は主に平安と鎌倉時代の漢文学です。今取り組んでいるのは主に仏教関連の慶滋保胤という人物の文学、そして浄土宗周辺の仏教文学、釈教詩について研究しています。この機会で色々伺いたいと思いますので、よろしくお願いします。

フランツ 初めまして、スウェーデンからきたフランツと申します。大学四年生で、卒業論文では日本の近代彫刻について書きました。どうぞよろしくお願いします。

小篠 私は増上寺参拝課の小篠と申します。増上寺では参拝される方々の対応をしております。

服部 私は服部光貴と申します。増上寺の法要課という部署におります。増上寺で行われる法要全般や、お檀家様への対応などの業務をしております。

古橋 初めまして。古橋佳苗と申します。私は増上寺の出版課というところで、お寺から檀家様に配る出版物の製作や撮影、後は所蔵文化財の管理も行っています。どうぞよろしくお願いします。

増上寺での生活・お務めは？

小篠 増上寺の歴史の話からいたしますと、増上寺はここ、芝大門という土地とは別のところにありました。皇居がございますが、その近くの豊島郡という場所で開かれたのが始まりです。徳川家康公が江戸の地に移って来る際に、この増上寺を徳川将軍家の菩提寺とされ、芝大門の土地に広大な土地をいただきました。土地がだいぶ小さくなりましたが、いま現在に至るまでこちらで活動しています。

活動内容としては、まず伝法道場があります。浄土宗の僧侶になるための道場で、最終的な伝法を授けられる場所です。簡単に言えば、僧侶の行、資格が取れる場所であります。この増上寺は大本山と申しまして、これは日本各地にある浄土宗の大きなお寺の一つです。一番大きいのは京都にある知恩院様で、総本山といいます。知恩院でも資格がとれ、修行道場もあります。昔から西の知恩院、東の増上寺と言われています。この増上寺では、住み込みの修行僧（研修生）を受け入れています。

一日の活動としては、朝の6時、お昼の11時半と夕方に勤行を毎日行っています。僧院の生活は多様化しておりまして、私のように、参拝者の対応をしている者もいれば、法要に関わる者もいるので、増上寺では、各部門に分かれて活動しています。

小篠健樹氏

本間 職員の皆様は出勤前に勤行を行ってから出社するのですか？

服部 私は自坊、自分のお寺があるので、そこでお務めしてから出勤します。

本間 ちなみに出勤時間は何時？

服部 私は8時くらい。基本は9時からです。増上寺にきて勤行するというよりはご自坊でやられる方は多いですね。勤行は、宗派によって作法や教えが全然違って来る。浄土宗では、修行は、お念仏を唱えるのが一番重要です。念仏を唱える修行というのは、技術的な面、唱え方や作法や動き、所作などが重要で、きっちり鍛錬します。あとは実践のなかで磨きます。

本間 経典の理論的な研究もしますか？

服部 基本的な知識は資格を取るときに学びます。もちろんその後、大学で深く研究する方もいます。

仏教の宗派について

フランツ 仏教に関する知識が少ないので、基本的な質問になりますが、浄土宗と他の宗派の違いは何ですか？

小篠 他宗のことでもあるので、厳密には言えませんが、日本の仏教の中の話ということであれば、大きな違いは「自力」「他力」があります。自らの力で悟りに至るのが「自力」、我々浄土宗は「他力」に入り、阿弥陀様のお導きのもとで浄土に行き、阿弥陀様のもとで仏になる修行をする。宗派によっては、考え方と修行方法が違います。この世にいる時点ですでに仏になっているものもあれば、煩悩がなくなる境地に至るまで仏様に力をお借りするものもある。おのおの考え方が違いますが、元々は全て仏様の教えです。宗派による細かな違いは、あげればきりがないので、基本的には、自分にあった教えに従っているということだと思います。また、現在は、ご先祖さまの宗派に入る方が多いです。

フランツ いつごろ、もともとの形から分かれて発生したのですか？

服部光貴氏と古橋佳苗氏

小篠　大きなきっかけは鎌倉新仏教ではないでしょうか。法然上人様の創始した浄土宗もその時誕生しました。同じ時期に、多くの宗派ができました。その後、絶えた宗派もあります。

徳川家の菩提寺はなぜふたつあるの？

張　芝の増上寺と上野の寛永寺は、共に徳川将軍家の菩提寺として知られています。そして、徳川将軍家は代々、菩提寺を代わる代わるにしているようですが、それはなぜですか。

古橋　まず徳川家康公は一五九〇年に江戸に入られますが、その時、増上寺はすでにあり、寛永寺はありませんでした。家康公が江戸に入られて、徳川家は、代々浄土宗だったので、江戸にある有数の浄土宗寺院のひとつであった増上寺を菩提寺に定められた。寛永寺は天海和尚が作られましたが、二代将軍秀忠の亡くなる数年前［*1］に建てられ、徳川家の祈願寺でした。菩提寺はお墓のある寺で、祈願寺とは、祈願・祈祷をする寺です。天海和尚が徳川家の側近で、徳川家と繋がりが深く、四代・五代将軍が寛永寺に葬られ［*2］、寛永寺も菩提寺になってゆきました。そうして二つ菩提寺が出来たのです。将軍が葬られるときは、将軍の遺言で決まるので、お寺としてはそれに従うだけで、要望を出すのは難しい。しかし、四代の家綱公の時に、何代も将軍様が増上寺のお墓にはいられないのはおかしいと意見書を出したこともあったようです。この件は文書に残っています。しかし四代・五代と寛永寺に葬られ、六代家宣公は、秀忠公がおひとりになってしまうということで増上寺に入り、あとは半分ずつ……という形です。お寺としては幕府の決定に従ってきた形です。

本間　寛永寺と増上寺は、将軍が分かれて祀られていますが、寛永寺は天台宗、増上寺は浄土宗なのですね。

古橋　徳川家はもともと浄土宗ですが、政治的な理由で寛永寺が菩提寺になったのですね。

［*1］寛永二（一六二五）年に本坊が建立された
［*2］将軍の墓所については、伊坂道子氏講演レポートも参照

本間　お墓の関係もあり、日本では家によって宗派が決まるようなイメージもありますが、ライフスタイルというか、自分にあう考えの宗派を選ぶこともできるんですね。

服部　本来はそうです。江戸時代に檀家制度が出来て、この家は、このお寺という形になりました。仏教はどの宗派も悟ることが目的ですが、考え方、方法論が違うのです。現世で悟るのか、浄土宗なら煩悩がある我々は、現世では悟れないから、極楽浄土に往生し、阿弥陀様の教えにしたがって悟ることができます、つまり「他力」です。例えば臨済宗、曹洞宗ならば、座禅を組んで、「仏性」（仏の種）をはぐくむ。「他力」は、愚者の自覚があり、自分の力だけでは悟りは得られないという考え方です。

本間　家族のなかで、宗派が異なる場合、どう寺社としてアプローチするのでしょう？　お墓の問題もあります。

古橋　歴史的に、家制度と強く結び付いている面がありますね。まだ、個人的なものというイメージは強くないのではないでしょうか。

張　宗派ごとに、日々の修行などに違いがありますか？

服部　浄土宗のことしか言えませんが、浄土宗は念仏を第一とする宗派で、修行も念仏を唱えることが中心です。法要でも長く念仏を唱える部分があり、そこに重点があります。時宗や浄土真宗は念仏を重視しますが、少しずつ考え方が違います。

天台宗は、奈良仏教なのですが、特殊で、千日回峰行など苦しい行があったりする。禅宗に似て、自力の部分がある。日々の生活は一緒で、「仏・法・僧」の精神に基づき生活している。わかりやすくいえば「明るく正しく仲良く」といいますか。掃除などをして日々の生活を正しくすごすことなどがあります。

張　仏様は、イコール悟った人間ですか？　修行は、悟るまでのプロセスと考えていいですか？

服部　そうです。我々の場合は念仏をとなえていさえいれば、自分がなくなって極楽浄土にいき、阿弥陀如来さまの元で仏になることができるのです。

日本と中国の仏教寺院のありかた

松谷　念仏をとなえることを重視する仏教は中国にありますか？

服部　こちらも中国現地の仏教について知りたいのでぜひ教えてください。

李　僕の故郷は峨眉山（がびさん）です。家の人々もよくお寺に通っています。民衆はお寺に行くとしても、実際的に念仏することは少ないです。峨眉山では、夏は涼しいので、お寺に一般の民衆が一か月間こもるようなこともしています。中国の場合は、宗派という区別はあまりないです。家の近くのお寺に行きます。自分の土地にある神様、仏様への信仰がいきている感じです。

私は仏教文学を研究しているので、経典を読まなくてはいけないのですが、簡単には読めません。中国のお寺では、経典を教えてくれることは少なく、今の自分の勉強法は、研究者の書いた解釈書を読むことですが、本当にしたいのはお寺の人から教えてもらうことです。写経に興味があるので、一般向けの写経活動などがあれば教えていただきたい。

服部　写経は毎月十四日におこなっていて、内容は、浄土宗のお経になります。［*3］導師の法話もあります。

中国のお寺のありかたは、日本の神社に近いように感じられました。

李　中国には四つの大きな寺があり、峨眉山もそのひとつです。［*4］それぞれ文殊、普賢、観音菩薩などに属しています。それ以外は、自分のお家の近くのお寺に行くことが多いです。

現在では、中国ではお坊さんやお寺へのイメージはあまりよくはありません。情報化社会でもあり、少林寺のお坊さんがスキャンダルに巻き込まれるなどもありました。

日本では仏教はどういったイメージなのでしょうか？　中国では情報社会が進んで、お坊さんが携帯を使ったりしているが、日本ではどうですか？　現代になって、お寺はどう変わっていますか？

小篠　昔は、修行の場所であったので、お寺に行くのは僧侶になる人だけでした。江戸時代に檀家制度がはじまり、戸籍の把握と結びつきました。そして墓

［*3］毎月「写経会」を開催 https://www.zojoji.or.jp/event/ev_shakyoue.html
［*4］中国四大仏教名山。五台山・峨眉山・九華山・普陀山

が作られるようになると、お墓をお参りする場所になり、一般の人々に開かれていきました。

江戸時代、多くの宗派は、妻帯を認めていませんでした。賛否両論ありますが、明治時代に妻帯が許されて、家業としてお寺を続けられるようになりました。現代の日本も中国と同じで、スマホなども使う。禁止している宗派もあると思いますが。

松谷　日本では江戸時代の檀家制度のなごりがあるのですね。中国では檀家制度に似たようなことは歴史上ありましたか？

張　檀家制度はありません。仏教といえば、禅宗というイメージ。修行前は、「山をみれば山と思う」「水をみれば水と思う」。しかし修行すると「山を山、水を水と思わなくなる」しかし修行を積み重ねるとまた「山を山」「水を水」と思うようになる。心のプロセスの変化として、おもしろそうな話として、子供のころから仏教を理解していました。チベットでは、儀式があり、生涯に一度はラサの大昭寺など大本山に叩長頭（徒歩で叩頭しながら目的地に向かう）することを行う。前に雪山、川、何があっても前に進む。宗教の力に驚くようなことがある。

李　一言で中国といっても、漢民族の宗教と少数民族は違う。チベットでは、すべてのチベット人が仏教徒なので、日常に含まれている。漢民族は、古くから儒教のイメージがつよい。

小篠　中国のお葬式、埋葬方法は日本と違いますか？

李　中国では昔は土葬でした。風水学によって適切な土地を選んで埋葬しました。最近は火葬が一般的で、お寺と関係なく墓地があります。墓地も風水学で選びます。儒教にもとづいていて、葬儀と仏教は結びついていません。

張　日本に来て、お寺にお墓があり、その近くに幼稚園があることに驚きました。

小篠　仏様を身近に感じ、仏の教えを交えながらお子様を育てるというもので、いつ頃から仏教幼稚園が始まったかはわかりません。日本人には仏教になじみがあるので……

本間　寺子屋との連続性は？

服部　あるかもしれませんね。私は仏教系の幼稚園に通っていましたが、仏教ならではの花祭りなどの行事や、歌があったりしました。

古橋　日本では、宗教色のある教育に対するアレルギーなどは少ないのではないでしょうか。小さい子の情操教育に仏教が入ることは、礼儀正しくなるなど良い印象ももたれているようです。

松谷　日本では、キリスト教系や仏教系の学校があり、特に違和感ありませんが、スウェーデンではいかがですか？

フランツ　教会が教育を行う印象はあまりないです。しかし、学校の卒業式などの会場として教会を使うことがあります。その時に、牧師などが宗教的な話をしてはいけないという法律があります。学校で、学問として教育学、宗教学は学ぶけれど、教育と宗教は分離しているかもしれません。教会は、昔から音響がいいので、コンサート会場になることも多いです。

李　基本的に中国の小中学校はほとんど公立ですので、お寺が建てた学校はありません。

張　父は仏教の居士（俗世にいながら自ら修行する人）ですが、お経を読めと言われたことはありません。詩や本を読んで、自然と単語が頭に入り、仏教の言葉を自然と覚えてきました。仏教といえば王維の詩かな。詩仏と言われます。李白は詩仙、杜甫が詩聖です。有名なお坊さんの故事は小さいころに聞いて、漠然と覚える。宗派に従うということはありません。詩を読んで、そのリズムから、単語の意味やイメージを受け入れる感じです。

李　先ほど王維の詩が出てきましたが、僕は釈教詩を研究していて、五山文学などもありますが、お坊さんも仏教関連の詩を多く作っています。そのなかで、美しい言葉、詩のような言葉は禁じられるべき、という教えを読んだことがあります。詩人のなかでも、文人のころは美しい詩をつくったのに、出家後は作らなくなったという人もいます。詩のような形式ばった言葉などをどう認識しているか聞かせてください。あと、仏教の教えを深く学ぶのにどういった手段を使うのでしょうか？　仏教の教えを知りたいと思っていますが、どういう方法が一番本当に仏の教えがわかるのか知りたいと思っています。

服部　簡単にいうと、我々がどうやって教えを勉強しているかということでしょうか？

李　深い意味としてはどう知るのか、という……

服部　資格をとるための勉強以外には、中国の浄土系のえらいお坊さんの書物を遡って勉強します。曇鸞（どんらん）や道綽（どうしゃく）なども読みます。法然上人の残した書物は少ないのですが、それを基本に、過去にさかのぼる形で学びます。

小篠　私は注釈書、先人からの教えから学びますね。いきなり書物からでは難しいので、かみ砕いていただいたものから学びます。

古橋　師匠から教えていただくこともあります。

服部　浄土宗では、勉強すべき法典がはっきりしています。詩も教義に基づいた内容しかありません。

増上寺の文化財について

張　私の指導教授石川透先生は奈良絵本・絵巻を研究していますので、私もそれに大変関心を持っています。先生の話によると、お寺に所蔵される絵巻には、そのお寺のゆかりと関わる本地物が多いようですが、増上寺の場合はいかがですか。

古橋　寺院の由来を描いた増上寺縁起絵巻というものは所蔵していません。もともと所蔵していないのか、第二次世界大戦で多くのものが失われているので、そこで失ったのかはっきりはしません。しかし、明治時代や大正時代の古い什物帳を見ても、縁起絵巻のようなものの記述がないのです。絵巻としては、法然上人絵伝や、徳川家康公の念持仏黒本尊様の縁起絵巻があります。関東の寺は歴史が浅く、関西とは状況が違うかもしれません。明治時代に入り、増上寺は徳川家の菩提寺であったため、領地が削られるなど苦難の時代がありました。その際に宝物が持ち出された可能性もあります。歴代の住職の事績の絵

右よりワクトメイスター君、李君、張君

巻や、なぜ所蔵しているのかわからないが他の寺社に関するものなどもあります。法然上人絵伝は、重要文化財に指定されている2巻と、知恩院本の複写があります。

張　増上寺には、狩野一信の《五百羅漢図》が所蔵されているようです。その五百羅漢図は、従来の羅漢図と比べ、どんな特徴がありますか。

古橋　狩野一信は、奇怪でグロテスク。描きこみも細かく、耳の中の毛まで描いています。おかしいのではというほど細かく精魂込めて描かれており、それまでの五百羅漢図とは異なる、独創的な羅漢図と言えます。

本間　曼荼羅は、経典を理解するため描かれた絵ですが、五百羅漢図は、宗教家でない人が描いています。お寺ではどのように使われていたのでしょうか？

古橋　曼荼羅は浄土宗では使いますか？

服部　当麻寺に観経曼荼羅があります。中央に阿弥陀様がいて脇に観音勢至菩薩がいて……という極楽浄土を表した曼荼羅です。

古橋　五百羅漢図は、壁に掛けて教えを説くものではありません。来迎図、涅槃図や出山図は、信者にご説明するのに使ったりします。五百羅漢信仰は民間からでてきたと聞きます。もともと羅漢は、十六羅漢があって、五百羅漢は、石碑があって、狩野一信もそれを参考にしています。その石碑の羅漢も経典にすべてのっているわけではありませんので、いろんな情報を集めて五百にしたのでしょう。経典編纂にあつまった羅漢が五百人いたということから始まっているといわれます。狩野一信は、自分の信仰を深めるために描いたといいます。奉納画ですね。描くこと自体が修行することになっていたということでしょう。

本間　奉納は現在もありますか？

古橋　有名な住職の事績を描いたものが奉納されたことはありますが、よくあることではありません。

本間　いま、五百羅漢が寄進されたらどうしますか？　檀家に限らず、受け入れますか？

古橋　信仰を深めるために描いたものなら、お受けする場合もあります。檀家様でなくても。

服部　仏具の寄進はたまにあります。

古橋　寄進者とお話して、ご寄贈いただくかどうか検討致します。

一般人・外国人のお坊さんになれる？

フランツ　お寺の出身でなくても資格をとれますよね？

服部　一般の方でも、お師匠さんを立て、信仰を持ち、しっかりとした意思があれば、資格はとれます。

フランツ　お寺出身ではない場合は、修行後どうなりますか？

服部　大きな本山に勤めるか、お子さんや跡継ぎのないお寺に養子にはいったり、お婿さんになったりします。7〜8割は、何らかの縁でお寺を探します。お婿さんに入り、結婚後、資格をとる人もいます。

本間　外国人のお坊さんはいますか？　日本を訪れて、信仰を持ち、お坊さんになりたいと思った方がお坊さんになることはできますか？

服部　たぶんいらっしゃいますが、浄土宗では具体的には思い当たりません。親御さんが外国の方はいらっしゃいます。他宗の例は聞きますし、システム的にはありえます。

古橋　ハワイ開教区などもあり、布教活動をしています。しかし資格をとるには増上寺に来なくてはいけません。

本間　「英語で読むお経」といったイベントを開催しているお寺もありますが、トークするのは日本のお坊さんのように思います。外国人のお坊さんはあまり見ない印象です。

小篠　英語での布教のコースを作ろうといった動きもなくはないです。外国人向けの仏教の案内のパンフレットを、公益財団法人仏教伝道協会で発行しています。非売品ですが、お問い合わせいただけば、入手いただけます。坐禅会などの講座もあるようです。[*5]

[*5]「とってもやさしいはじめての仏教」電子版、「GUIDE TO BUDDHISM IN JAPAN」電子版(http://www.bdk.or.jp/read/hajimete.html)。公益財団法人仏教伝道協会 BUKKYO DENDO KYOKAI (Society for the Promotion Buddhism) のHP(http://www.bdk.or.jp/)

参加者プロフィール

小篠健樹（おざさ・たけき）
増上寺から歩いて10分のお寺出身です。
増上寺のことをより皆様に知っていただけるよう努めていきたいです。
最近は映画、特にホラーものにはまってます。

服部光貴（はっとり・こうき）
実家のお寺は東京深川、下町江戸っ子です。趣味は読書と映画です。
伊坂幸太郎さんとクリストファー・ノーラン監督を崇拝しております。

古橋佳苗（ふるはし・かなえ）
キリスト教系の大学を卒業し、編集者になったはずが、今なぜか浄土宗大本山に勤務中。
実家は虎ノ門の小さなお寺。主に都心周辺の居酒屋に生息。

李篠硯（り・しょうけん）
平安漢詩文が専攻である李篠硯です。漢詩のみならず、文芸全般に興味いっぱいです。最近は文人と仏教の接点をめぐって論文執筆に励んでおり、苦闘の日々です。

張滌非（ちょう・できひ）
御伽草子を専門として頑張っていますが、崩し字の謎解きにもがく最中。
神社でもお寺でも大木さえあればどこまでも行きたいですが、増上寺は、樹々もクッキーもとても秀逸です。

フランツ・ワクトメイスター
スウェーデンからはるばるきたフランツと申します。日本はもう六年目になりますが、知らないことがまだたくさんあります。仏教もその一つです。最近三島由紀夫の『金閣寺』を読んでおり、増上寺の方に教えて頂いた仏教知識が大変役立っています。文学以外は美術もとても好きで、卒業論文はロダンの彫刻について書きました。

本間友（ほんま・ゆう）
もともとキリスト教美術が専門で、教会巡りが趣味。お寺の典礼や仏教美術に興味があるが、学部・大学院時代に培ったはずの基礎知識が行方不明になっていて、このところ軽くショックを受けている。

松谷美美（まつや・ふみ）
室町時代の水墨画が専門です。最近の流行にのって、御朱印帳片手に、お寺巡りもしています。狩野一信の五百羅漢図や台徳院霊廟模型など、増上寺は文化財も魅力的。

COLUMN

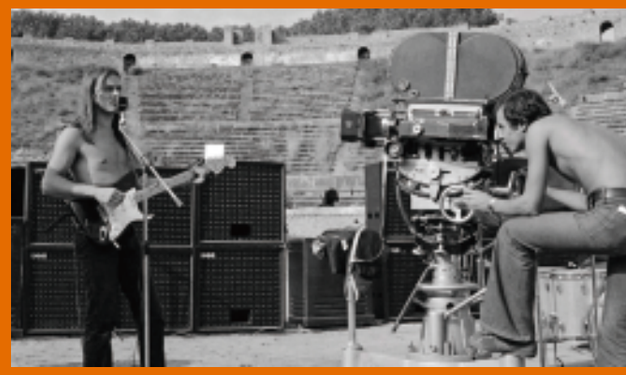
How Pop Music Bridges Past and Present

建築のジェネレーション・ギャップを跨ぐ無形文化

フランツ・ワクトメイスター

歴史的な建築は、美術館にある美術作品とは違い、我々の暮らす環境の中に存在し、視覚的にも物理的にも「皆のもの」だ。でも我々は案外、自分が住み生活している街の知識が浅い気がする。僕も遠足や散歩で良く歴史的な建物にでくわしたりするが、それを何チャラ寺だの云云橋だのとぼんやり認めながらもあまり感心しないで通過してしまうことがほとんど。芝公園の増上寺もその一つだった。「公園の横にでっかいお寺あるんだね」と恥ずかしい程感心ゼロだった。アート・センターのガイドツアーまで、真剣にお寺を見ようと思ったことがなかったし、ましてそこに代々の徳川家のお墓があるのも想像にもなかった。なぜなんだろう。

少し自国の話をさせてもらおう。バルト海の真ん中にゴットランドという島が浮かぶ。ここは、かの有名な映画監督イングマール・ベルイマンの本拠地としても知られているが、中世時代に経済的な繁栄をしていたため、街の風景はタイムスリップの錯覚を起こしてしまうほど中世そのまま。日本人には「魔女の宅急便」の海の見える街を思い出してもらえば想像がつくはずだが、この街は言うまでもなく廃墟だらけ。しかし市民は、その風化した修道院なり壁なりの遺跡をそのまま放置し、埃にまみれたツーリストアトラクションに下降させず、自分の文化生活の一部として復活させている。屋根無しの吹き抜けロマネスク教会をダンスホールに変身させたのもあれば、中に舞台を置きチェーホフやベケットを上演する露天劇場に改装した修道院もある。このように二つの時代を結び付けられて昔の建築が初めて住民にも積極的な価値を持つ。



もう一つの格好いい事例をあげよう。一九七二年に、イギリスのバンドのピンク・フロイドはイタリアのポンペイの遺跡に立って、無人の観客にライブを行うというイベントがあった。煙を吐き出す火山を背にして、ローマ時代の劇場に立ち演奏するバンドを収録した伝説的なドキュメンタリーとしてファンたちの間で知られているが、この発想はなかなか面白いと思う。僕はたぶん無音でもポンペイの遺産を十分に楽しめるはず。でもピンク・フロイドの音楽に伴奏された遺跡の街はかつて誰も見たことがない神秘性と魅力を披露する。ローマ時代にギターが無ければ、ロックも存在しなかったが、ピンク・フロイドの響きによって大理石の列柱や壁画の神々が新しい形で復活する。その姿は本来のものとは全く異なる劇的な変装だが、ロックの新奇な光に照らされて、今まで古典古代の建築の素晴らしさを意識してなかった人々にも眼を覚ますような体験となったかも知れない。僕がピンク・フロイドの例で伝えたいのは、新鮮な文脈に包まれた歴史的な建築は、新客層に届き、そしてマーケティング学の用語を借りて言えば、新しい顧客セグメントを得る可能性がある、ということだ。

上図＝Pink Floyd Live at Pompeii
撮影：Jacques Boumendil（Teamrock.com, http://teamrock.com/feature/2017-09-04/the-inside-story-of-pink-floyds-classic-live-at-pompeii）
下図＝Pink Floyd - Live at Pompeii - The Directors Cut（DVDカバー）（The Pink Floyd Archives http://pinkfloydarchives.com/DEUDVDPF.htm）

左上図＝角野栄子・佐竹美保『キキに出会った人びと』福音館書店、2016年。
Hayao Miyazaki, *Kiki's Delivery Service Picture Book*, VIZ Media, 2006

上図＝国立新美術館。撮影：Wiiii ／下図＝FULL CONTROL TOKYO（ケータイ Watch「au、ユーザー参加型スマホイベント「FULL CONTROL TOKYO」開催」https://k-tai.watch.impress.co.jp/docs/news/585612.html）／右下図＝東京タワー、六本木ヒルズ、増上寺。撮影：Watanabe Takuro（Takuro1202）

なぜ東京が好きなのか、その理由を外国人に尋ねると、大抵は古いものと新しいものが混合して独特な空間だからと答えるだろう。港区は特にその通りだ。東京タワーと増上寺、六本木ヒルズと泉岳寺、国立新美術館と迎賓館、新古の対比が数多い。しかし、この形体は果たして混合と呼べるかは怪しい。どちらかと言えば水と油ではないか。互いに独立したままで、空間を共有しているだけのように感じることが多い。建築は確かに物理的に混ざることが難しいため、新古を上手く混合させるエマルションとなるのは無形文化だ。音楽やダンスといった形のない文化活動こそ、お寺の境内に流れ込み、庭園の木々を通り抜け東京文化のジェネレーションギャップを跨ぐ重要な鍵だと思う。

港区での新と古を一体化した事例を考えれば、新の環境に古の要素を取り込んだ例が沢山思い浮かぶ。六本木の新築のビルに伝統的な庭園を造れば、生け花や茶道の稽古や披露も行われる。でも反対に、古の環境に新の要素を取り入れた事例は珍しい。一つだけユーチューブの広告で目にとまった例がある。二〇一三年の頭に、増上寺でKDDIによるユーザー参加型イベント「FULL CONTROL TOKYO」というのが開催された。激しく点滅する東京タワーを背景に、きゃりーぱみゅぱみゅが増上寺の階段をステージに7曲を歌って自分の20歳の誕生日を祝った。そして照明効果でお寺の正面が凄まじい具合に色や模様を変えたりした。こんな格好よく見えたお寺は見た事がない。主催者がどのように増上寺の許可を得たか見当もつかないが、実に素晴らしいアイデアだと思う。僕はきゃりーぱみゅぱみゅのファンに類する人ではないのでどういう人が聞いているかも良く心得てないが、恐らく普段お寺の見学に行くような人ではなかろう。ちょっとした偏見ではあるかも知れないが、KDDIときゃりーぱみゅぱみゅが一般的にお寺を訪ねない多くの若者を増上寺に呼び、その魅力を楽しませたのは事実だ。一見冒涜に思われるような参拝ではあるが、これこそ文化遺産の価値を次世代に認めさせ、発信する最強のやり方だ。なお、増上寺は中世時代の遺跡と違って、現役の宗教施設だから、完全にミュージックステージに変えるわけには行かない。けれど、伝統的な空間に新の文化を取り入れる勇敢さと柔軟性をもう少し持っていれば、より多くの人がその価値を理解するのではないだろうか。そうしないと都市のCultural Narrativeが生き残るのは難しいだろう。

右図＝聖ニコライ聖堂での映画上映会
（Film på Gotland http://filmpagotland.se/?page_id=440）

伊坂道子氏講演「増上寺旧境内の変遷」に学ぶ、増上寺の江戸から現代

二〇一七年十一月一八日、「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクトの第一弾となる講演会「都市文化の物語：港区文化資源の近世と現代」が、慶應義塾大学三田キャンパスで開催された（講演会の概要は2ページを参照）。芝から三田にかけての幕末・明治の風景を、美術作品や歴史資料で辿る内藤正人氏のレクチャー（6ページ）に続き、建築家伊坂道子氏（伊坂デザイン工房共同代表）に、「増上寺旧境内の変遷：芝地域とともに」と題して講演をいただいた。本稿はそのレポートである。

内藤氏も言及しているように、江戸の昔から増上寺は、知らぬ者のいない名所として人々に親しまれ、現在の港区の都市文化の形成にも大きな役割を果たしている。増上寺の境内地が歴史的にどのように変遷してきたのか。その一端を、伊坂氏の講演を辿りながらご紹介したい。（記＝本間友）

1 東京に残る江戸時代のレイヤーと寺院の旧境内地

講演は、現代の市街地がもつ歴史的なレイヤーの解説からスタートした。

日本の町は、戦災で大きな被害を受けた東京でさえも、かつて寺院の境内だった名残りをいたるところに留めている。増上寺の場合は、旧境内地の範囲に、僧侶の住まいであった山内寺院や、霊廟の門などの構造物が残存しているそうだ。［図1］

震災や戦災を経た東京には、江戸時代の建物などもう無いように考えがちだが、実は、国宝や重要文化財に指定されている江戸時代以前の建造物が36件ある。これらの建造物のうち、寺社に関わるものは27件。寺社建築が、江戸をいまに伝える建造物の最後の砦であることをよく示す数字といえるだろう。

さらに増上寺は、寛永寺・浅草寺とあわせて江戸の三大寺院と呼ばれるが、他の二院と比べても、江戸時代の記憶が多く残っている場所だという。増上寺の周りには、いま、オフィスビルや繁華街が押し寄せてきていて、むしろ上野のほうが昔ながらの風景があるように思っていたので、意外だった。しかし、増上寺の旧境内図を現在の寺院の分布と照らし合わせると、江戸時代の子院が、実はいまも同じ場所に残っているのが分かる。［図1・図2］

1 ※図1は紙媒体のみの掲載となります

［図1］伊坂道子「増上寺旧境内と歴史的建造物・旧山内寺院等分布図」

2 増上寺の創建と芝への移転

増上寺についてはまず、『三縁山志』という、研究上非常に重要な史料の紹介があった。

『三縁山志』によれば、増上寺が創建されたのは、室町時代の明徳四年。創建の地は、いまの平河天満宮からホテルニューオータニ付近だったと伝えられているが、徳川家康の入国を機に徳川家の菩提寺となり、江戸城下の開発にともなって芝に移転することになった。

『三縁山志』にある、造営間もない頃の境内図（元和十年頃）［図3］を見ると、表門（現・大門）、三門（現・三解脱門）、そして本堂がある。芝丸山古墳の場所も「圓山」として示されている。このようにお話を伺うと、確かに、増上寺とその周辺は、江戸が開かれたころの景観構造とでもいうものを、実はそのまま保っているように感じる。

2

［図2］増上寺山内寺院五十院（国立国会図書館所蔵『増上寺本坊并学寮塔頭作事絵図面』、明治2年より）

3 現存する江戸初期の遺構

三解脱門［図4］は、戦災を奇跡的に免れた江戸初期の建築物で、軒下に、禅宗様の大きい詰め組みが組んであるのが見所とのことだ。後日の建築ガイドツアーでも、参加者の関心を集めていた（ツアーの様子は、「慶應義塾と三田の名建築」［20ページ］を参照）。将軍が江戸城から来るときに使う裏門だった御成門は現在、東京プリンスホテルの構内に移築されている。

増上寺にまず建てられたのは、二代将軍秀忠の台徳院霊廟とその正室、お江の崇源院霊廟だ。かつて台徳院霊廟の惣門の先には霊廟の拝殿と本殿があり、圓山には五重塔があった。つまり、寛永時代以降は、品川宿から東海道を日本橋に向かうと五重塔が見え、そして浜松町のところで振り返ると、増上寺の表門と三門と本堂が重なって一直線に見える、という眺めがあったということだ。歌川広重が浮世絵にも描いているように、まさに増上寺が、江戸の玄関口にランドマークとして存在していたと思わせる眺めだ。［図6］

3

［図3］元和十年頃の境内図（国立国会図書館所蔵『三縁山志』より）

4

［図4］三解脱門 軒下部分（『昭和大修理前の増上寺三解脱門』『修理工事報告書』より）

ランドマークといえば、寛永時代には、旧御成道である日比谷通りの場所に松原があったという。松原は、建物の防火と敵襲に対する備えとして造成されたが、同時に美しい景観を生み出していた。

4 江戸中期からの増上寺境内

徳川将軍家の墓所というからには、増上寺には、すべての将軍が眠っているようなイメージがあるかもしれない。しかし、二代将軍秀忠の後に増上寺に葬られたのは、六代将軍の父、徳川綱重（清揚院）であり、四代将軍と五代将軍の墓所は上野寛永寺にあるという（徳川家の菩提寺については、「留学生がきく！ 増上寺座談会」［30ページ］を参照）。綱重は、もともと小石川伝通院に埋葬されていたが、子の家宣が六代将軍となったことに伴い、増上寺へと改葬されて、将軍と遜色ないような霊廟が建てられた。清揚院霊廟の水盤舎［図7］は、現在も境内に残っているが、彫刻の技術も高く、江戸中期に至り、建築の彫刻が深化していったことが良く分かる。その他にも、増上寺の境内には、鋳抜門や七代将軍の有章院霊廟二天門［図8］が現存している。

5

5 明治における境内の変化

講演の終盤では、増上寺の近現代、つまり明治時代以降の境内の姿について解説が行われた。

明治は、増上寺の境内が徐々に開かれていく時代だ。たとえば、「ザ・ファー・イースト」という英字新聞を発行していたジョン・レディー・ブラック（John Reddie Black）は、増上寺山内に事務所を構えて、しばしば増上寺のことを写真付きで紹介している。［図5］

一方、増上寺の敷地は、寺院ではない組織によって使用されることが多くなったようだ。本坊が北海道開拓使になったり、一部は海軍に使用されるなど、様々な新政府の組織に利用されている。また、明治二〇年代には、東京勧工場という百貨店の原型のような施設が、現在の慶應義塾芝共立キャンパス付近で営業していたようだ。霊廟も一般公開されるようになり、東京の名所として外国人向けのガイドブックにも登場するようになる。明治に入ると、現在の増上寺周辺のイメージにどんどん近づいていく印象がある。

だが、総門である大門の位置は変わっていない。大門は、関東大震災の被災後、昭和十二年に現在の鉄筋鉄骨コンクリートで再建されたが、二〇一七年に建設以来初の大改修を受けて、大門通りにその鮮やかな姿を見せている。

6

7

［図5］The Approach to Shiba, from *The Far East*, edited by John Reddie Black.［復刻版：丸善雄松堂、1999年］
［図6］歌川広重《東海道名所之内 芝増上寺》（国立国会図書館所蔵）［図7］増上寺 水盤舎

6 旧山内寺院の建造物——市街地に残る江戸の記憶

江戸、そして明治時代から、市街地は大きく姿を変えたが、大門通り沿いの増上寺旧子院はすべて残っている。伊坂氏は、増上寺の主要伽藍に加えて、これらの旧子院の調査を進めている。

たとえば、徳川家康の四男松平忠吉（性高院）の霊牌所は、元々増上寺の山内にあったが、江戸の後期に常照院がもらい受け、堂宇として設置していたことが調査によって明らかになった。この堂宇は現在、国の登録文化財に指定されている。また心光院には、かつて境内にあった表門が残されていて、赤い色が一際目を引く。

廣度院に残るのは、表門と練塀だ。［図9］表門から続く練塀は、江戸時代の御成道と大門通りの姿を彷彿とさせる。増上寺の子院は、大名の参拝時に宿坊として利用されていた。廣度院は安芸松平家の宿坊であったことから、門の中央に松平家の家紋が入っているそうだ。訪れた際には、是非確認してほしい。

また、注目したい旧子院に、妙定院がある。妙定院では伊坂氏が、熊野堂と上土蔵の調査に加え、保存修理工事を手がけている。現在、江戸時代の土蔵の姿が取り戻され、毎年仏像などのコレクションを紹介する展覧会を開催しているそうだ。

港区を歩いていると、本当に沢山の寺院に出会う。伊坂氏の講演によって、普段は何気なく行き過ぎている寺院の一つ一つは、江戸時代からの歴史を内包し、いわば歴史を覗き見る窓として機能していることが改めて浮き彫りになったことと思う。本レポートで紹介しきれなかった講演内容については、伊坂氏の著書『芝増上寺境内地の歴史的景観——その建築と都市的空間』（二〇一三年、岩田書院）を是非ご参照いただきたい。

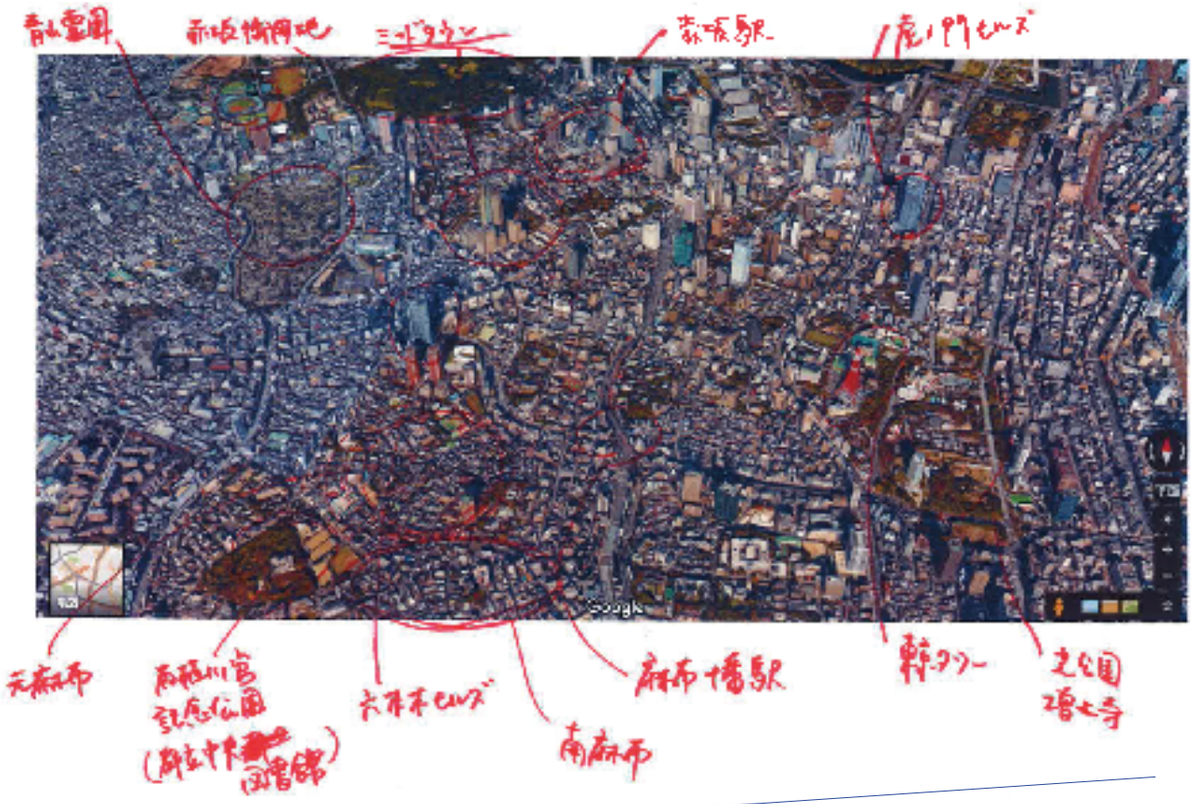
講師プロフィール

伊坂道子（いさか・みちこ）
一九七六年、武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。八三年、伊坂重春とともに、一級建築士事務所伊坂デザイン工房を設立し、現在に至る。研究対象は「増上寺旧境内」。東京大学工学部建築学科・鈴木博之研究室を経て、二〇〇九年工学院大学大学院・初田亨研究室にて博士（工学）取得。
主な業績としては、「増上寺旧境内調査と歴史的景観の保存活動」（武蔵野美術大学建築学科芦原義信賞、二〇一四）、国登録文化財妙定院熊野堂・上土蔵保存修理工事設計監理（二〇〇七）、心光院本堂（二〇一六年国登録有形文化財）耐震および意匠再生設計（二〇一五）、港区登録文化財 増上寺大門耐震修繕工事 調査および修復監修（二〇一七）。著作に『増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書』（編・共著／二〇〇三）、『浄土教の事典』（共著／二〇一二）、『伊坂道子の住アドバイス』毎日新聞住宅面コラム連載他（二〇〇五～一二）、『芝増上寺境内地の歴史的景観——その建築と都市的空間』（単著／二〇一三）、二〇一六年日本建築学会著作賞受賞。

8

9

［図8］有章院霊廟 二天門
［図9］廣度院 表門と練塀



crawling on the ground won't reveal whether something is a hill, completely flat, or on a slight incline. Here, take a look. This gives a birds-eye view of Minato-ku you won't have seen before. See how the high-rise buildings and green spaces are scattered around. That's in stark contrast to the densely built-up areas of, say, nearby Tokyo and Shibuya Station. And notice how surprisingly close certain neighborhoods are to each other, something you cannot grasp by walking around or travelling by train.

HT It's true, I didn't expect neighborhoods like Aoyama, Akasaka, Azabu and Mita to be so close together. I hardly ever travel between them on foot, and yet they are all in the same Minato-ku. It's strange seeing them in a single frame with no sense of distance, when it feels like they should be separate. Also, the amount of green spaces — you mentioned they were "scattered around," and it does seem like the area is filled here and there with patches of green.

DR If you reassess the geographical picture of Minato-ku, you can see how the image of "Minato-ku" the place is weighted towards one of high status.

HT And its particular topography is undoubtedly the cause of this bias... which I guess is the central point. This is how Minato-ku as we see it today was formed. Its dynamism was brought forth and supported by its many slopes, and the desire for higher status, intricately obscured.

DR Old and new money are bundled together in the common image of Minato-ku's "wealthy class". And naturally, those who seek to be a part of this group have been drawn to the area. Here, a mutually beneficial relationship has been formed. The noble families who have always been in the area also seek a higher status, through progress and newcomers gravitating to the area. Rather than thinking of this as plundering Minato-ku's riches, they think of this as adding to them.

Although Minato-ku is an extreme example, the development across all of Tokyo follows a similar model.

HT I see. It's certainly true surprisingly little resistance to urban development exists in Tokyo. Or perhaps I should say it seems there's a generous attitude towards anything that makes the city a more convenient place to live or "improves" it in some way. So from a theory of Minato-ku we get a theory of Tokyo. It's an expansive and deeply interesting theme, but unfortunately we don't have the time to delve any deeper. Thank you for speaking with us today Dr. Hillman. Take care, and please, for your own health, try walking up some of those hills once in a while.

COLUMN

「グーグル・アースダイバー」から見る港区
架空のインタビューを通じたデザイン・フィクション

Notes on The Google Earth Diver: Design Fiction of a Hoax Interview

Rhetorica（松本友也＋太田知也＋遠山啓一）

51ページからお届けするのは、「坂博士（Dr.Hillman）」という架空の人物に取材をしたという体裁の、雑誌記事風インタビューです。すなわち、次稿はリサーチの記録でもなければ、エッセイでもなく、雑誌記事の形式を借りた一つのフィクションなのです。本誌『ARTEFACT』に、なぜそのような創作が載っているのかという疑問に答えるべく、ここでは手短に解題を記すことにします。

まず、私たち Rhetorica（レトリカ）は「批評とメディアのプロジェクト」を掲げて活動を行う文化運動です。私たちの刊行物『Rhetorica #03: FICTION AS NON-FICTION』[*1] をご覧になった慶應アートセンターの方々にお声掛けいただいたことがきっかけとなり、本誌のデザインを担当しました。オファーとしてはデザインのみならず「何らかの独自企画を作って欲しい」とも言われ、頭を捻り始めました。

都市・建築領域のプロパーではなく、また都市史や文化史に深くアクセスできるわけでもない在野の私たちが今回のプロジェクトに参加するにあたり、「港区」というエリアに対しどのようにアプローチしていくべきか。まずはそれを考えました。そして、やはり在野のアマチュアリズムを転用・再発明してみせることが、与えられた機会に対するベターな回答だろうという考えから「架空の在野知識人にインタビューした創作記事を作る」という企画を思いつくに至ったのです。

私たちは今回、港区の基礎調査に際して Google Earth や Google Maps といった衛星写真閲覧ツールを利用しました。もしかしたら私たちと同じように、誰にでもアクセスできるこれらのツールを用いて独自の思索を深めている独学者がいるかもしれません。とはいえ、すぐさま私たちがその種の人に「成る」ことはできません。でも、彼らに「倣う」あるいは「擬く」ことならば、それほど苦も無くできるでしょう。つまり、彼らが参照しそうな文脈――中沢新一『アースダイバー』など――を引用してきて、彼らが考えそうなことの断片を想像すること。あるいはグーグル・アースダイバーといったいかにもな洒落を弄してみること。

このような着想（妄想?）を核にして、架空のインタビューの背景を作っていきました。あらすじは次の通りです。聞き手はオリンピックを目前に控えた東京の中心地・港区への注目を熱くする、とある海外の雑誌メディア。彼らは港区を独自の切り口から取材するべく、「坂博士」を自称する坂田という男へのインタビューを敢行した。インタビュー誌面には坂博士の研究を断片的に示唆する草稿やグーグル・アースのスクリーンショットが配置され、彼が書いた（であろう）自費出版の研究書『唯坂史観』の書影とその紹介が並ぶ――。

内容面は以上ですが、形式面からみると次稿は『ARTEFACT』全体において書物内書物（Book in Book）のようなかたちで挿入されます。あるいは、本誌が「プロジェクト・マガジン」を標榜することを踏まえるなら、雑誌内雑誌（Magazine in Magazine）という言い方のほうが適切かもしれません。

ところで。形式に遊んで虚構を伝え、フィクショナルな位相から何らかの対象へとアプローチすることが、近年の西欧におけるデザインの領域で方法論化されつつあります――デザイン・フィクション（Design Fiction）と呼ばれるものです。その提唱者によれば、デザイン・フィクションとは「架空の世界にありそうな人工物をプロトタイプすることで現実と虚構を撹乱させる」ものです。[*2] [*3]

これに類するグラフィック・デザインの事例としては、Experimental Jetset や Metahaven というグループを挙げられます。前者は『EP』という雑誌上で、架空の国家において生じた（であろう）アヴァンギャルド運動に由来する雑誌カバーを制作しています。[*4] また後者は、イギリス南東の洋上にある「自称」国家・シーランド公国のためにデザインされた（という体裁の）、架空のコーポレート・アイデンティティを提案しています。[*5]

雑誌が本来、単行本ほどには一人の著者の統御下に置かれないことによる猥雑さで特徴づけられ、原稿の長短や硬軟、図版の多少、書き手の老若、そして組版の緩急が入り混じる雑多な平面を構成するものであることを思い起こしてみる時、プロジェクト・マガジンを目指した本誌に虚構が混入してしまうこともまた、十分ありうることかもしれません。[*6] [*7]

[*1] http://rhetorica.jp/rhetorica-03/

[*2] 上述の定義は引用者による要約であり、定義に関する原文は次の通り。「架空の物語世界に属する人工物を適切に用いることで、変化についての凝り固まった思い込みを一時的に留保してみる」（[Design Fiction is] the deliberate use of diegetic prototypes to suspend disbelief about change.）

[*3] Bosch, Torie. (2012). "Sci-Fi Writer Bruce Sterling Explains the Intriguing New Concept of Design Fiction". *Slate*. http://www.slate.com/blogs/future_tense/2012/03/02/bruce_sterling_on_design_fictions_.html

[*4] そこで制作される表紙自体が、『EP』の未来の号に付される（であろう）ものだと位置づけられており、実際はさらにややこしい企画となっています。Coles, Alex. (ed). (2016). *EP /Volume2 Design Fiction*. Sternberg Press.

[*5] Metahaven. (2010). *Uncorporate Identity*. Lars Müller Publishers.

[*6] デザイン・フィクションの中心的な理論家にして提唱者の一人でもある SF 作家ブルース・スターリングが、最近のインタビューにおいて昨今のフェイク・ニュースを「意匠で〝武装〟したデザイン・フィクション」（weaponized design fiction）と呼んでいるのは、このことを裏側から傍証しているように思われます。

[*7] Shenoy, Gautham. (2018). "Fake news often reads or looks on video, like weaponized design fiction: Bruce Sterling". *FactorDaily*. https://factordaily.com/bruce-sterling-cyberpunk-interview/

As Liebniz might have asked, why is there something sloped rather than nothing but hills?

west into those areas that were originally upper-class and those emerging areas of development.

DR As Liebniz might have asked, why is there something sloped rather than nothing but hills? ...Metaphysics aside, the many slopes in Minato-ku do not just create a vertical mix in the physical terrain, they also cause cultural and economic division on a horizontal, micro level. Without the slopes, with only the simple topography of a hill and a valley, this mix would not be there. Sloping land divides, disguises and obscures.

HT The aim then is the "leveling of the land". The artificial island of Odaiba, built on reclaimed land, is not perhaps Minato-ku's only "filled in" area. This answers the question why we get a sense that Minato-ku appears flat when there are so many slopes going up and down. We can also see the deeply interesting connection between desire and topography...

The view of a Google Earth Diver

DR It's because of this we get real diversity, or perhaps "Odaiba-sity". Some things, on the other hand, are revealed from a perspective that actually nullifies the topography. Try using Google Map's satellite view. Not only can you zoom in and out, but also change the angle of your viewpoint. Personally I can spend half a day exploring on Google Earth. Shinichi Nakazawa wrote of an "Earth Diver," but we now have the view of a "Google Earth Diver".

HT And you certainly make a great "Google Earth Diver"...But Dr. Hillman, don't you actually walk up and down the slopes yourself?

DR Why walk when you can dive down out of the sky from an orbiting satellite? The view from a bug

on high ground, while the craftsmen and artisans lived in the valleys or on low-lying land, quite literally "downtown". This adheres to the concept that the higher or lower something is located, the higher or lower their status in society. Later on, these elevated areas became home to aristocrat families. Foreign embassies moved in, and affluent, high-class neighborhoods were formed. For areas like Azabu and Shirokane, this history functions as a backdrop to their "brand".

After the end of the World War II, the wards of Shiba, Akasaka, and Azabu were incorporated into the new Minato-ku ward, and due to the presence of middle ranking American army officers in the area, as well as foreign embassies, the commercialization of Minato-ku progressed at a pace. This was a period of rapid economic growth, and as well as Tokyo Tower, high-rise buildings and apartment complexes for the wealthier classes were built in Minato-ku. The issue at the time was where to construct these giant skyscrapers. Only low-rise buildings could be built on the elevated land of the affluent residential areas, which is still the case today. So high-rise buildings were positioned along the main highway, where building restrictions were less rigorous, and the low lying land was relatively cheap. I don't know how much this was a conscious effort to break down the entrenched social divisions connected to the land, but in any event, this is how things developed.

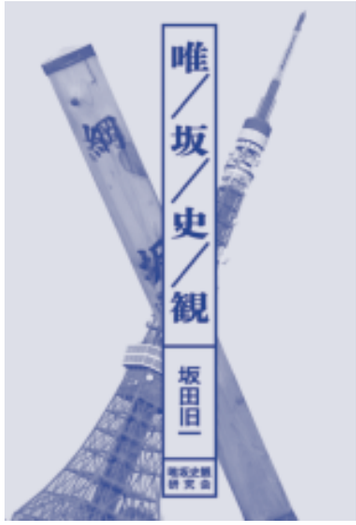
HT I see. So by constructing tall buildings on low lying land, such areas acquire a status usually only benefiting high lying land. Consequently, the height differences in terrain are "leveled". The land does not seem to go up or down in any one direction, and people can't easily divide the area by roughly pointing to an "uptown" or "downtown". And even if there is a division it is barely noticeable... Essentially it seems there is no change to this pattern with Minato-ku as it is today.

Flattening the divisions and hierarchies caused by sloping terrain

DR While superficially Minato-ku has this image of a single affluent district, the dominance of residential areas with low-rise buildings on high ground is hard to shake off, and a more detailed examination reveals differences in status on a block by block basis. Inconsistencies at this micro level maintain the desire to attain the higher status of one's neighbour. There are attempts to bridge these gaps, but it's an undeniable fact that some areas are simply higher up than others. Without a major economic shift, movements to even out such divisions are destined to continue.

HT So even though at first glace it seems like a process of gentrification is taking place, where the wealthy classes move into relatively lower class areas (or what might have been called the artisan quarter), the complicated topography on a micro level means there are differences in status that are hard to discern. This feels similar to what you were saying earlier about the scenery. The ward cannot simply be divided going east to

Try using Google Map's satellite view. Not only can you zoom in and out, but also change the angle of your viewpoint. Personally I can spend half a day exploring on Google Earth. Shinichi Nakazawa wrote of an "Earth Diver", but we now have the view of a "Google Earth Diver".



『唯坂史観』
Slope-rical Materialism

Dr. Hillmanこと坂田旧一が独自に研究し、20年の歳月をかけて体系化した都市発展史理論の集大成的作品。

都市の形成に関わる諸条件のうち、地形の起伏こそが特権的に重要であるという仮説を立証するため、主要な研究フィールドである東京23区を中心に、関東圏の主要都市の特性と地形の関わりを網羅的に分析している。

特に注目すべき成果としては、文京区／渋谷区／港区の現在における文化的・経済的なポジションの差異を、3区それぞれの坂の比較を通じて発展史的に解明した第2部が挙げられる。

また昨今のGoogleツールの発展により、博士は世界の主要都市にも在宅フィールドワークの足を伸ばしており、その成果は改版に付された補講に示されている。（書誌情報:坂田旧一『唯坂史観』唯坂史観研究会、1989年）

This work represents the accumulation of twenty years of independent research by Sakata Kyuichi (Dr. Hilly Hillman) into an interpretative and historical theory of urban development since 1989.

It is Dr. Hillman's hypothesis that undulations in the land hold a privileged position among the multiple conditions related to the formation of towns and cities. In order to provide evidence for this, Dr. Hillman makes a comprehensive analysis of the particular characteristics and topography of major urban centers in the Kantō region, centering on the 23 special wards of Tokyo, the principal field of his research.

His work on present day Bunkyō-ku, Shibuya-ku, and Minato-ku is particularly fruitful. Part two of the book gives a historical and developmental explanation for the cultural and economic differences in each of these wards, by comparing their respective slopes.

Additionally, due to recent developments in Google mapping tools, Dr. Hillman has been able to extend his research into the major cities of the world by carrying out "fieldwork" from his desk. The results of which are shown in supplementary material in the revised edition (published in 2018).

"歩く代わりに衛星軌道から —— 空からダイブしているのだ。虫の眼で見てしまうと、何が坂であり、何が坂ではないのか……何もわからなくなる。"

HT いわゆる職人街のような、相対的に下層のエリアに富裕層が入り込んで開発されていく"ジェントリフィケーション"に一見似ていつつも、その高低差がミクロに存在し入り組んでいることで、外からその格差が見えづらい。先ほどの風景が見えづらいという話とも繋がる気がします。どこが元から高級で、どこからが新興の開発区域なのか、区の東西のようなシンプルな図式では語れない。

DR なぜ何も無いのではなく坂があるのか……。港区の坂は垂直軸の高低差を作るだけではなく、水平軸の分断によってミクロな入り混じりを生み出しているわけだ。坂がなければ、そこには丘 —— つまりシンプルな高低差 —— があるだけだったであろうからな。坂は分断し、隠し、仄めかすというわけだ。

HT "埋め立て"は的を得ていますね。港区の埋め立てはお台場だけではない。我々が感じていた疑問はまさに、なぜこれだけアップダウンがありながらも、港区がのっぺりして見えるのか、ということだったのです。そこには欲望と地形の実に興味深い関係が……。

Google Earth Diverの視点

DR そう、これこそが真のダイバーシティ、アースお台場（ダイバー）というわけだ。逆に、地形を無化する視点から見えてくるものもあるだろう。Google Mapsの空撮を見てみたまえ。これはズームだけでなく、視点の高さを変えることもできる。実際、私は1日の半分をGoogle Mapsでの探索に費やすのだ。

HT そんなあなたは、Google Earth Diverというわけですね。 —— しかし博士、実際に坂を登ってみることはしないのですか?

DR 歩く代わりに衛星軌道から —— 空からダイブしているのだ。虫の眼で見てしまうと、何が坂であり、何が坂ではないのか、ただの傾斜にすぎないのか……何もわからなくなる。見たまえ。鳥瞰で捉えた港区は新鮮に映るはずだ。タワー群と森の散らばり —— それは例えば近隣の東京駅や渋谷駅周辺の密集具合とは明らかに異なる。徒歩や鉄道といった移動の視点で捉える限りでは気付けない個々のスポットの意外な近さにそこで気付かされるだろう。

HT 確かに、青山や赤坂と麻布、それから三田の位置関係には意外さがあります。同じ港区ですが、徒歩で移動することはほとんどありませんし。遠さ・近さの感覚というよりは、それらが一つの画角に収まっていることへの違和感がありますね。本来個別に存在しているはずのものたちが、です。そして緑の多さ。「散らばり」とおっしゃいましたが、まさに点々と緑が埋まっているように見えます。

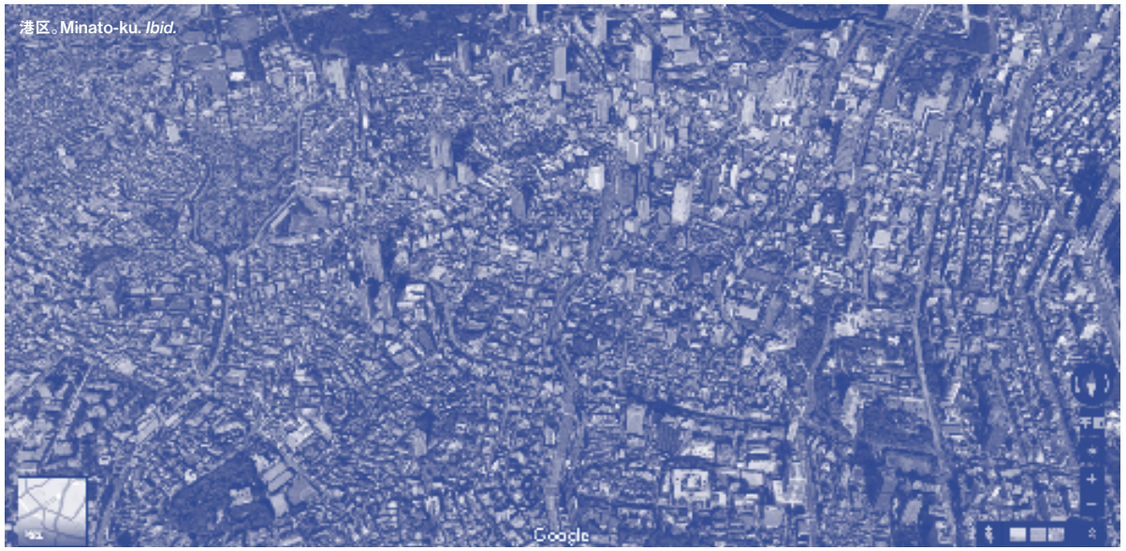
DR 地理的な港区のイメージを改めて確認すると、いわゆる「港区」のステータス的なイメージがいかに偏っているかがわかるだろう。

HT そしてそのイメージの偏り自体も、まさしく地形的特徴が生み出している……というのがお話の肝でしたね。そこから今日の港区のイメージも形作られている。港区のダイナミズムは、地形に支えられ、絶妙に隠されたステータスへの欲望によって生み出されている……。

DR 貴族的なものと成金的なものが、ともに「富裕層」というイメージで括られているわけだな。そして当然、内外で港区を欲望する者たちはその括りを望んでいるわけだ。ここには共犯関係がある。元々住んでいる人間も、開発が進んで人が集まることで、さらに自分たちの居住区のステータスが高まっていくことを望んでいる。価値が奪われると考えるより、価値が"盛られる"と考えているわけだ。

港区はラディカルな事例だが、東京で起きている開発の進行はほとんどこれの相似形だと言える。

HT なるほど、確かに開発への抵抗が意外と弱いというか、便利になったり「良い街」になっていったりすることに対して、ある意味では寛容な態度があるという印象です。港区論から東京論へ。壮大かつ興味深いテーマではありますが、ここで掘り下げるには少々時間が足りないようです。博士、今日は本当にありがとうございました。お体にご自愛を。健康のためにも、たまにはご自分で坂を登ってみてください。



港区。Minato-ku. *Ibid.*

Minato-ku, as though it's more than a neighborhood centred on a transport hub, but a town in its own right. This is why it has a certain "superiority," a special status and brand image.

DR Well actually, Minato-ku does not exist as a single "destination". It is an identifiable district in name alone... Even so, it is a name that carries with it a certain standing — as being somewhere the upper echelons of society have congregated, whether from noble families with a long history, or ambitious entrepreneurs bringing new money.

HT And I guess most of us view it with a kind of envy, but at the same time admiration. As you said, Minato-ku covers a large area, and is a mixture of ancient tradition and the most up-to-the-minute innovation, often placed side by side. But apart from a vague sense of "superiority," if you ask people to try and picture Minato-ku, no clear image comes to mind...

DR It's true there are a number of iconic landmarks in Minato-ku, however, there is no iconic view of Minato-ku itself that goes beyond these specific landmarks. Regardless of the area's many photo opportunities, or perhaps as a consequence of it, there is no one photo that says "Minato-ku"... Whether or not this is a problem particular to Minato-ku, I can't say, but it's certainly true that establishing such a depiction is not easy. Although located in central Tokyo, transport links in Minato-ku are poor, which is why it was once called an "island surrounded by land". There is no major rail terminal. Shibuya-ku has Shibuya Station as its focus and the Yamanote Line, Chiyoda-ku has Tokyo Station and the Imperial Palace. Constructing such a focal point and viewing angle that captures Minato-ku is extremely problematic.

HT Because no agreed makeshift centre for Minato-ku has ever been established. That would be our hypothesis I guess...

DR Yes, that's right, and of course the particular topography of the area has a big impact. Viewing Minato-ku from ground level, its green spaces, its uneven terrain, the distances between each landmark, these are all factors inhibiting the creation of an iconic view. Stretching the point a little further, the field of vision is so obscured it's almost like being stuck in a dungeon.

Stretching the point a little further, the field of vision is so obscured it's almost like being stuck in a dungeon.

Differences in land elevation and differences in class

HT I see, I wonder then if the obscured landscape and issues in establishing an iconic view have negatively influenced Minato-ku's image... This is exactly the reason we came to see you, Dr. Hillman. Namely, Minato-ku's many slopes. Traditionally, the higher or lower something is located physically links to its status in society. But because the topography of Minato-ku is so diverse, the cultural and economic picture is a rather chaotic mishmash.

DR Yes, for example, take the cultural and educational centers of Shibuya-ku and Bunkyō-ku. Like Minato-ku, both are within Tokyo's Yamanote Line, and both have hills, but unlike Minato-ku they only slope up or down in one direction. Can we conclude from them that a basin shaped topography encourages cultural development? Or cultural and educational institutions preserve their lofty status by being built on high ground? No, of course this is too simplistic. As you said yourself, the situation in Minato-ku is more complicated.

If we look at things historically, in the beginning it is very clear. During the Edo period the residences of grand samurai families stood

浮かべる風景というのが、どうにも欠けているような……。

DR 港区には数多くのシンボルやスポットがある。しかし具体的なスポット以上にシンボリックな「風景」は無い。写すものがたくさん在るにも関わらず、あるいはたくさん在るがゆえに……? それが港区固有の問題かどうかは証明が難しいであろうが、しかしビューポイントを作りづらいのは確かなのかもしれない。一時期は陸の孤島とも言われていたように、港区の内側は都心にありながら交通アクセスがいまいち良くない。巨大なターミナル駅も無い。渋谷区なら山手線と渋谷駅を中心に、千代田区なら東京駅や皇居を中心に、といった視点の中心や画角が港区の場合、構成しづらい。

HT 誰もが同意する港区の暫定的な中心、というのが定まらないわけですね。私たちの仮説では……。

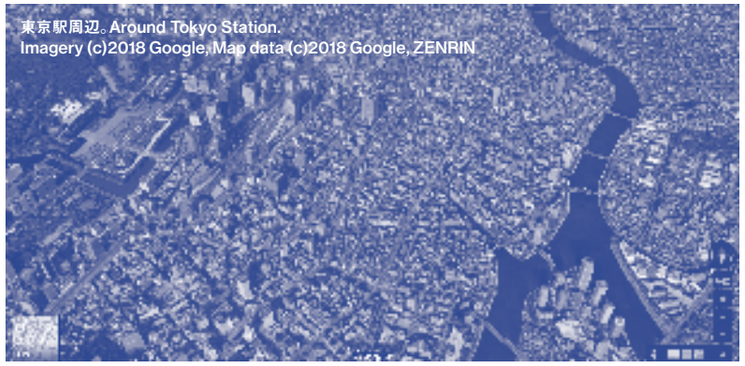
DR そう、地形的な特徴がもちろんそこに大きく関わってくる。人の視点から街を見たときに、港区の緑の多さと高低差、個々のランドマークの遠さ(広さ)は、ビューポイントの構成を妨げる要因となっているだろう。大げさに言えば、ダンジョンめいた見晴らしの悪さが視界を遮っている。

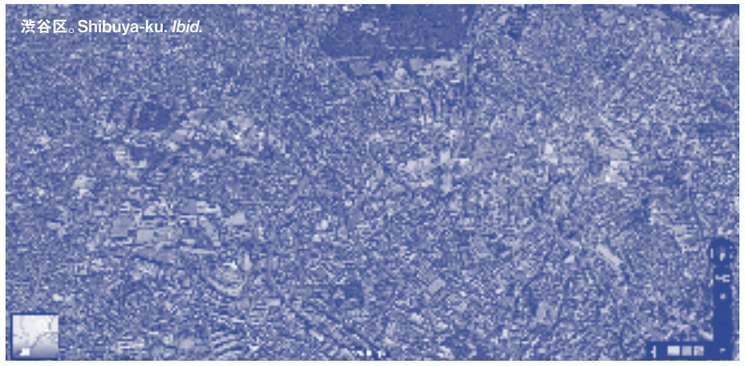
“地盤と結びついた強固な階級差を埋めるように、というのをどこまで意識していたかわからないが、実際に開発はそのように進行していった。”

高低差と階級差

HT なるほど。その見晴らしの悪さ、風景の構成しづらさは、港区のイメージに何か影響を与えているんでしょうか。ここがまさに今回博士にお伺いしたかった一番のポイントなのです。つまり、港区には坂が多く、そして一般的に地形の高低差は社会的地位の差に繋がります。しかし港区の地形は複雑で、いまいちその文化的・経済的な混淆を整理しきれないのです。

DR たとえば山の手内側の区で同じように坂が多い渋谷区や文京区であれば、高低差は一方向的に広がっている。すり鉢状の地形に文化が形成されるか、高台に築かれた伝統ある文化施設・教育施設がそのまま階層を保存するか、どちらにしても非常にシンプルだ。そして君が言ったとおり、港区の場合は少しばかり事情が複雑かもしれない。


東京駅周辺。Around Tokyo Station.
Imagery (c)2018 Google, Map data (c)2018 Google, ZENRIN


渋谷区。Shibuya-ku. *Ibid.*

歴史的に見ていくと、スタートは非常にシンプルだ。まず江戸時代、高台には武家屋敷が並んでいた。谷間や低地は職人街、いわゆる下町だ。高低差=階層差のシンプルな構図がそこにはある。武家屋敷エリアは後に華族の住居となり、大使館も集まり高級住宅地を形成した。麻布や白金が“高級住宅地”として認知されていった背景では、こうした歴史がいわばブランド的に機能していた。

戦後に芝区・赤坂区・麻布区が統合され港区が誕生して以降、米軍の中流や大使館によって商業化が進み、高度経済成長期に高層ビルやマンション群が建設され、東京タワーが建てられる。このときに問題なのは、港区のどこに高層ビルが建つのかという問題だ。高台の住宅地エリアは今でも低層の建物しか建てられない。高い建物を建てられるのは、規制がゆるく、相対的に地価の安い谷間や低地の幹線道路沿いとなる。地盤と結びついた強固な階級差を埋めるように、というのをどこまで意識していたかわからないが、実際に開発はそのように進行していった。

HT なるほど、高地のステータスの恩恵を低地もそのまま受け、低地が開発され高層化することで、高低差が結果的に“均される”。高低差が一方向的ではなく、入り組んでいることによって「こちらは高い/あちらは低い」といったようなざっくりとした分断が生じづらくなり、分断があるとしてもそれは非常に細かい単位でしか存在しない……。これは今の港区でも基本的に変わっていない構図のように思えます。

坂による分断と階層の埋め立て

DR 外から見ればざっくりと「港区」=富裕層のイメージがありつつ、微に入れば町丁目単位で地位の差があり、高台の低層住宅地の優位は揺るがない。そのミクロな格差がさらにステータスへの欲望を保存する。均す運動があり、しかし絶対に均され切らない地形差が厳然と存在する。バブルが弾けることなく、ステータスの高低差を埋め立てようとする運動が半永久的に続いていく理由だ。

Dr.Hillman Interview:

The Google Earth Diver into Minato-Ku

グーグル・アースダイバーに聞く

——“唯坂史観”から読む港区（「坂博士」インタビュー）

トーキョー・オリンピックを控えたいま、経済・文化の中心地である
港区の栄華を何がもたらしているのか——？
その秘密を探ることが、喫緊の課題となっている。
そこでわれわれ『HYPEOUT TOKYO』編集部は事情通に
ツテを頼り、有識者へのコンタクトに成功した。
地元の郷土史家にして文化地理学の探求者——
そう、彼の名は坂田旧一、自称「ドクター・ヒルマン」である。
彼が語る港区の秘密、それはやはり、坂……!

As Tokyo braces itself for the 2020 Olympics, we began thinking about Minato-ku, one of the city's 23 special wards. Why has so much wealth been drawn to this center of economic and cultural activity? It's a burning issue as the Games approach, so we at the editorial department of "HYPEOUT TOKYO" called up a well-informed contact, and were put in touch with a real expert: the local historian and seeker of knowledge in the study of cultural geography Sakata Kyuichi — though he prefers to be known as "Dr. Hilly Hillman". And what did he tell us was the secret of Minato-ku's success? Hills of course!

Why is there no iconic view of Minato-ku?

HT (HYPEOUT TOKYO) Thank you Dr. Hillman for speaking with us today. Getting straight to the point, we've been studying Minato-ku, known as the center of Tokyo, from a variety of perspectives, and have come across a particularly insightful approach. It's an aspect of Minato-ku already cited in several books, and became apparent during our survey of the area. In fact, it's the reason we sought an interview with no less a personage than your esteemed self today. In short, the significance of Minato-ku's "special topography". We believe this holds the key to explaining the economic and cultural hegemony of present day Minato-ku.

DR (DR.HILLMAN) First of all, allow me to make one small correction. Minato-ku covers too wide an area to be called "the center of Tokyo". Minato-ku is an administrative ward encompassing iconic landmarks such as Tokyo Tower, Zojo-ji temple, Roppongi Hills and so on. These each function separately as a symbolic "center," whereas Minato-ku is the place they are found in. Now as you remarked, the study of this diverse region requires a multifaceted approach, but as you also said, it's a feature of its "special topography" that brings out the infinite dynamism of the area — in other words, its many slopes.

HT Well I'm relieved our hunch was correct. The reason I rashly described Minato-ku as being the center of Tokyo is that it does have this image of an independent district. Can I ask, do you know the magazine *Tokyo Calendar*?

DR Of course. If I remember correctly the latest edition featured a special on "The misery of Minato-ku," with the young actress Riho Yoshioka. Boy, I bet she'd look good even in sweatpants and a jogging top...

『東京カレンダー』2018年1月号
Tokyo Calendar. Jan 2018

HT Yes, well, we all agree with you there, except, the title of the feature was actually "The mastery of Minato-ku". What is noticeable here is the addition of "-ku" (which designates Minato as a ward). In other features in the magazine, station districts or other Tokyo neighborhoods appear in the title, such as Marunouchi, Shibuya, Ginza, Kagurazaka and so on. The only ward to be featured is

「港区」には風景がない

HT (HYPEOUT TOKYO) 博士、本日はよろしくお願いします。早速本題に入りますが、私たちはトーキョーの中心地である港区を多角的に分析する上で、ある一つの特権的な切り口を手にしています。それはいくつかの書籍に記されていることでもあり、またあるいは私たちが取材調査を重ねる中で気づいたことでもあるのですが……要するにそれは、他ならぬ博士に今回のインタビューをお願いする理由でもある、港区の特殊な“地形”の重要性です。私たちはそれが、港区の現在の経済的・文化的な覇権を説明する上で鍵になるポイントだと考えているのです。

DR (DR.HILLMAN) まずー つ訂正させて欲しい——港区は東京の中心“地”と呼ぶにはあまりにも広い。この行政単位は、東京タワー、増上寺、六本木ヒルズ——それら一つひとつは中心“地”と呼ぶにふさわしいシンボリックな形態と機能を持っている——等々のスポットを包み込んだ一つの“地域”だ。そして君が言ったとおり、この地域は多角的な分析が不可欠となるようなひろがりを持っている。そしてそのひろがりの中に無数のダイナミズムを生じせしめているものこそが、特殊な地理的要因、つまり坂なのだ。

HT 私たちの予感がそう的外れでなかったことに安心しています。私がつい「中心地」などと口走ってしまったのは、まさに港区には、それが一つの独立した「エリア」であるように感じられるようなイメージが付随しているからです。『東京カレンダー』をご存知ですか?

DR もちろんだ。最新号の特集名は「港区の憂鬱」だったね? どう考えても、吉岡里帆はジャージ姿で出るべきだったと思うがね。

HT すこぶる同感ですが、正しくは「港区の優越」という特集です。見逃してはいけないのは、ここで「港区」という区の名称が使用されていることです。別の特集号では丸の内・渋谷・銀座・神楽坂等々、基本的には駅名や町名が特集に冠されます。港区は区でありながらそのラインナップの一つとして数えられており、あたかも一つの駅ないし街であるかのように想像されているというわけです。そしてそこには「優越」、つまりステータスやブランドのイメージが付随しています。

DR 「港区」という「場所」がどこかに存在しているわけではない。あくまでも区は名称にすぎない……。しかしいずれにせよ、由緒正しき家柄の貴族か、あるいは野心に満ちた成功者たちが集う、階級社会じみたエリアの「名前」であると、そう認識されているわけだ。

HT 大衆はそれを僻み、同時に憧れるわけです。しかし博士がおっしゃったように、港区はとても広く、伝統的なイメージのエリアと、変化の最先端にあるようなエリアが入り混じっており、特にそれらが隣接してもいます。「優越」の漠然としたイメージを除いて、「港区」と聞いて人々が同じように思い

“「港区」という「場所」がどこかに存在しているわけではない。あくまでも区は名称にすぎない。”

Notes on The Google Earth Diver

Design Fiction of a Hoax Interview

Rhetorica
(Tomoya Matsumoto, Tomoya Ohta, Keiichi Toyama)

The following article concerns an imaginary conversation between a journalist and a fictional character called "Dr. Hilly Hillman". It is not a record of academic research, or an essay, but a work of fiction, borrowing the form of a magazine interview. Here are some brief notes explaining why this piece of creative writing should appear in *ARTEFACT*.

First of all, we are Rhetorica, a cultural movement involved in the provocative projects concerned with "criticism and media". We were approached by the Keio University Art Center after they saw our publication *Rhetorica #03: FICTION AS NON-FICTION*.[*1] The Center asked us to not only take over the design of *ARTEFACT*, but also come up with a plan for it that was "unique" in some way. We began thinking very hard about this.

We are not professionals in the fields of urban planning and architecture, nor do we have any special access to material on urban and cultural history. We exist outside the establishment, so on participating in this project the first thing we considered was what approach to take towards Minato-ku, this affluent district at the center of Tokyo. We decided the right response to the opportunity presented to us was redirect or reinvent the non-professional modes of outsiders like ourselves. From this idea we came up with a plan to produce a work of fiction, an "interview" with an imaginary maverick intellectual.

For a basic survey of Minato-ku we used the satellite imaging tool on Google Earth and Google Maps. Like us, anyone can access these tools, and perhaps some self-taught intellectuals have used these applications to theorize more deeply on their own left field philosophies. We could not "become" such an intellectual overnight, but it was perhaps not so difficult to follow in their footsteps or imitate them. Anthropologist Shinichi Nakazawa's book "Earth Diver", which makes connections between the topography of ancient Japan and modern Tokyo,

[*1] http://rhetorica.jp/rhetorica-03/

[*2] The above definition paraphrases science fiction author and central figure in the field of Design Fiction Bruce Sterling and his own definition that Design Fiction is: "the deliberate use of diegetic prototypes to suspend disbelief about change". [*3]

[*3] Bosch, Torie. (2012). "Sci-Fi Writer Bruce Sterling Explains the Intriguing New Concept of Design Fiction". *Slate*. http://www.slate.com/blogs/future_tense/2012/03/02/bruce_sterling_on_design_fictions_.html

[*4] In a recent interview Bruce Sterling described the current phenomenon of fake news as "weaponized design fiction". [*5] This seems to support the view that magazines can blur the lines of reality.

[*5] Shenoy, Gautham. (2018). "Fake news often reads or looks on video, like weaponized design fiction: Bruce Sterling". *FactorDaily*. https://factordaily.com/bruce-sterling-cyberpunk-interview/

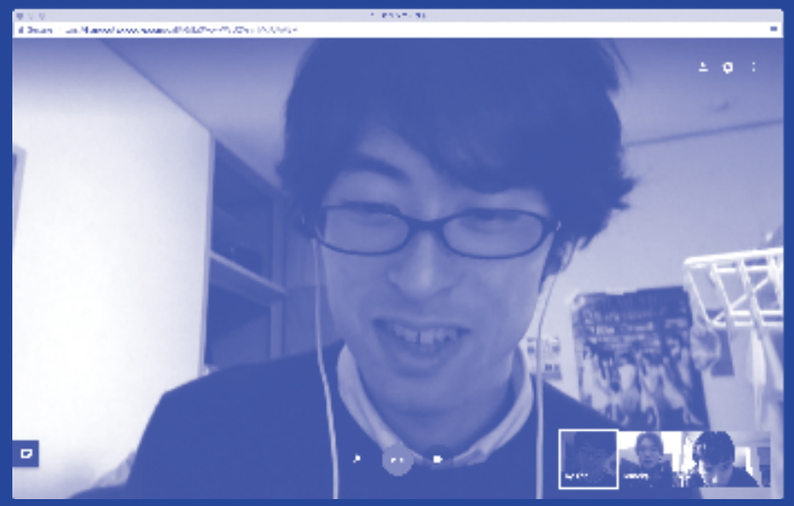
might form part of a conceptual context for such a person. By referring to this work we can imagine fragments of their thought processes. It would also be likely they would make a play on words such as "Google Earth Diver".

This concept (or perhaps fantasy?) became central to forming the backdrop of our fictitious interview. The outline of which is this: An interviewer from an overseas magazine is focusing attention on Minato-ku ahead of the impending Olympics. In order to find some original approach for his article, he interviews a person called Sakata, who uses the name "Dr. Hilly Hillman". On the same page as the interview there is a draft manuscript by Dr. Hillman, giving a fragmentary glimpse of his research, and a screen shot of Google Earth. The cover of Dr. Hillman's self-published book *Slope-rical Materialism* (fictional of course), and a description of the book are also featured.

This is the content of the piece. In terms of its form, it has been interposed into *ARTEFACT* taking the shape of a "book within a book". Although, since *ARTEFACT* begins by professing itself a "Project Magazine", then perhaps "magazine within a magazine" is more suitable.

Playing with form to communicate a fabrication, approaching a subject from a fictional phase — in recent years these ideas have formed a methodology in the field of design in Europe and America known as "Design Fiction". According to its advocates, Design Fiction disturbs the viewer's conception of reality and fantasy by presenting prototypical artifacts that seem to exist in an imaginary world. [*2]

Magazines, unlike books, are not under the control of a single author. They are characterized by their chaotic nature. They are composed of miscellaneous articles differing in length, tone and use of illustrations; produced by writers of varying ages, mixing formal and informal typesets. Considering this jumbled construction of polyphonic styles and voices, it is certainly not unlikely that a magazine like *ARTEFACT*, that aspires to be a "Project Magazine", should mix in fiction with fact. [*4]



in). The fourth and fifth *shoguns* were buried in Kan'ei-ji Temple, Ueno (for the story of Tokugawa family's temple, see 'Interview with Monks', pp. 20-21). Tsunashige was first buried in the Koishikawa Denzu-in Temple. When the son of Tsunashige became the sixth *shogun*, Tsunashige was elevated to a higher rank, and a mausoleum (Seiyou-in mausoleum) that compared favourably with those of the other *shoguns* was built in the Zojo-ji Temple for him. The water basin of the Seiyou-in mausoleum (Suiban-sha) still exists in the Zojo-ji Temple [Figure 4], together with other remains such as the Yusho-in Niten-mon Gate and Inuki-mon Gate. [Figure 5]

Zojo-ji Precincts in Meiji Period

In the latter part of her lecture, Dr Isaka described the situation of Zojo-ji at the end of the Meiji Period. Meiji is a period when Zojo-ji was becoming open to the public.

For example, English publisher John Reddie Black had his office in Zojo-ji's precincts and published an English newspaper called *The Far East.* [Figure 6] It often introduced aspects of Zojo-ji with photographs. In addition, the new government used the facilities of Zojo-ji as government offices. The Honbo became the Hokkaido Development Commission and the navy also used a part of the precincts. At the end of 19th century, the Tokyo Bazaar was built near the current campus of the Keio University faculty of pharmacy; it was something of a prototype department store. The mausoleums were also opened to the public and became a very famous Tokyo sight that was introduced in guidebooks for foreigners.

Dai-mon was not removed, and in 1937 it was re-built with a reinforced steel frame and concrete, which can be seen today.

Old affiliated temple buildings: The memory of Edo that remains in the current urban area

In addition to the main temple, Dr Isaka investigates the buildings of the old affiliated temples. The old affiliated temple along Dai-mon Street remains as it was in the Edo period.

Through the research of the Josho-in Temple building, Dr Isaka discovered that in the latter part of the Edo period, the worship place of Shoko-in (the fourth son of Ieyasu Tokugawa) was given to Josho-in Temple and the temple rebuilt as a hall. The front gate in Shinko-in Temple, next to Tokyo Tower, originally existed in the precincts. In Kodo-in Temple the front gate and the *Neribei* (daub wall) still remains. [Figure 7] The *Neribei* is reminiscent of Onarimichi Street and Dai-mon Street in the Edo period. The affiliated temples of Zojo-ji were used as guesthouses when feudal lords visited Zojo-ji. The Aki-Matsudaira family used the Kodo-in Temple. Therefore, the insignia of the Matsudaira family is in the centre of the gate.

Myojo-in Temple is another affiliated temple of particular interest. Dr Isaka conducted an investigation of the existing Kumano-do hall and Kami-dozo hall and started the conservation and restoration work in 2005. After these repairs, Myojo-in Temple regained the original appearance of the Edo period.

We encounter many temples when walking around in the Minato ward. I suppose the lecture of Dr Isaka reveals that every temple embraces the history since the Edo period. For further details about the old precincts of Zojo-ji Temple, please refer to the book by Dr Isaka, *The historical scenery of Zojo-ji Temple and Shiba-park — The heritage of architecture and its community area* (Iwata-shoin; 2013).

[Figure 4] Suiban-sha (Water basin house) of Seiyou-in

[Figure 5] Yusho-in Nitenmon Gate

[Figure 6] The Approach to Shiba, from The Far East, edited by John Reddie Black, reprinted by Yushodo Press, 1999

period. This sounds a bit surprising for the editor because the area around Zojo-ji Temple is now a very busy part of Tokyo with lots of office buildings.

When comparing the current city map and the old map of Zojo-ji's precincts, the affiliated temples from the Edo period remain in the same place.

[Figure 1] San'enzan-shi (National Diet Library)

[Figure 2] Sangedatsu-mon Gate (Zojo-ji Temple Sangedatsu-mon Gate before it was restored on a large scale during the Showa period, cited from Restoration Report)

[Figure 3] Hiroshige Utagawa, Shiba Zojo-ji Temple from *Famous Places along Tokaido* (held by National Diet Library)

Foundation of the Zojo-ji Temple and relocation to Shiba

Regarding the Zojo-ji Temple, there is a historical document from 1819 entitled *San'enzan-shi*, which is very important for research. [Figure 1] According to *San'enzan-shi*, Zojo-ji Temple was founded in 1393, in the area from the current Hirakawa Tenjin Shrine to the New Otani Hotel. When Ieyasu Tokugawa arrived, it was established as the family temple of the Tokugawa family. Once the development of Edo castle began, the Zojo-ji Temple was relocated to Shiba. According to the configuration diagram from *San'enzan-shi*, one sees the front gate (now Dai-mon Gate), the the main gate (currently, Sangedatsu-mon Gate), and the main hall (Dai-den). The location of Shiba Maruyama Kofun (an ancient tomb), which still exists, is also recorded as 'Maruyama'.

Remains of architecture from the early Edo period

Sangedatsu-mon Gate is a must-see sight with a bracket complex composed of bracket arms and bearing blocks characteristic of the Zen style [figure 2]. As a construction from the early Edo period, this gate has miraculously remained after the WWII. Onari-mon Gate still exists and was relocated and reconstructed on the premises of the current Tokyo Prince Hotel.
The first mausoleum built in Zojo-ji Temple was that of the second *shogun* Hidetada and his wife Go (Taitoku-in mausoleum and Sugen-in mausoleum). In the Edo period, when people walked all the way from Shinagawa-juku lodgings to Nihonbashi via Tokaido, they could see the five-storied pagoda, and when turning back, they could see the main gate and main hall of the Zojo-ji Temple overlapped as a straight line. [Figure 3] It is evident that the Zojo-ji Temple was a landmark at the entrance of Edo.

Talking about landmarks, *matsubara* (pine grove) was developed during the Kan'ei era in the place of the current Hibiya Street. It functioned as an obstacle to the enemy, for fire prevention, and also as a beautiful landscape element.

Zojo-ji precincts in the mid-Edo period

As the Zojo-ji is famous for housing the tombs of Tokugawa *shoguns*, people may think every generation of *shogun* sleeps in Zojo-ji. This is not true. The Tokugawa clan who came after Hidetada was the father of the sixth *shogun*, Tsunashige Tokugawa (Seiyou-

photo: Ryo Yoshiya

What do the Old Precincts tell us?

Report on the Lecture by Michiko Isaka on the Transition of Zojo-ji Precincts

Yu Homma (Curator at Keio University Art Center)

[ABOUT THE LECTURER]

Dr Michiko Isaka
(Architect, Co-representative Director of Isaka Design Koubou Inc.)

Michiko Isaka graduated from Musashino Art University Department of Architecture (1976) and launched Isaka Design Koubou Inc. with Shigeharu Isaka (1983). She specialises in the old precincts of Zojo-ji Temple and holds a PhD in engineering from Kogakuin University (2009), while giving lectures at Musashino Art University (2008-14).

She is involved in many investigations and preservation works regarding Zojo-ji and its old affiliated temples. One of her important publications is: *The historical scenery of Zojo-ji Temple and Shiba-park — The heritage of architecture and its community area* (2013).

The 'Cultural Narrative of a City' project by Keio University Art Center organised its first lecture programme *Cultural Narrative of a City: Early Modern and Contemporary Cultural Resources of Minato City* on 18th November 2017 (for the overview of the event, see p. 85). The first lecture by Professor Masato Naito depicted the landscape of the Shiba and Mita area from the end of the Edo period to the early Meiji period by identifying notable artworks and historical resources (p. 82). This article introduces the second lecture by architect Dr Michiko Isaka titled *Transition of the Old Precincts of Zojo-ji Temple — Along with the Shiba Area*.

As professor Naito mentioned in his lecture, the Zojo-ji Temple has been a famous and well-known place known since the Edo period and forms an important part of the narrative of the Minato ward today. Here I follow the topics of the lecture of Dr Isaka and describe how the precincts of the Zojo-ji Temple changed historically. Please also refer to the Japanese text (pp. 40-43) for photographs and pictures.

Historical Layers of Tokyo and the Temples' Old Precincts

The lecture began with the explanation of the historical layers which are hidden in the current townscape.

Although times have changed, the layer from the Edo period, in other words, the lower layer, is still preserved. When visiting the towns and villages of Japan, buildings that were in the precincts of temples can be found everywhere. In the case of the Zojo-ji Temple, a collection of buildings that were priests' residences remains.

Since Tokyo was destroyed by the Great Kanto Earthquake and World War II, people tend to think that buildings from the Edo period no longer exist. But actually there are 72 buildings designated as national treasures and important cultural properties in Tokyo, of which 36 were constructed before the Edo Period, what's more, 27 of them are related to temples and shrines.

Compared to the other large-scale temples in Tokyo, such as the Kan'ei-ji Temple and Senso-ji Temple, Dr Isaka explains that the Zojo-ji Temple is a place where there are several of memories from the Edo

How Pop Music Bridges Past and Present

Frans Wachtmeister

[Figure 1] The townscape of Gotland.

[Figure 2] Pink Floyd Live at Pompeii. Photo: Jacques Boumendil (Teamrock.com http://teamrock.com/feature/2017-09-04/the-inside-story-of-pink-floyds-classic-live-at-pompeii)

[Figure 3] *Kiki's Delivery Service* Eiko Kadono and Miho Satani, *People encountering Kiki*, Fukuinkanshoten publishers, 2016.

Hayao Miyazaki, *Kiki's Delivery Service Picture Book*, VIZ Media, 2006.

[Figure 4] Film screening at the chapel of St. Nicolai, Gotland. (Film på Gotland http://filmpagotland.se/?page_id=440)

Unlike oeuvres of visual art in galleries and museums, historical architecture is part of the environment where we live, and thereby belongs to all of us, both visually and physically. Nevertheless most of us know surprisingly little about the architecture and city that surrounds us. We might run into a beautiful edifice while promenading in the town and silently acknowledge it as the so-and-so-Bridge or something something Cathedral, but usually pass by it without giving it too much of our attention. At least that applies to me, and the great temple of Zojo-ji Temple was one of those buildings I unconcernedly went by. Obviously I hadn't failed to recognized the existence of a huge, red-painted buddhist temple in the Shiba park. But it wasn't until the guide tour arranged by Keio University Art Center that I first thought of examining the temple at closer distance, and I never imagined that generations of Tokugawa *shoguns* had their grave there. But why this initial lack of interest for such an exciting place?

Allow me to speak a bit about my own country, Sweden. It's largest island, Gotland, is located in the middle of the Baltic Sea. Gotland, famous for, amongst others, housing the film director Ingmar Bergman and being the set of the bulk of his films, was together with Lubeck a flourishing Centre for the Hanse commerce during the Middle Ages. The walled city, Visby, has kept the same medieval appearance through the ages and almost evokes a sense of time travel to the contemporary visitor. The Japanese reader may recall the maritime city in *Kiki's Delivery Service* to get a picture of the city, which is, expectedly, filled with ruins. But the inhabitants hasn't allowed the eroded monuments to be degraded into simply dusty old ruins, but has revived and embraced them as a part of their own cultural life. While one romanesque church with a destroyed roof has transformed into a dance hall, an ancient monastery has been retiled and metamorphosed into a theatre staged by Beckett and Chekhov. In this manner, the past and the present has been united, and come to have an active value for the inhabitants.

Let me give another example. In 1972, the British rock band Pink Floyd stood among the ruins of Pompeii and made a live recording in front of empty seats. This recording of the band, playing in the centre of an ancient theatre with the smoking Vesuvius menacing in the background, is legendary among Pink Floyd fans, and I believe this idea is truly interesting. Me myself, being a history of art student, would probably be able to sufficiently enjoy a silent Pompeii. But accompanied by the chords and voices of Pink Floyd, the old ruins suggest a fascinating mysticism previously undiscovered even by the most ardent scholar. Certainly the Romans didn't play the guitar, and the concept of rock would still be unheard

[Figure 5] Tokyo Tower, Roppongi Hills and Zojo-ji Temple. Photo: Watanabe Takuro (Takuro1202)

[Figure 6] Music live event "FULL CONTROL TOKYO" at Zojo-ji Temple (Keitai Watch, https://k-tai.watch.impress.co.jp/docs/news/585612.html)

[Figure 7] The National Art Center, Tokyo. Photo: Wiiii

[Figure 8] Sengaku-ji Temple. Photo: Reggaeman

of for the following two millennia, but with the echoes of Pink Floyd, the marble colonnades and the gods of the frescos mysteriously come to life again. Surely, it is an exhibit dramatically different from what we are used to, but the fresh tones of Gilmore and Waters undoubtedly throw a new light upon the ruins so that it may appeal also to an audience unfamiliar with the wonders from ancient times. What I'm trying to say is that historical buildings, displayed in a novel context, may reach a new crowd and, to borrow marketing terminology, obtain new market segments. Through Pink Floyd, the ignorant eyes are opened to the history.

When asking foreigners what they like about Tokyo, most people reply the mixture of old and new, which creates a unique cityscape. Especially Minato ward conforms to that description. Tokyo Tower and Zojo-ji Temple, Roppongi Hills and Sengaku-ji Temple, The National Art Center, Tokyo and Geihin-kan… the juxtaposition of old and new are numerous. But can we really call it a "mixture" of old and new? Isn't it rather a water and oil relation? It feels like the old and new architecture just share the same city independent from each other. As physics prevents architecture to mix, it is task of the intangible culture to emulsify these supposedly non-miscible elements. Only intangible cultural activities such as dance and music have the fluid power to invade the temples and pervade between the trees of the old gardens to finally overcome the architectural generation gap that Tokyo is suffering from.

If we think about the unification of old and new in Minato ward, many examples of the new integrating elements of the old comes to mind. Traditional gardens are installed in the newly built buildings in Roppongi, in which old arts like the tea ceremony *sado* or the flower arrangement *ikebana* are practiced and performed. On the other hand, we find few examples of the old integrating the new. I do however remember one Youtube advertisement that caught my eye some years ago. In the beginning of 2013 a user participation event was held by KDDI at the very Zojo-ji Temple. Below a fiercely blinking Tokyo Tower, also included in the arrangement, the artist Kyary Pamyu Pamyu celebrated her 20th birthday by performing seven of her songs at the illuminated temple stairs. Meanwhile, strobe lights activated by the audiences smart phones had the facade of the temple changing colour and pattern in a close to hysterical manner. Never before have a Japanese temple looked so cool. I have no idea how the promoters managed to gain access to the temple, but the arrangement was indeed spectacular.

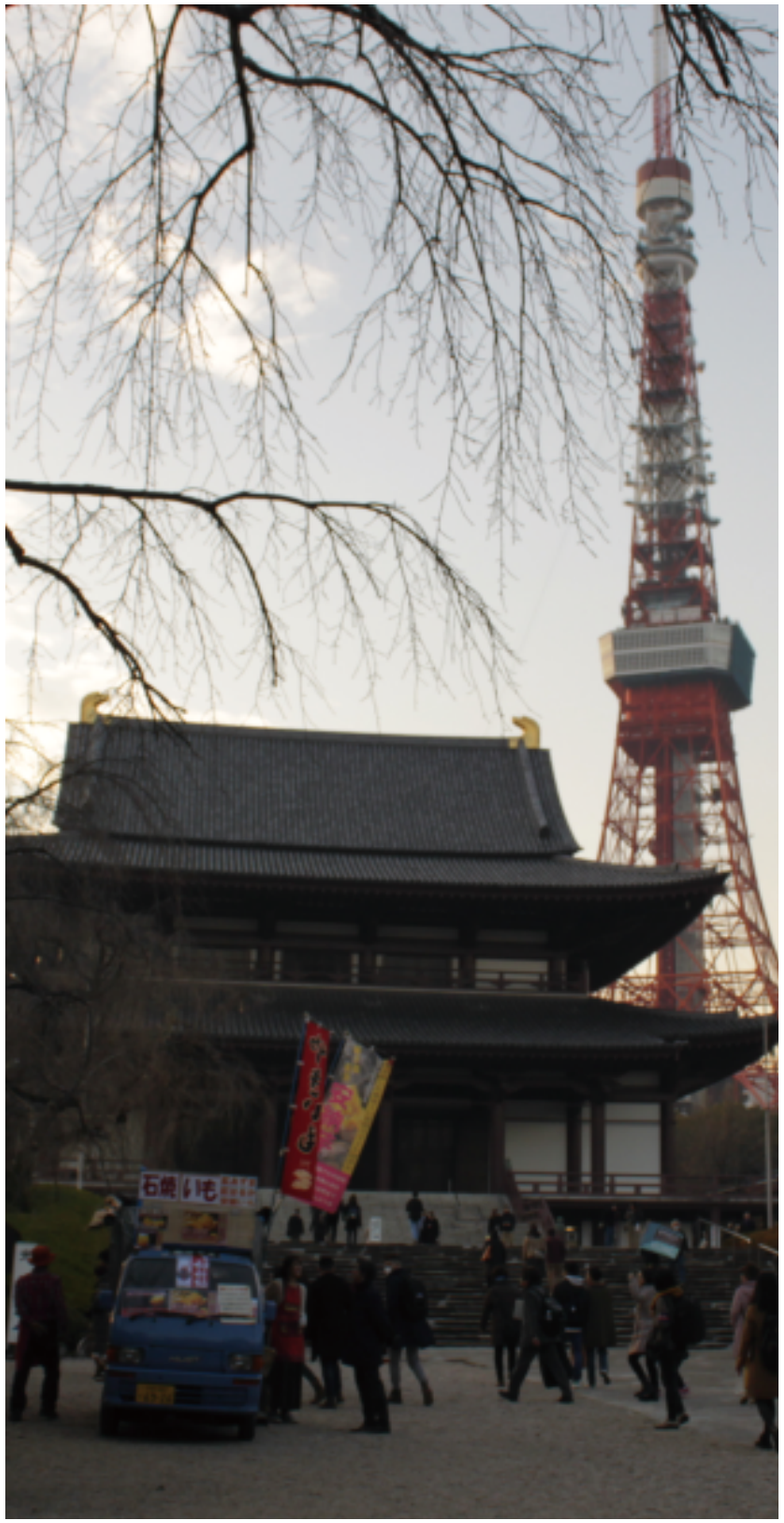
Personally I don't belong to Kyary's fan group, so I don't really qualify to picture her supporters, but I do assume, slightly biased perhaps, that they are not the most frequent students of religious architecture. Nevertheless, KDDI and Kyary succeeded in inviting thousands of these to come and enjoy the splendour of Zojo-ji Temple. This style of worship may seem blasphemic at first, but it is a crucial way of transmitting and communicating the values of Japan's cultural heritage to the next generation. Contrary to the ruins in Gotland, Zojo-ji Temple is still an active religious institution, and is not to be transformed into a modern music stage. But at the KDDI event, the temple manifested a flexibility and bravery to allow and greet modern culture on its ancient precincts, something which should set an example its colleagues as well. Only in this way can the historical architecture be valued by the next generations and perpetuate the cultural narrative it is such a large part of.

in the centre, and surrounded by the Boddhisattvas. It is a portrayal of the Holy Land of Paradise.
Furuhashi: Unlike mandara, The Arhat picture is not for educational purposes. Raigo pictures (lit. welcoming approach), Nirvana pictures and pictures of Shakyamuni descending from the mountains are used to explain theological problems to the students, but the veneration for Arhat comes from laymans. Originally, there were only 16 Arhats. Though the roots of 500 arhats is not clear, it is said they originate from the story that 500 arhats gathered for editing scriptures. It is said that Kazunobu painted them to deepen his faith in Buddhism. It is a votive picture, and the creative process itself was a sort of religious practise.
Homma: Does votive painting still exist?
Furuhashi: Sometimes there are donations of paintings on famous monks and priests and their miracles, but it is very rare.
Homma: What would you do if you were donated a picture of for example the 500 Arhats? Would you accept it, even in the painter didn't belong to your parish?
Furuhashi: If it is made to deepen the belief and understanding of Buddhism, we would probably accept it, even from someone not belonging to our parish.
Hattori: Sometimes we get donations of Buddhist altar objects and equipments.
Furuhashi: First we discuss with the donator, and then we consider if we should receive it.

Can Secular people and foreigners become Buddhist monks?

Frans: Is it necessary to be born into a priest temple in order to become a priest or monk?
Hattori: Everyone can become a Buddhist monk as long as they have a strong faith and the will.
Frans: If you don't have your own temple, what becomes of you after finishing practise?
Hattori: You can work at a large chief temple, or you can find a temple without successors or children and either get adopted or marry into the temple. 70 to 80 percent of monks search for temples via contacts and connections. Some even starts the theology studying after the marriage.
Homma: Are there any foreign Buddhist monks or priests? If someone comes to Japan with a strong belief in the Buddhistic dogmas and wants to become a monk, is it possible?
Hattori: I believe there are some, but I cannot recall any foreign priest in Jodo-sect. But I know Buddhist monks whose parents are foreigners, and they tell me about examples from other branches and religions. There is no rule in Jodo-sect that excludes foreigners.
Furuhashi: We have a parish in Hawaii and do religious mission there. But in order to be a certified priest you must come to Zojo-ji to practise.
Homma: I've seen that some temples offer lectures in scripture reading in English, but I assume that the lector is Japanese. You rarely see foreign monks.
Ozasa: There are some plans to start offering such classes here at Zojo-ji too. We also have pamphlets and Buddhism introductions printed in English by the Society for the Promotion of Buddhism. The goods is not for sale, but they share the pamphlets for free upon request. [*2] The Society also offers Zen meditation classes for foreigners too.

[*2] Digital versions of the pamphlets are published online: *A Guide to Buddhism in Japan* http://www.bdk.or.jp/read/hajimete.html
BUKKYO DENDO KYOKAI [Society for the Promotion Buddhism] http://www.bdk.or.jp/



Li: I just mentioned Wang Wei, who wrote much Buddhism influenced poetry. In my studies of Buddhistic literature and poetry, I've read some claims in the Literature of the Five Mountains that beautiful words and poetry Buddhism should be forbidden. Many poets who wrote beautifully before entering practise stopped writing after becoming priests. I wonder how you regard this kind of formalistic writing such as poetry in Buddhism.

Also, what should I do to deepen my knowledge in Buddhism, is there any special method that you recommend? Which is the best method for a true understanding of the teachings of Buddha?

Hattori: So you would like to know how we study the sutra?

Li: Yes, I'd like to know how I can understand it on a deeper level.

Hattori: Except for the study we do to get certified, we also read the writings of some Chinese high-level monk of the Jodo-sect. We also study Tan Luan and Tao Cho. Basically we start from writings by Honen, though his texts remain little now. We study the writings in chronological order.

Ozasa: I read interpretations and the teachings of the predecessors. Jumping into the study of the scripture is quite difficult, so I recommend starting with something more easily digested.

Furuhashi: We also learn from masters and instructors.

Hattori: In Jodo-sect, the curriculum is decided and it is clear which code and text we study. The poetry we study is based on religious contents.

Concerning the cultural heritages of Zojo-ji Temple

Zhang: My instructing professor Toru Ishikawa specialised in *Nara-ehon* (Hand-illuminated picture book or scroll of Japanese folklore tales, which were produced in the late 16th century until early 17th century). I also take a great interest in this. According to my professor, the scrolls held by temples usually concerns the origin and the history of the temple. How is the case of Zojo-ji Temple?

Furuhashi: Zojo-ji does not possess any picture scroll depicting the origin of the temple. It is hard to say whether there doesn't exist one originally, or it was lost during the war like many other documents is hard to say. However, no trace of anything like an scroll like that can be found in the inventory from the Meiji or Taisho period. The picture scrolls that the temple possess are a pictorial biography of Honen and the illustrated legends of the Amitabha statue, which was venerated by Ieyasu Tokugawa. The temples in the Kanto region haven't got a history as long as the temples in Kansai, so the situation looks quite different. The temple went through some difficult times in the Meiji period. As it had been the family temple of Tokugawa, its properties were reduced by the new government. It is also possible that some documents or treasures were stolen or taken away during this period. But we still hold scrolls about the labours of preceding priests, and for some reason we also keep documents about other temples too. The pictorial biography of Honen consists of two scrolls and it is designated as an important cultural property. There is another copy of Honen biography in Chion-in Temple, Kyoto.

Zhang: I understand that Zojo-ji also holds a picture of the 500 arhats painted by Kazunobu Kano. Does it have any peculiarities compared to earlier depictions of the Arhats?

Furuhashi: Kazunobu is fantastic and grotesque. His representation of details is incredible. He even captures every single ear hairs of his characters. I suppose these points make his oeuvre more ingenious compared to other Arhat paintings.

Homma: Mandara is a set of pictures made to help understand the scriptures, but the picture of the Arhats is made by a non-religious artist. How does the temple treat this type of painting?

Furuhashi: Is mandara used in Jodo-sect?

Hattori: In the Taima-dera Temple there is a *kangyou* mandara. Amida is

the priests to marry. In the Meiji era, marriage was allowed, and temples became a sort of family business perpetuated by the following generation. This question is still under some debate, however. Modern Japan is like China. Priests use smart phones even here, although some branches probably forbid it.

Matsuya: In Japan a parish system remains which registers parishioners to a certain temple. Did you have a similar system in China too?

Zhang: No, the parish system didn't exist in China. Buddhism is associated to mostly the Zen sect. Before practise, "one see a mountain and think the mountain". During practise, you no longer think the mountain when you see it. But when practise is finished, you return to the state of thinking the mountain when seeing it. I was told such interesting stories as a child, and that is how I came to perceive Buddhism; as exciting stories about the metamorphosis of the heart.

In Tibet there is a ceremonial pilgrimage which all must participate in once in the life. You walk towards the Jokhang temple in Lhasa while performing kowtow (kneeling so low that the head touches the ground) no matter what kind of ground you are standing on. The power of religion is truly astonishing.

Li: We simply say 'China', but the religions varies widely between the Han Chinese majority and the religious minorities. In Tibet, everybody are Buddhists and the religion is integrated in daily life. Han Chinese are mostly Confucianists.

Ozasa: Is the funeral ceremony in China similar to the Japanese one?

Li: In China, bodies were traditionally buried in the ground. A suitable location for the burial is selected according to Feng Shui. Recently cremation is increasing. Cemeteries independent from Buddhism exists as well, and these are also chosen via Feng Shui. The burial tradition derives from Confusianism rather than Buddhism.

Zhang: I was very surprised when I came to Japan and saw kindergartens so close to the temple cemeteries.

Ozasa: I don't know when the tradition of raising children while getting them used to Buddhism arose. Japanese feel close to Buddhism, so there is a long tradition of Buddhistic kindergartens.

Homma: Is there perhaps some relation to *terakoya* (temple elementary schools) during the Edo period?

Hattori: There might be. I went to a Buddhistic kindergarten, and I remember that we sang Buddhistic songs and had Buddhistic festivals too.

Furuhashi: It seems like the Japanese feel little reluctance against religious education. People think buddhistic manners and etiquette usually have a positive impact on the emotional education of the child.

Matsuya: In Japan, there are both Christian schools as well as Buddhistic school, which doesn't sound particularly strange to us. How is the situation in Sweden?

Frans: I have the impression that the church is separated from the educational field. It is very common that schools uses churches for graduation ceremonies. But during these occasions, there is a law that prohibits priests from doing any religious preaching. Naturally, in the schools we have religious studies, but generally the education is secular. Also, as the acoustics in churches is usually very good, they are used for concert venues too.

Li: Basically Chinese low and middle schools are all public, so there are no schools built by temples.

Zhang: My father is an amateur Buddhist who do practice while remaining in the worldly realm, but I can't recall that he ever forced me to read the scripture. I read books and poetry about Buddhism so words was absorbed naturally into my head. The same goes for the Buddhistic vocabulary. When talking Buddhistic literature, the poetry of Wang Wei comes to mind. It is called poetic Buddhism. If Li Bai was a master poet, Du Fu was a holy poet. I listened to the stories of famous monks from an early age, even though I don't belong to a certain sect or branch. Reading poetry, I learned to rhythm and the meanings of the words and made my own connotations.

the forth and the fifth *shoguns* were entombed in Kan'ei-ji. The sixth *shogun* Ienobu, however, deplored that Hidetada should sleep alone in Zojo-ji and thus decided upon being inhumed in Zojo-ji. Since, half of the *shoguns* were buried at Zojo-ji, the other half at Kan'ei-ji. So the temples have only submitted to the shogunate requests.

Homma: So the tombs of the *shoguns* are divided between Kan'ei-ji and Zojo-ji. But doesn't Kan'ei-ji belong to the Tendai-shu sect?

Furuhashi: The *shoguns* were originally Jodo-sect. It was for political reasons that they chose Kan'ei-ji as a family temple.

Homma: I have got the impression that one usually belong to the Buddhistic sect of one's ancestors, as the family share the same tomb. But you imply that one can choose freely depending on individual preference as well?

Hattori: Originally, that is correct. After the parish system (*danka-seido*) was established in the Edo period, every house came to belong to a certain temple. Every sect thrives for Enlightenment, but the method toward it are different. For us in Jodo-sect, Enlightenment is impossible in this world due to our worldly desires, so we reborn in paradise and reach the state of nirvana through the teachings of Amida. That's *tariki*, dependence on others. But other sects, eg. Rinzai-sect and Soto-sect emphasises meditation in order to foster the buddha-nature that everybody possess. In the *tariki*, there is an awareness of one's lowliness, so Enlightenment through the own powers is denied.

Homma: If the sect differs within a family, how do you as a temple approach this family. Supposedly there would be problems with the tombs, and so on.

Furuhashi: Historically, the temples are closely related to the Japanese family system. The notion that belief is something individual and personal isn't very strong.

Zhang: Does the daily practice variate depending on sect?

Hattori: I can speak only for Jodo-sect, but for us praying is the most important activity, as the sect put much emphasis on the recital of the holy scriptures. In the ceremonies recital is the core. On the other hand, Ji-shu and Jodoshin-shu also put much importance on the scriptures, but their ideas are slightly different from ours.

Tendai-shu, which is a Nara Buddhism sect, is unique, and have for example the 1000-days-penance ritual. Like Zen-shu, emphasis is put on *jiriki*. But daily life is mostly the same, based on the spirit of the three treasures of Buddhism; Buddha, sutra, and priesthood. Easily put, it means cheerfully, righteously and friendly. The monks spend their daily life together in a righteous manner by doing cleaning and so on.

Zhang: Does Buddha mean an enlightened person? Is the practice the process of becoming enlightened?

Hattori: Yes, that is right. For us, as long as we recite the scripture, the self is reduced and we can enter paradise and become Buddhas along with Amida.

The state of Buddhist temples in Japan and China

Matsuya: Is the recital of scripture important in the Chinese branches of Buddhism as well?

Hattori: We also would like to know about the ways of Chinese Buddhism, so please tell us.

Li: My home town is Emeishan. My relatives frequently visits the temples. But for most of us, we don't do the prayers even when in the temple. The climate in Emeishan is cool even in the summers, so we sometimes muffle up in the temple for one month. Also, the Chinese don't really distinguish the sects of Buddhism, and go to the temple which is the most convenient. It is the local Buddha or deity that is worshipped.

I study Buddhistic literature and thus need to read and understand the sutra, but it is really difficult.In the Chinese temples they rarely teach the sutra, so I learn through studying the interpretations of scholars. But actually I wish to be taught directly at a temple. I have an interest in sutra copying, so if you offer any sutra-copying classes here at Zojo-ji, I'd like to know.

Hattori: We do sutra-copying on the 14th every month. The content is the scripture of Jodo-sect, with religious talks by monks. [*1]

Hattori: So the situation for Chinese Buddhist temples is similar to that of Shinto shrines in Japan?

Li: In China there are four large temples, and Emeishan is one of those (The four sacred mountains of Buddhism; Wutai Shan, Emei Shan, Jiuhuá Shan and Putuó Shan), all worshipping different Bodhisattvas. Apart from these, people normally frequent the local temple.

In contemporary China, the general image of temples and Buddhist monks is unfavourable. Rumours of scandals caused by eg. the Shaolin Monastery have spread widely in our modern information society.

How is Buddhism regarded in Japan? In China, digitalisation has progressed and monks are seen using smart phones etc. How is the situation in Japan, and how is the monastic life changing?

Ozasa: Before, only aspiring monks went to the temples, as it was a place of practice. In the Edo period, the parish system was born and became a sort of family registration system too. When the temples started to bury people, they became frequented by grave visitors and hence accessible for the general public.

In the Edo period, most Buddhistic branches didn't allow

[*1] https://www.zojoji.or.jp/event/ev_shakyoue.html

For example I take care of the visitors, while others overlook the ceremonial elements. That's why the administration is divided into several divisions.

Homma: Does everyone participate in the service before starting every morning?

Hattori: I myself have my own temple to attend, so I go to work after finishing the service there.

Homma: By the way, what time do you usually start in the morning?

Hattori: I start at 8 o'clock. Generally it is 9 o'clock. Most of us do the service at their own temples before coming here. The service and its form is very different depending on which sect one belongs to. In Jodo-sect, training the recital of the scripture is most significant. The recital has some formal and technical points to it, which we have to exercise thoroughly. Then one can polish it up through real practise.

Homma: Do you do theoretical research of the sutras as well?

Hattori: We study the basic knowledge about the sutras when taking the monk certification. Afterwards, there are some who chose to deepen their knowledge further at the university.

About the sects of Buddhism

Frans: My knowledge about Buddhism is close to non-existent, so please forgive me for asking such a basic question, but I wonder what differs Jodo-sect from other Buddhistic sects.

Ozasa: As many elements are different according to the sects, it is hard to give a strict answer to your question, but one of the main differences is the concepts of *jiriki* (reliance of the self) and *tariki* (reliance of others). The pursuit of Enlightenment with the self's powers is called *jiriki*, while nirvana through the guidance of Amida is called *tariki*. We in Jodo-sect belong to the second group, and we practice to become buddhas with the help from Amida.

The idea of the practice and time of enlightenment also depends on sect. To some, man can be enlightened already in this world, while others believe that one depend on the strength of Buddha until the next world where one is solved from earthly desires. Although the opinions varies, it is all the same Buddhism. Small differences in the detailed are endless, so basically one defer to the sect that suits one's own belief. Also, many chose to enter the sect which one's ancestors belonged to.

Frans: At what point in history did the sects emerge?

Ozasa: I believe that the Kamakura Buddhism was a decisive spark. Jodo-sect which was founded by Honen, saw its birth too at that point. Other sects also appeared, even if some of them has become extinct since.

Why did the Tokugawa clan have two family temples?

Zhang: The Zojo-ji in Shiba and the Kan'ei-ji Temple in Ueno are both known as the Tokugawa clan's family temple. It seems like some generations alternate between the two temples. Why is this?

Furuhashi: First of all, when Ieyasu Tokugawa moved to Edo in 1590, Zojo-ji Temple already existed, while Kan'ei-ji still wasn't built. As Ieyasu, who was the first Edo *shogun*, belonged to the Jodo-sect, he chose Zojo-ji as the family temple, for it was one of the largest Jodo-sect temples in Edo. Kan'ei-ji Temple was constructed by the priest Tenkai (in 1625) a few years before the decease of the second Edo *shogun* Hidetada, and became the clan's prayer temple. While a family temple is where the tomb or grave is located, a prayer temple is dedicated to prayers. Tenkai associated closely with the Tokugawa clan, so the forth and the fifth *shoguns* were buried in Kan'ei-ji. In this way, Kan'ei-ji too became a family temple, and there were two family temples for the Tokugawa clan. When a *shogun* is buried, the location is decided by his will, and the temples can nothing but adhere to this. But by the time of the forth *shogun* Ietsuna, Zojo-ji wrote a letter (which still remains) regretting that generation after generation of *shoguns* were buried in Kan'ei-ji. Nevertheless,

Interview with Monks!

Exchange Students Meet Zojo-ji Temple

ARTEFACT Editorial

[PARTICIPANTS]

Zojo-ji Temple

Takeki Ozasa (Visitors division)

Koki Hattori (Memorial service division)

Kanae Furuhashi (Publication division)

Keio University Students

Li Xiaoyan (Graduate School of Letters, Major in Japanese Literature Doctor's Course)

Zhang Difei (Graduate School of Letters, Major in Japanese Literature Master's Course)

Frans Wachtmeister (Faculty of Letters, Major in Aesthetics and Science of Arts)

[AUDITORS]

Homma, Matsuya (Curator at Keio University Art Center)

Three exchange students, Chinese Li and Zhang and Frans from Sweden, gathered at Zojo-ji T emple to interview the monks about the history and cultural heritages of the temple, and the everyday life of a modern Buddhist monk.

[EDITOR]

Fumi Matsuya (Keio University Art Center)

[TRANSLATOR]

Frans Wachtmeister

Zhang: My name is Zhang Difei. I'm from Shanghai and came to Japan in 2014 to study Japanese literature. Currently I'm in the second year of my master's degree in the Department of Japanese Literature. I study a set of Confucian moral codes named Nijyushiko(*The Twenty-four Paragons of Filial Piety*). Thank you for receiving me today.

Li: Pleased to meet you. My name is Li Xiaoyan. I'm in the first year of my doctor's degree at Department of Japanese Literature at Keio University. My field is that of Chinese literature from the Heian and Kamakura period. Right now I'm engaged in the study of Yoshishige no Yasutane and his Buddhistic writings, as well as Buddhistic literature and poetry concerning Jodo-sect ("The Pure Land School"). I'm happy to be given this opportunity to speak with you.

Frans: My name is Frans and I'm from Sweden. I'm in my last year at my bachelor's degree. The subject of my thesis was Japanese modern sculpture.

Ozasa: My name is Ozasa and I work at the visitors division of Zojo-ji Temple. My job is to assist and support the worshippers who comes to the temple.

Hattori: I'm called Hattori Kôki. I'm at the memorial service division of the temple. I work with the ceremonies performed here and handle the correspondence with the parishioners.

Furuhashi: Pleased to meet you. My name is Kanae Furuhashi. I work at the publication division, where we create and edit the temple's publications for the parishioners. I am also concerned with the management of the cultural heritages held at the temple.

How does life and work at Zojo-ji Temple look like?

Ozasa: Let me start with the history of the temple. Originally Zojo-ji wasn't located here in Shiba Daimon, but was initially opened in a place then called Toshimagun, near the Imperial Palace. When Ieyasu Tokugawa moved to Edo, he made this temple his family temple and donated a large land area at Shiba Daimon. Although the precincts has decreased severely throughout the years, Zojo-ji stands until this day here in Shiba Daimon.

As for our everyday life, Zojo-ji is first of all a teaching *dojo*. This is where aspiring students receives the final education to become Buddhist monks. Basically, they train and turn into qualified monks here. Zojo-ji is a so called Daihonzan, one of the largest Jodo-sect temples which are spread across Japan. The biggest one is Chion-in Temple in Kyoto, which is the chief temple. Also Chion-in has a training establishment where you can become a certified monk. For ages we've said "Chion-in of the West", "Zojo-ji of the East". Here at Zojo-ji we also host stay-in monk trainees.

Normally we perform the buddhist religious service three times a day; at six in the morning, at eleven thirty, and in the evening. Our lives here are very diverse.

After taking in Zojo-ji, I was left with the impression that aerial bombing had opened up gaping holes where structures from the Edo period and before had once stood, and these holes were then reclaimed according to a relentless Capitalistic logic. The structures we had seen so far on the tour were different. They existed and continue to exist in the context of the Meiji era and the period of rapid economic growth after the Second World War, broadly speaking, the age of modernism.

Landscapes interweaving past and future worlds

In one sense, structures dating back to before the Edo period and onwards, are obliterated by war and natural disaster, then "restored", surviving in the form of theme parks. In another sense, the cityscape is continuously updated through a persistent desire for "the new", and a modernistic rationalism that has repeatedly written and rewritten our world since the Meiji era — in Minato-ku we see this duality condensed and coalesced.

I feel that this tour has given me some hints on how to put into words the incongruous nature of Minato-ku, the place I grew up in, the place I think of as neither luxurious or humble. I feel I have rediscovered Minato-ku's landscapes, and the modern context they are embedded in.

Just before I started work on this essay, there was a special feature in the magazine "Tokyo Calendar" on the "Mastery of Minato-ku". I recognized in this a representation of Minato-ku as a place trying to fool itself out of its own sense of anxiety, using consumerism and ostentatious flamboyant branding. This was a representation, or rather an impression of "Minuato-ku", that exists in the common imagination. But this branded "Minato-ku" can also be traced back to a shared background with the Minato-ku I am familiar with. What I gained most from this tour was actually getting to see this common history in the shape of Minato-ku's architecture.

work to a Japanese aesthetic. The result was described by our guide as an "inevitable blending of the East and West". But the building's appearance made me think of that burst of imagination in the early days of the internet, the signs of a decontextualized interpretation were everywhere, multilayered and chained together.

For example, oblong windows are a Japanese tradition, but because the Western practice of sliding windows up and down to open and close them has been forcibly applied here, an odd mismatch occurs. Even though the building's form is Western, it has Namako style walls (white grid patterns on black slate, a design dating from the Edo period) and a Japanese tiled roof, so the Western look is never fully accomplished, and a feeling of dissonance hangs over it.

Something similar occurs in relation to the interior arches running along the ceiling. Japanese wooden buildings have always been relatively lightweight, so there has never been a need for this extra support. But since arches were a necessary symbol of Western architecture, the Japanese carpenters at the time deliberately added them, finishing them off with plaster. Although at first they seem like an imitation based on a lack of understanding, instead what we see is a unique Japanese aesthetic emerging from an attempt to copy Western styles with limited resources and technology. We can see the frantic ingenuity of the craftsmen, and their impatience to catch up with the architecture of the West, which was regarded as "something new", rather than the product of individual creativity or ego. As a result, we can see this reflected in the building's design, and it's strange how viewing it even now, through modern eyes, the freshness is still there.

The rupture between ancient and modern — Zojo-ji Temple

We now headed for Zojo-ji Temple, stopping on the way at the Tsunamachi Mitsui Club building, and the Shiba Tōshō-gū shrine. I was excited as this would be my first time inside the grounds of Zojo-ji, but when we arrived, the scene was more like that of a theme park than the site of a historic building. It was the first time that day I felt I'd encountered "Minato-ku" as it exists in the imagination of most people.

A case in point were the high prices (considering how small the portions were) of the roasted sweet potato on sale within the temple precinct, and the women selling them, all young, tall, and slender. There was even the surrounding view; on the other side of the temple could be seen a large shopping center, part of the Shinagawa Prince Hotel group. And once you had taken this in, even the "Temple Office" sign placed in front of a rest area seemed to take on a contemporary and kitsch design. I began to feel the crowds of people were simply lost visitors to an amusement park, led by mysterious guides in the form of temple priests, though this was just an illusion.

Despite all this, when I regarded the temple buildings individually, there was something deeply interesting about them. The great two storied main gate contained tremendous power, as you'd expect from a structure that had survived the air raids of the Second World War, and it suddenly made me think of the captivating panoramas that are being lost in those countries where the architecture does not last for long.

But looking around at the scenery as a whole, rather than there being a collaboration between the historical buildings and surrounding commercial centers, it seemed more like they had been thrown together, without any particular purpose.

people gave when I told them I lived in Minato-ku, compared to my own impressions on the area. Forever travelling between the neighborhoods of Shibuya, Hiroo, and Mita, Minato-ku never seemed an ostentatious kind of place. In fact I thought of it as rather unsophisticated, unlike Shibuya, which is such an iconic part of Tokyo. Hiroo was my nearest station, and although certainly there were many Westerners living in the area, the main shopping street was perfectly ordinary, and there were few restaurants around. If you took a closer look at the garish spectacle of students from the international school taking up two or three floors in Starbucks, loudly chatting away in a mixture of Japanese and English, you'd see they were actually no different from regular schoolkids hanging out at a food court in a suburban mall. Even the now famously trendy Azabu-Jūban was just a place I used to go with classmates on my bicycle to buy computer games, or drop by with my parents to pick up some Taiyaki (fish-shaped sweet bean cakes). It was always a charming district, but never felt "high-class".

However, at some point, the imaginative power of "Minato-ku" took hold (perhaps around the time Roppongi Hills was built), and now it is a place I would not think of to visit. Maybe this is why the scenery around Hijirizaka somehow filled me with nostalgia.

The business of architecture

From the top of the Hijirizaka slope we can see the Embassy of the State of Kuwait (designed by Kenzō Tange). A simple building, but with a stylish feel; it apparently will soon be torn down, and I can't help wonder what will take its place. At first glance it gives the impression of being an impractical place to work, but on further investigation, it seems the upper floors take in the ambassador's official residence, while the lower floors are used as offices, so there is a clear separation of the building's functions.

I get a mysterious feeling when I look at this type of architecture. What kind of motivation and incentive drove the person who, back in the 1970s, approached Kenzō Tange to design this structure? What was behind their thought process? I'm no expert in the architecture and cityscape of modern Tokyo, so perhaps there was a different set of dynamics at play, but if I was in their position — even while I think this work is an extraordinary achievement — I wonder if I would have taken such a risk.

How did they battle against the arguments of "impracticality" and "high maintenance costs", negative feedback justifying itself on the grounds of efficiency and rationality? Perhaps the driving force was to take a pride in technique for its own sake, or maybe because an envious gaze was being cast towards Western high culture.

A Chimera of East and West — the Public Speaking Hall in Keio University's Mita Campus

We returned to the university grounds to take in the next building on our tour, the Mita Public Speaking Hall. I had viewed this building's exterior many times, but had not once entered inside, and had never felt compelled to do so. However when I learned more of its history, I became fascinated. At the time it was constructed, in 1875, the concept of an "architect" hadn't existed in Japan, and it seems it was built by master carpenters diligently imitating the work of foreign architects found in Nagasaki and Yokohama. Although these craftsmen wanted to build something in the Western style, technically they could only

photo: Ryo Yoshiya

Born and Raised in Minato-ku

A Hometown Architectural Tour

Keiichi Toyama

Minato-ku the place has now become inseparable from "Minato-ku" the dazzling image. But for me, someone who lived in this central Tokyo ward for almost twenty years, it's simply the town I grew up in. I hoped by taking part in a "Tour of the famous architecture of Keio University and Minato-ku's Mita district", that I'd get a chance to see my hometown afresh, from an objective and historical perspective. Maybe this would start me on a journey to grasp why I'd felt a sense of incongruity about the place when I was growing up, and it was with this in mind, that I headed for the tour's meeting place, in Keio University's Mita Campus, my old college.

The ordinariness of Minato-ku — Hijirizaka (Hijiri slope)

After only a brief explanation we immediately set off for Hijirizaka, behind the Keio University Art Center. On the way we pass the Friends School (Furendo Gakuen), a junior and senior high school for girls. Next to the main school block (the work of architect Hiroshi Oe, a contemporary of Kenzō Tange) is a large building housing a religious institution, about the same height as the schoolhouse. The two structures standing together give the impression of one organization. All around are residential or perhaps office buildings, it's difficult to tell, sitting side by side on this sloping land, steeped in history. Mixed in with them, this religious institute whose outside appearance gives little clue to its identity, it all seems so very much like Minato-ku to me.

Although this was an architectural tour, it was interesting how the "landscape", including this slope, Hijirizaka, wrapped itself around the buildings. Walking these streets, I got the feeling this notion was a key point to consider during the tour.

Perhaps another reason why I got a feeling of "Minato-ku-ness" about Hijirizaka, was the presence of "Shuwa residence" blocks (these were a series of distinctive white stucco apartments built by the Shuwa corporation from the mid 1960s), which for me are a symbol of the area. This was not the Minato-ku of Roppongi, Akasaka, and Shinbashi, with all their reputed gaudy brilliance. Here was a cityscape, neither luxurious or humble, without colour or cohesion, that I had known since I was a child.

Ever since I was small, I had always been surprised by the response

Introduction of Research Neighbours

ARTEFACT Editorial

[INTERVIEWEE]
Kokugakuin University Research & Development Promotive Center
Shibuya-gaku Research Group
Junichi Akino (Kokugakuin University Visiting Researcher)
Mai Takahisa (Kokugakuin University Visiting Researcher)

[EDITOR]
Fumi Matsuya (Keio University Art Center)

The first case of the "Introduction of Research Neighbours", a project which introduces groups and research institutes who have been engaging in activities closely connected to the Cultural Narrative of a City, is the interview of the Kokugakuin University Research & Development Promotive Center Shibuya-gaku (study) Group.

The researchers, Matsuya and Homma, who are in charge of this project, interviewed Mr. Akino and Ms. Takahisa from the Shibuya-gaku Research Group.

The Shibuya-gaku Research Group is like an academic senior to us, and it was founded in 2002 as part of the 120th anniversary of the Kokugakuin University foundation.

It has worked in close cooperation with the Shibuya ward as well as the Tokyu Corporation, and it commenced its enthusiastic research activities with a project focused on the work of folklorist, Mr. Tadahiro Kuraishi (Kokugakuin University Honorary Professor) and historian, Mr. Kazuo Ueyama (Kokugakuin University Honorary Professor). This led to a series of comprehensive lectures: "Shibuya-gaku", presented not only for students but also for local people.

Nowadays, there are many people who have heard of the name of the "Shibuya-gaku" but, initially, they had difficulties promoting themselves.

In 2010, they relaunched their activities, and the Shibuya-gaku Research Group conducted their study in cooperation with the local communities and, as a result, they started editing various publications such as the Shibuya-gaku booklet and the Shibuya-gaku series.

Shibuya has a strong image of SHIBUYA 109 or Japanese "Gal" as a source of youth culture, but among the bustling streets, the traditional sites such as travellers' guardian deity and shrines have remained. Even if the veneer is removed, the older layers are still retained.

Strolling around the town, an activity which has been undertaken by the Shibuya-gaku Research Group called "Reaching back into Shibuya's memory", is an event involving walking around the Center Gai Street, taking in the best-known modern places, such as Hachiko (a statue of a faithful dog), and enjoying the intersection between its modern outlook and the history of the chaotic town of Shibuya, with its vintage temples and shrines, such as the Konno Hachimangu Shrine, while listening to explanations from the professionals: the religious sociologist, Mr. Akino and the folklorist, Ms. Takahisa.

A popular walk, especially with Shibuya residents, is the one along

the Shibuya River which familiarises participants with the song: "Haru no Ogawa" (a brook in spring).

However, the tour held in the bustling area of Shibuya was not so easy; for example, some people couldn't hear the voice through the speaker.

Kokugakuin University is actively working with the local communities. For instance, Kokugakuin University Museum had close cooperation with Shibuya Folk and Literary Shirane Memorial Museum, making a plan for a collaborative exhibition.

The university has improved its standing because it is based in the "Shibuya" area, and both the university and the local communities have exploited and connected with the new initiative.

"Shibuya-gaku"
Shibuya-gaku not only targets at interdisciplinary research based on history, folklore, geography, religion and economy, focusing on "Shibuya" through the theme of "Revealing the Many Faces of Shibuya", but also, aims at bringing about collaboration with the regional community, and providing perspective for the contribution to the community.

Recommended Publications
- Shibuya-gaku booklet 2, *"Disclosing" the regional community from its many facets — study from the point of the comparison of regionology*, February 2011.
- Shibuya-gaku booklet 3, *Describe Shibuya*, March 2012.
- Shibuya-gaku booklet 4, *Shibuya as a node — from Edo to Tokyo*, March 2014.
- Separate volume Shibuya-gaku booklet, *The near future of the Shibuya-style*, November 2016.
- *Strolling around the town: Reaching back into Shibuya's memory*, March 2016.

7

8

9

10

11

12

photo: Piotr Konieczny

Tsunamachi Mitsui Club (designed by Josiah Conder) [Figure 10]
Conder designed it in his later years. The characteristic of the outside appearance is the visible change. The line of the eaves has a dynamic movement and it has the characteristic of the Baroque-style. The highlights are the downstairs ceiling with the oval hollow, the visible inside of the dome, and the approach to the garden.

Shiba Tosho-gu Shrine
The family temples of the Tokugawa clan are the Zojo-ji Temple which was built first and the Kan'ei-ji Temple. The *shoguns* after the 2nd generation have been enshrined in either temples. Nikko, Kunozan, Ueno, and Shiba are called the 4 biggest Toshogu Shrines. The Shiba Toshogu Shrine was burnt during the World War II and this is the reconstructed architecture. The characteristic of a Toshogu Shrine is the gorgeous decoration after all.

The gate of Taitoku-in Mausoleum [Figure 11]
The contrast of the gold leaf glitters in the evening sun and the black lacquer is beautiful. It is just the right time to pass by. It is called Yatsuashi-mon Gate (eight-pillared gate). The Kaminari-mon Gate has the same structure. Yatsuashimon usually has a gabled roof, but this has a hipped roof. At the front, there is a decoration which is called Chidorihafu (a triangular shaped dormer), but this is called *Suehafu*, because the strong decorative effects has been employed.

Zojo-ji Temple
Sangedatsu-mon Gate (a gate for getting delivered from 3 earthly states of mind-greed, anger, and stupidity)

This is the most precious gate as the relic of the Zojo-ji Temple. [Figure 12]
Sanko-nikai-nijumon Gate (a two-storey gate with 3 entrances) is the largest scale gate with 6 pillars and 5 bays. The famous gate with this style is the main gate of the Daitoku-ji Temple, Kyoto.

Dai-den (a hall for ceremonies) is a building done after the World War II, but there is a part which was made in an old fashioned way on purpose — the *shibi* (decoration at the both sides of the top ridge of a roof).

The roof is *irimoya-zukuri* (hip-and-gable roof), but the slope changes at half way. It is called *shikorobuki* which is the style of a roof in the Aska-era. The Tamamushi-no-zushi (Beetle wings are used for decoration) of the Horyu-ji Temple, Nara has this type of roof.

1

photo: Wiiii

2

photo: Keio University Art Center as follows

3

4

5

6

Lecturer: Dr Isamu Yoneyama
Editor: Fumi Matsuya

Friends Girls Junior & Senior High School [Figure 1]
Hiroshi Ohe was a class-mate of Kenzo Tange who represents the modernist architecture, but also adding the classical elements is characteristic of Ohe.

Embassy of the State of Kuwait in Tokyo [Figure 2]
The design is cutting edge. It looks like a three-dimensional maze. You can't see the floor level from outside! Kenzo Tange used to envisage the creation of a three-dimensional city plan.

Kiyonori Kikutake has been envisaging a similar three-dimensional city plan. Kikutake is a person who designed the Toukouen, a hotel in Yonago, Tottori. He was Tange's rival. Tange was so conscious about Toukouen that he must have designed the Embassy of the State of Kuwait in Tokyo with a similar idea. His consciousness towards the creation of a three-dimensional city has borne fruit in a single architecture!

In the Mita Campus [Figure 3]
The Mita Campus of the Keio University is a precious campus which has an architecture from the Meiji-era.

Public Speaking Hall (Mita Enzetsu-kan) [Figure 4]
The mimicked Western-style architecture which remain in Tokyo are the former Tokyo Medical School Main Building and Public Speaking Hall. So they are extremely precious.

The oblong windows appear in a western style, while the tiled-roof and the wall covered with square tiles jointed with raised plaster are Japanese style. It is a compromise of Japanese and Western styles. Also, it's an early example of the open ceiling space in Japanese architecture.

Ex Noguchi Room (designed by Yoshiro Taniguchi / interior designed by Isamu Noguchi) [Figure 5]
Yoshiro Taniguchi is a skilful architect who sympathises with the current trend of modernism and adds the sentiment of Japanese architecture at the same time. The oblong double-hung upstairs windows look old fashioned. On the contrary, the glass windows downstairs are wide open.

The ideal materials of modernism are concrete, glass and iron. As Japan was a defeated nation in the World War II, concrete could not be used easily. The undressed concrete pillars are impressive. [Figure 6] Concrete is made, by pouring the liquid state of concrete into the mold, so those lines of the pillars are the impressions of the mold.

The spiral staircase looks handsome! [Figure 7] It has an interesting feature which makes me think how it is supported, hiding the beams.

About the architecture of the South Building, the method of 21st century which connect the glass wall with sealing, and supporting glass by another glass.

The scratch tiles were used in the Imperial Hotel by Frank Lloyd Wright and they are the unique Japanese materials, but after the World War II, they have become out of use. The tiles of the South Building are maybe the homage towards the tiles which have been used for Jukukan-kyoku (Keio Corporate Administration). [Figure 8]

Old Library (designed by Sone Chujo Architectural Office) [Figure 9]
Splendid! The Gothic style was often used for school architecture, but this is the masterpiece. Emphasizing the perpendicular like tapering roof is characteristic. The pointed arch is also characteristic. The Jukukan-kyoku on the other side has a little pointed arch, hasn't it? If this former library is preserved properly, it could become a national treasure!?

The Renowned Architectures in Keio University and Mita Area

ARTEFACT Editorial

Date/Time: (Saturday) 16th December
13:15 ~ 16:15

Lecturer: Dr Isamu Yoneyama (Edo-Tokyo Museum)

Participants: 39 people (Students, international students, and academic staff of Keio University and residents of Minato Ward)

Tour Itinerary:
1. Friends Girls Junior & Senior High School (designed by Hiroshi Ohe)
2. Embassy of the State of Kuwait in Tokyo (designed by Kenzo Tange)
3. In the Mita Campus
   - Public Speaking Hall (Mita Enzetsu-kan)
   - Ex Noguchi Room (designed by Yoshiro Taniguchi / interior designed by Isamu Noguchi)
- Old Library (designed by Sone Chujo Architectural Office)
4. Tsunamachi Mitsui Club (designed by Josiah Conder)
5. Shiba Toshogu Shrine
6. The gate of Taitoku-in Mausoleum
7. Zojo-ji Temple
   - Sangedatsu-mon / Dai-den / Mausoleum

The nakayashiki was located in Mita 1-chome, and the shimoyashiki was in Fukagawa, Meguro, and Tamachi. I was born in the nakayashiki. This is located exactly on the upland to the north of Keio University. Although it has now been divided into many sections, they all used to be part of the nakayashiki. Kasuga-jinja Shrine, located below the Keio, exists even to this day. This is the shrine where my guardian deity is worshiped, for which reason, I have often visited this shrine. During this period, the boundary between Shiba Park and Mt. Atago was referred to as Kiridoshi Pass. Here, shows and food stalls were set up during the afternoons, with streetwalkers showing up throughout the area in the evening. The servants from the residence of daimyo would also come out to enjoy themselves….It was quite busy during the early evenings but when the stalls were packed away, it became completely desolate."

He is depicting the actual scene in an extremely frank manner.

"*During this time, tsuji-giri (killing on the streets with a sword) was a common occurrence.*"

It is quite unbelievable now, but there is a record that tsuji-giri occurred in the Hiroo area.

"*All of what is now Shiba Park was the Shiba Zojo-ji Temple at the time. The priests of Shiba Zojo-ji Temple were boastful because they were the family temple of the shogunate government.*"

Meisetsu is a feudal retainer of the Matsuyama Domain, and the family temples of the shogunate government wielded great authority. People from Zojo-ji Temple are all well-mannered now!

"*To go from the nakayashiki where I stayed to the kamiyashiki in Atago-shita, I had to go around this Kiridoshi Pass from Iikura street, but going from Akabane through the Zojo-ji Temple makes the route a lot shorter. Because our lord was staying in the kamiyashiki and the young lord was in the nakayashiki, there were frequent comings and goings between the two places by the feudal retainers. Because they went through the Zojo-ji Temple area, they were also allowed to go through here. However, the people at the temple would become meddlesome if we brought lunch with us.*"

He is saying that there were difficulties because fish and meat were not allowed in temples.

"*I went through the Zojo-ji Temple area at times, taken by my family. I always felt fearful. When you enter the site from Akabane, there is an Enma-do (temple hall dedicated to a king of hell) on the left. That was scary…. Next to it, there was Kasamori Inari Shrine, with dragons drawn in ink on the ceiling. We always visited the Toshogu Shrine on festival days. The front gate at the time was positioned toward Taitoku-in Mausoleum, which had a fence outside and stone pavement inside. Because we were not allowed to wear shoes from the inside to this front gate, we all entered barefoot.*"

Although we entered the site in our shoes without any problem, entering barefoot was typical of the Edo period.

"*During temple festivals close to the residence in which I lived, the Suitengu Shrine of the Arima residence was bustling and gathered a crowd that was said to be the biggest in Edo at the time. Although it took place on the fifth of the month, it was difficult for children or women not accompanied by an adult male to enter the gate of Suitengu ….*"

[REFERENCES]

[Figure 1] Topographic map of Edo in the late 16th Century.

[Figure 2] *Bushu Toshima Goori Edonosho-zu*, in Kan'ei period.

[Figure 3] *Rakuchu Rakugai-zu Byobu* (Screen depicting scenes in and around Kyoto), around 1525, National Museum of Japanese History (Machida Family version).

[Figure 4] *Edo Meisho-zu Byobu* (Screen depicting famous places in Edo), Idemitsu Museum of Art.

[Figure 5] Hiroshige, Showers at Nihonbashi, from *Famous Places of Edo*.

[Figure 6] Hiroshige, The View from Mt. Atago, from *Famous Places in Edo*.

[Figure 7] Hiroshige, Zojo-ji Temple and Akabane, from *One Hundred Famous Views of Edo*.

[Figure 8] Hasui Kawase, *Shiba Zojo-ji Temple*, 1925

[Figure 9] Hiroshige, Autumn Moon in Tamachi, from *Eight Views of Famous Places in Edo (Shiba)*.

[Figure 10] Hiroshige, Moonlit Night in Takanawa, from *Famous Places of Edo*.

[ABOUT THE AUTHOR]

Masato Naito holds an M.A. in philosophy and a Ph.D. in art from Keio University, where he currently serves dual posts as a professor in the Faculty of Letters and director of the Art Center. He was curator of the Idemitsu Museum of Arts and held part-time teaching positions at Keio as well as a number of other universities and graduate schools before joining the faculty of his alma mater full-time. His research specialization is Japanese art history and publishes several books and articles on ukiyo-e; https://researchmap.jp/read0137258/

in number. However, Hiroshige left a collection of prints, known as *Toto Shiba Hakkei (Eight Views of Famous Places in Shiba)*, that depict eight notable sights exclusively from this area. [Figure 9]

Although Mt. Atago is now surrounded by high-rise buildings that completely shield the view to the ocean, it was a well-regarded spot during the Edo period, since it was the highest point in the area. Photos taken by an Italian photographer at the end of the Edo period are still in existence.

In the prints of Atago-jinja Shrine that Hiroshige drew, the artist included a rainbow, which is extremely rare. [Figure 6] Since there are very few prints representing rainbows, this image is particularly notable. There is a legend that Heikuro Magaki rode his horse up the famous stairway at Atago-jinja Shrine on orders, a scene that Yoshitoshi Tsukioka is famous for having depicted.

3.

The Shimoyashiki of the Matsudaira Family in the Matsuyama Domain: The Testimony of the poet Naito Meisetsu

Lastly, the autobiography of Meisetsu Naito, a poet of the Meiji era, will be presented here as a resource in which the scenery around Keio University is recorded.

Keio University is located on the site where the house of the Matsudaira family of the Shimabara domain was located. The site of the Italian embassy adjacent on the north side was once owned by the Matsudaira family of the Iyo-Matsuyama domain, while the grounds of the current Keio Chutobu Junior High School is located on the site of the Matsudaira family of the Aizu domain. This entire area is located on the site of the *daimyo yashiki* of the Matsudaira family.

Meisetsu Naito belonged to the Iyo-Matsuyama domain and became a poet after learning *haiku* from Shiki Masaoka. During his later years, he wrote an autobiography and described the areas around Atago-jinja Shrine, Zojo-ji Temple, and Keio University.

Now I conclude my lecture by introducing some paragraphs from Meisetsu's autobiography.

"*The residence of the daimyo at the time was located in three areas, known as kami-, naka-, and shimo- yashiki. The kamiyashiki in which my feudal lord resided was in Shiba Atago-shita.*

8

Even in modern times, artists such as Hasui Kawase have drawn it.

9

A shoreline scene as viewed from Tamachi Hachiman Shrine, which is located along the Tokaido, is depicted here.

10

As a notable spot for moon gazing during the Edo period, Takanawa is often depicted in prints with such titles as "Waiting for the 26th Night." Outside of Okido was outside of Edo. The ruins of Okido remains today. Passing Okido, people headed toward the first lodging house, Shinagawa-juku.

In the prints of Atago-jinja Shrine that Hiroshige drew, the artist included a rainbow, which is extremely rare. Since there are very few prints representing rainbows, this image is particularly notable.

5

6

7

It seems that Zojo-ji Temple could not be overlooked and because of this, Hiroshige drew it several times. It is also depicted in *Meisho Edo Hyakkei*, which was drawn just before Hiroshige had passed away.

Then comes the bridge known as Kyo-bashi, which was at the current entrance to Ginza.

"*Then, if you go past such places as Ginza-cho and Owari-cho, you will come to another small bridge. This is called Shinbashi. This marks the start of Shibaguchi, and if you go straight up, you will come to Shiba, Tamachi, Takanawa, then Shinagawa-juku…. Daimon gate is on the right-hand side. This marks the location of Shiba Zojo-ji Temple. This graceful temple is the family tomb of / Tokugawa family. It extolls a magnificent and incredible beauty, and it has three mausoleums with an expansive gate. In addition to 36 lodgings, there are many Shinto shrines and Buddhist temples, which are too numerous to be listed here.*"

It is characteristic of the Edo period to have started a new line for the section that mentions the Tokugawa family because a *shogun* cannot be placed lower than any other person (marked with / in the text). The guidebook says that everyone coming to Edo should visit these sites.

"*There is a high mountain to the west of Zojo-ji Temple. This is called Shiba-Atago. It is said that there are more than 120 stone steps going up this mountain. If you look down from the top of the mountain, you will see the splendid vista of Shibaura and the sails of the ships passing by as they catch the ample winds in the bay. The passageway below here up to Zojo-ji Temple is, in its entirety, referred to as Atago-shita. The rear of Zojo-ji Temple is known as Kiridoshi Pass. From here, if you continue walking to a place called Akabane, you will see a residence belonging to the Arima family. Visits are permitted on the fifth of every month, and many people gather here on this day.*"

This passage details the area of Akabane-Bashi, which is located to the north of the East Gate of Keio University. Suitengu Shrine is within the grounds of the *daimyo* Arima residence. The general public was allowed to visit this shrine on certain days.

"*After you come up to Shiba Fudanotsuji intersection and go to the shore, you'll reach Takanawa. Here, there are cattle-sheds from which cattle-drawn vehicles depart bound for various places. There is also a zen temple known as Sengaku-ji Temple. Here can be seen the graves of 46 loyal retainers from Ako. Visitation is always permitted. Further ahead, there is Tokai-ji Temple, where the historic remain of the zen priest Takuan was interred. Furthermore, going further ahead, there are a mountain called Yatsu-yama on the right and the sea on the left. After that, we come out to Tokaido Shinagawa-juku.*"

Many *ukiyo-e* prints depicting scenery date from the late 19th century onward, the final period in the history of *ukiyo-e*. Artists such as Hokusai Katsushika and Hiroshige Utagawa left drawings of Edo vistas that show notable sights.

Compared to those that depict the bustling towns where people gathered, the *ukiyo-e* works that depicted this area are relatively few

peacetime. However, since this *byobu* depicts the scenery of the Kan'ei Era, one can see a splendid castle tower as well as golden *shachihoko* (mythical marine creature), which are currently regarded as being designated solely to Nagoya castle. [Figure 4d]

It also depicts the grounds of Senso-ji Temple. The Sumida River that flows next to Senso-ji Temple had no bridge during this period, so access to the temple was via ferry. The temple has a three-storied pagoda, as opposed to the five-storied one that currently stands, as well as a *noh* theater that no longer exists.

Also depicted is a scene in which Edo commoners dress up and enjoy what would nowadays be called "cosplay." There are people dressed up as generals from bygone ages or wearing bowler hats and dressed as Europeans, known at the time as "Nanban-jin." In addition to the Sanja Festival depicted here, the townspeople have also dressed up in Sanno Festival, which is a part of the biggest festival in Edo, called Tenka Matsuri. [Figure 4e] Although dressing up for Halloween is extremely popular nowadays, this *byobu* shows that traditionally, dressing up in Japan was an extremely important event that allowed people to release the stress of various aspects of their daily lives.

A *kabuki*-theatre is also depicted here. The players are all beautiful boys as this was a period when female players were on the verge of becoming prohibited. The *kabuki* at this time was extremely sexy and had beautiful boys performing lascivious dances. [Figure 4f]

The image of people dancing on stage holding folding-fans resembles an *ukiyo-e*. Originally, *ukiyo-e* commonly featured a single image of a beautiful woman or actor, but its origin can be traced even further back to this time.

The area that is currently Minato ward includes the areas known as the Shibaura shore and Edo harbour. The Tokaido passed through this area, with Zojo-ji Temple serving as a major landmark. [Figure 4g] On the right-hand edge of the right-wing, this *byobu* depicts Kan'ei-ji Temple, which shows that the image people had of Edo was of a long, narrow city along the gulf, with Kan'ei-ji Temple on the northern end and Zojo-ji Temple at the southern tip. Although Kan'ei-ji Temple is a Tendai Sect temple and Zojo-ji Temple belongs to the Jodo sect, they were both family temples of the reigning *shogun*.

4d

4e

4f

4g

2.

The scenery around Mita: Famous places in Minato ward depicted in artworks

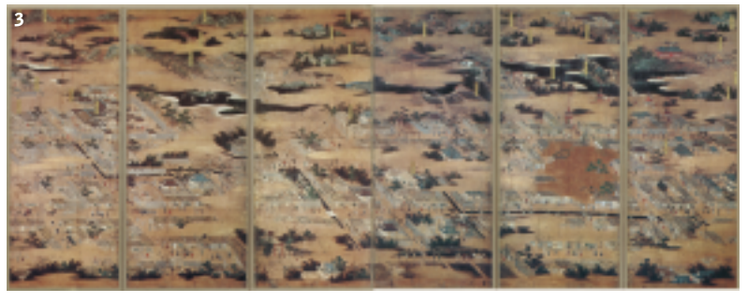
Kinsui Shotei, a popular novelist in Edo, wrote a guidebook called *Edo Meisho Hitori Annai* (A Guidebook to the Sites in Edo) in 1846, the end of the Edo Period, for visitors to Edo from the countryside. This book explains in careful detail what people who came to Edo from the countryside should include in their sightseeing tour of Edo.

In this book, Nihonbashi bridge is used as the starting point, and the author provides descriptions from each of the four cardinal directions from the bridge. [Figure 5] It clearly indicates that the main notable spots in this vicinity were Zojo-ji Temple, Sengaku-ji Temple, and Atago-jinja Shrine.

"*From south of Nihonbashi, go past 1-chome, 2-chome, 3-chome, and 4-chome, then arrive at Nakabashi.*"

Nakabashi was the bridge in Tokaido, which was next to Nihonbashi and around the current Tokyo station area. By the end of the Edo period, the bridge was already gone but the name remained.

"*There is a bridge in the vicinity of 2-chome. This is called kyo-bashi.*"


3

4a

4b

4c

outskirts. It was made in Kyoto at the end of the Muromachi period (around the 16th century).

In contrast, the city of Edo, which at the time was little more than an emerging city, was not commonly used as the subject matter of *byobu-e*. Only a very small number of such artworks still exist today, and large-scale *byobu* depicting the entire view of Edo are particularly rare.

The *Edo Meisho-zu Byobu* (Screen depicting famous places in Edo, held in the Idemitsu Museum of Arts and designated an Important Cultural Property) is a *byobu* conveying the manners and customs of the Edo period during the Kan'ei era. [Figure 4a, 4b]

This work comprises a pair of eight-panel folding-screens and depicts various sights such as the Sumida River, Senso-ji Temple, and Kanda Myojin Shrine. It also depicts Nihonbashi bridge, Edo castle, Ginza area, a bay and finally Zojo-ji Temple.

A *daimyo yashiki* with an extremely luxurious gate is shown in this *byobu-e*. It resembles the gate at Nikko Tosho-gu Shrine, known as *Onari-mon* (a gate used only by important persons). [Figure 4c] This is a special type of gate that each *daimyo* family made more luxurious than their neighbours, in the hope of enticing visits from *shoguns*. However, such gates only existed for half a century after the start of the Edo period due to the famous great fire of 1657 (the Great Meireki Fire), which reduced the city of Edo to ashes.

Looking further into this *byobu* reveals that some sections are quite different from the commonly-held image of Edo that people have today. For example, Edo castle has a castle-tower, which was burnt down several times until it was ultimately decided that a tower was not necessary during

However, Minato ward is not included in this map and this resource shows us that when contemporary people pictured "Edo," they considered Edo castle and the current Marunouchi area to be the central regions of the city.

Artworks depicting the old Edo period are extremely rare. One example of a picture that depicts the city of the time is a *byobu-e* (picture drawn on a folding screen) known as *Rakuchu Rakugai-zu* (scenes in and around Kyoto). [Figure 3] This picture shows a panoramic view of both the city of Kyoto and its

Looking further into this byobu reveals that some sections are quite different from the commonly-held image of Edo that people have today.

photo: Keiichi Toyama

The Keio University Area during the Late Edo and Early Meiji Eras

From Zojo-ji Temple and Atago-jinja Shrine to the Takanawa and Mita Neighbourhoods

Masato Naito (Professor of Keio University Faculty of Letters
Director of Keio University Art Center)

1

2

1.

Old Edo in illustrations: The Edo Map and the *Edo Meisho-zu Byobu*

What did Edo look like originally? Maps from the middle ages depict the Sumida and Koto wards as islands. [Figure 1] The origin of the word *Edo* was "door" (entrance) to an inlet. It is known that in the past there was an inlet known as Hibiya Inlet that continued a good distance inland in the direction of Edo castle.

Originally, prior to the middle ages, Edo was the hub of roadways that extended to the north-east, and served as a base for the distribution of goods. When Ieyasu Tokugawa arrived there in 1590, he began land reclamation projects to deal with the rapid urbanization. Then, in 1603 when the Tokugawa *bakufu* (shogunate) was established and consecutive *daimyo yashiki* (feudal lords' residences) were built, there was an influx of immigrants from all over Japan. At the end of the Edo Period, the city's population was approximately one million, making it a world population centre that exceeded even the population of Paris at the time.

The image that most people nowadays have of Edo is likely to be that of Edo during the 19th century shogunate. For example, my focus of specialization, *ukiyo-e*, as well as *kabuki*, *rakugo*, and other examples of Edo culture to which people have access today represent the culture at the end of the Edo period. The convenient term "the Edo period" in fact encompasses 270 years, and in reality, images of the earlier, or "old," Edo period are difficult to come by.

A famous resource on the old Edo period includes an Edo map that was printed during the Kan'ei Era, the early Edo era that began from 1624. [Figure 2]

[REFERENCES]

Keio University Art Center
http://www.art-c.keio.ac.jp/en/

Zojo-ji Temple
http://www.zojoji.or.jp/en/

Sengaku-ji Temple
http://www.sengakuji.or.jp/about_sengakuji_en/

Toraya
https://global.toraya-group.co.jp/

Ajinomoto Foundation for Dietary Culture (Japanese)
https://www.syokubunka.or.jp/

NHK Museum of Broadcasting
http://www.nhk.or.jp/museum/english/

Sogetsu Foundation
http://www.sogetsu.or.jp/e/

JCRI
http://jcritokyo.org/en/

UENO Cultural Park
http://ueno-bunka.jp/en/

Cambridge University Festival of Ideas
https://www.festivalofideas.cam.ac.uk/

explanations, or 'narratives', they are easily misunderstood as rubbish, despite their importance. Therefore, we actively communicate with diverse cultural sectors which have interests in archives and invisible resources.

Currently, our team involves Zojo-ji Temple and Sengaku-ji Temple; Toraya Confectionery Archives and the Ajinomoto Foundation for Dietary Culture, who both focus on traditional and contemporary food culture; NHK Museum of Broadcasting; the Sogetsu Foundation, which manages a very important art centre focusing on experimental art in the 1950s and 1960s; and JCRI (Japan Cultural Research Institute), a non-profit with particular interests on organising gallery archives.

Future Actions

We launched this project in 2016, so the research and presentation are still ongoing. To move this project forward, we are continuing to communicate with the cultural sectors as well as the local government. As already mentioned, it is also important to research other initiatives.

There are similar activities in other areas in Tokyo. For example, 'Ueno Cultural Park' is a project driven by the national museums, art universities and research centres, in collaboration with other cultural sectors and the local government in Ueno area.

Under the 'Visiting Plans' section, they navigate through venues and sites based on particular topics. They also offer an old map of Ueno, layered with current sites and venues.

In the field of academia, various 'Festival of Ideas' would be a good example of collaboration between a university, cultural sectors and the local government. For example, Cambridge University's Festival of Ideas hosts several events, such as exhibitions, talks and performances in and around the university. This event is also a model for our project of re-combining cultural resources and research resources.

As a startup, we always look for collaborators, working on and discussing the project together. If you have any interests in our activity, please contact us!

The Activities of the Cultural Narrative of a City project in 2017 / About ARTEFACT

In 2018 the Cultural Narrative of a City project carried out the first public events with the support of FY2017 Minato Cooperation Project for Cultural Program. This project magazine, ARTEFACT records the activities of the project by edited transcriptions, reports and so on. Activity reports sometimes appear tedious to people who didn't participate in the activities. ARTEFACT is edited in a cultural magazine style, hoping that the readers of ARTEFACT learn and enjoy Cultural Narratives narrated in the project.

Cultural Narrative of a City: Meeting the Past and Present through Cultural Resources

Supported by: FY2017 Minato Cooperation Project for Cultural Program

Lecture

Cultural Narrative of a City: Early Modern and Contemporary Cultural Resources of Minato City

November 18th 2017, 14:00–16:30, Keio University Mita Campus West School Building Room 519

Participants: around 80 people

Moderator: Fumi Matsuya (Curator at Keio University Art Center)

Explanation of the project: Yu Homma (Curator at Keio University Art Center) [p. 86]

"Keio University Area during the Late Edo and Early Meiji Eras: From Zojo-ji Temple and Atago-jinja Shrine to the Takanawa and Mita Neighbourhoods" [p. 82]

Masato Naito (Professor at Keio University faculty of letters, Director of Keio University Art Center)

"Transition of the Old Grounds of Zojo-ji Temple — Along with the Shiba Area" [p. 56]

Michiko Isaka (Architect, Co-representative Director of Isaka Design Koubou Inc.)

Guided Tour

"Renowned Architectures in Keio University and Mita Area" [p. 76]

December 16th 2017, 13:15–16:15

From Keio University Mita Campus to Zojo-ji Temple

Participants: 39 people

Lecturer: Isamu Yoneyama (Researcher at Edo-Tokyo Museum)

Architecture Open Day

Keio University Mita Campus Architecture Open Day

November 15th and 18th 2017, 10:00–17:00

Keio University Mita Campus

Participants: total 939 people

side of Minato ward. But, through conversations with them, we have discovered that they are actually interested in discovering its historical panorama. This is partly because the relationship between historical and contemporary cultures is not well described and, perhaps, because the two cultural sectors do not effectively communicate with one another.

Therefore, this project seeks to re-connect the rich multi-layered cultural resources of Minato ward and re-narrate the city's cultural narrative.

Another problem we have found is the accessibility of research related to cultural resources is limited. We have many daily cultural events in the city, from exhibitions and performances to lectures. Needless to say, every cultural event, especially one such as an exhibition, is supported by research activities. These activities are available to the public in the form of books, articles or reports, but sometimes, these publications are not easily accessed. This prevents visitors from engaging in further learning.

As a university research centre, we are also trying to focus on research resources in order to make them more accessible to the public.

What Are We Doing in This Project?

The activities of the project are roughly divided into research and presentation. To start with, we research the history and culture of the city and elaborate what exactly is meant by the *Cultural Narratives* of the city. Then, we survey the cultural resources in various sectors, such as museums, universities, archives, temples, shrines and companies. Researching what similar projects do is also important. We are especially interested in the means of distributing information, online experience and open data.

The presentation part involves collaboration with several cultural sectors in the city. We organise symposiums and lectures focusing on topics such as the history of the city, cultural tourism activities of various cultural sectors and so on. Publishing this magazine, "ARTEFACT", is very important for the project. ARTEFACT is a small brochure which introduces the activities of the project with several texts and images, such as event reports, guides to resources and interviews.

We also plan to organise guided tours to connect several exhibitions through a narrative. Through these activities, we emphasise international outreach, and especially, collaboration with exchange students.

In the project activities, we take particular account of two things:

- No more 'reinventing the wheel':
  Much information already exists on the cultural resources of Minato ward, such as guides, maps and websites published by the city government, non-profits and so on. The problem is that this information is rather difficult to find. We are not looking to create 'yet another community brochure', but to connect existing information in order to build a coherent cultural narrative.
- Working with diverse cultural sectors:
  This project is not limited to an ordinary museum-going audience. We hope to make visible cultural resources outside museums, drawing on our experience with archives of art-related materials. Resources outside museums, such as those in archives or research centres, can be difficult to understand and easily overlooked. They often consist of documents, drawings or photographs which describe the creative processes of artefacts. Without relevant

Editors' discussion

H: Yu Homma
M: Fumi Matsuya

H I'm relieved that we are finally managing to publish ARTEFACT.
M At first, I couldn't share my concept of ARTEFACT with you. I wasn't sure what kind of magazine it'd be.
H So, you are now able to reveal the truth! What kind of image did you have at first, then?
M I imagined that it was going to be a sort of culture magazine.
H We first based it on various bibliographies. Oh, that sounds rather serious. I meant taking the form of a lot of mini publications issued by the local community.
M I wanted to combine a popular approach, as in local cultural magazines, and a strong academic context, which could be useful for research.
H ARTEFACT is a kind of a report on the "Cultural Narrative of a City" project; in other words, it's a project magazine, isn't it? I think the first edition is, so to speak, a prototype.
M We want people to read it for pleasure, don't we?
H True. But, whenever research institutes prepare reports, they always create the same bland impression and so they don't have many readers.
M I may sound a little old-fashioned, but I have always wanted younger people to join us and for us to take advantage of their innovative thinking. So, we involved foreign students.
H We asked for a design from a team of graduates from Keio University called Rhetorica. They inserted their original project entitled "Ask Dr. Hillman" into our publication, just like creating a "book within a book."
M I'd love as many people as possible to read it!
H Yes, so would I! It is very interesting, the project is cutting-edge. The foreign students also worked hard fulfilling our, at times, unreasonable demands, didn't they?
M We were lucky to have such excellent foreign students working with us!
H We don't have many chances to get involved with students, apart from lectures or events, unless there are projects like this one; so, it was interesting in that sense.
M I wanted to make ARTEFACT look fashionable to resonate with the new generation of young people. I also wanted it to be a very interesting experience for the students who took part, hoping they would return to their own countries with a magazine about which they could be proud.
H At first, it was planned to be only partially translated into English, but everything was translated, in the end.
M We insisted on publishing it 100% bilingual, didn't we?
H Yes, we did! But the budget was tight. And we added some articles which were not included in the first draft, didn't we? The "Introduction of Research Neighbours", for example.
M That's right.
When we started this project, I found old acquaintances had the same interests as we did. We also made many friends, forming new relationships.
H When we started the project, our explanation was rather vague and it was not easy to make people understand what we envisaged, I think.
I feel the project has become more concrete after a year of actual events, and after editing ARTEFACT.
M At first, I was a little afraid that people would not think this project significant when it finally became a reality – I mean they would feel these kinds of activities are quite commonplace and not really exciting.
Anyway, the more we did, the more we could see what we wanted to do, didn't we?
H I've already drawn up a new project for next year!
M This is my personal view, though; as I study old art history, I might have a tendency not to pay attention to modernity because I place too much value on history.
H I agree.
M However, this type of project gives me an opportunity to think about how history is connected to contemporary events.
If it becomes clearer in my mind that the modern times and the past are on the same path, a new idea about research into classical art may arise.
H I tend to confine myself to the past, too.
While I was doing this project I was wondering what connects modern times with the past. And then, while I was rewriting my texts, I came up with the idea that it would be people's viewpoints.
M By the way, the title of the magazine changed half way through production, didn't it?
At first it was "ART + FACT", right?
H Yes, it was ART + FACT [art-e-fact] in the initial plan. [+] should be pronounced [e] like in Italian.
M Does it mean to you wanted to connect Art and Fact(s)?
H Originally, the concept was to link "ART" with "FACT(s)"which are backed by academic research. Artefact actually means an artificial object, doesn't it?
M Art or cultural resources are basically artificial, meaning human-beings made them. Don't you agree?
H Oh, yes, I do. When we edited the magazine, we realised people might not work out how to pronounce [ART + FACT], so the title was changed to [ARTEFACT]. The reading is [ArteFact], not [ArtiFact] in the English pronunciation.
M Trying to retain the sense of [+].
H Yes. Has anything else challenged you in this project?
M Well, I approached my interviews without any nervousness. I had no previous connection with the interviewees, so I rang them to set the interviews in motion. It was just like in sales.
H That's true. You visited people impulsively, didn't you?
But next year, it will be easier to explain our project if you take this copy of ARTEFACT with you.
M I hope to make a strong connection with people such as the residents of Minato ward: students, people from the Minato ward office and professors from other research institutes.
What was your greatest challenge?
H Hm. What was my greatest challenge? I wonder.
The "Cultural Narrative of a City" project itself was totally new to me. It was unclear whether the plan could be realised as a project. So everything was my challenge.
M More than a year has already passed since the initial conceptual stage, hasn't it?
H It's just one year. But, we are doing it again next year!

河鍋暁斎《東海道名所風景 東海道 高縄牛ご屋》Kyosai Kawanabe, Cattle Sheds at Takanawa, from the *Scenes of Famous Places along the Tokaido*

Cultural Narrative of a City

A New Approach to the Cultural Resources in Local Area

Yu Homma (Curator at Keio University Art Center)

Keio University Art Center (KUAC) is an art research centre, museum and archive at Keio University, Tokyo. In addition to organising art-related events, such as exhibitions, conferences and performances, KUAC has engaged in the creation and management of archives focusing on Japanese contemporary art since 1998.

In 2016, we launched a new project, 'Cultural Narrative of a City', which aims at reconnecting the cultural narratives of Minato ward.

Why are we doing this project?

Keio University is one of the oldest universities in Japan and has been based in Minato ward since 1868.

In the Edo period, Minato ward was the entrance gate to the capital and there still remain important historical sites, especially along the Tokaido, which connect Kyoto and Tokyo. Many shrines and temples, as well as the premises of feudal lords, were situated in Minato ward. For example, Zojo-ji Temple, which houses the graves of many *shoguns*, and Sengaku-ji Temple, which was the site of the famous avengers' tale of the Forty-seven Ronin, *Chusin-gura*.

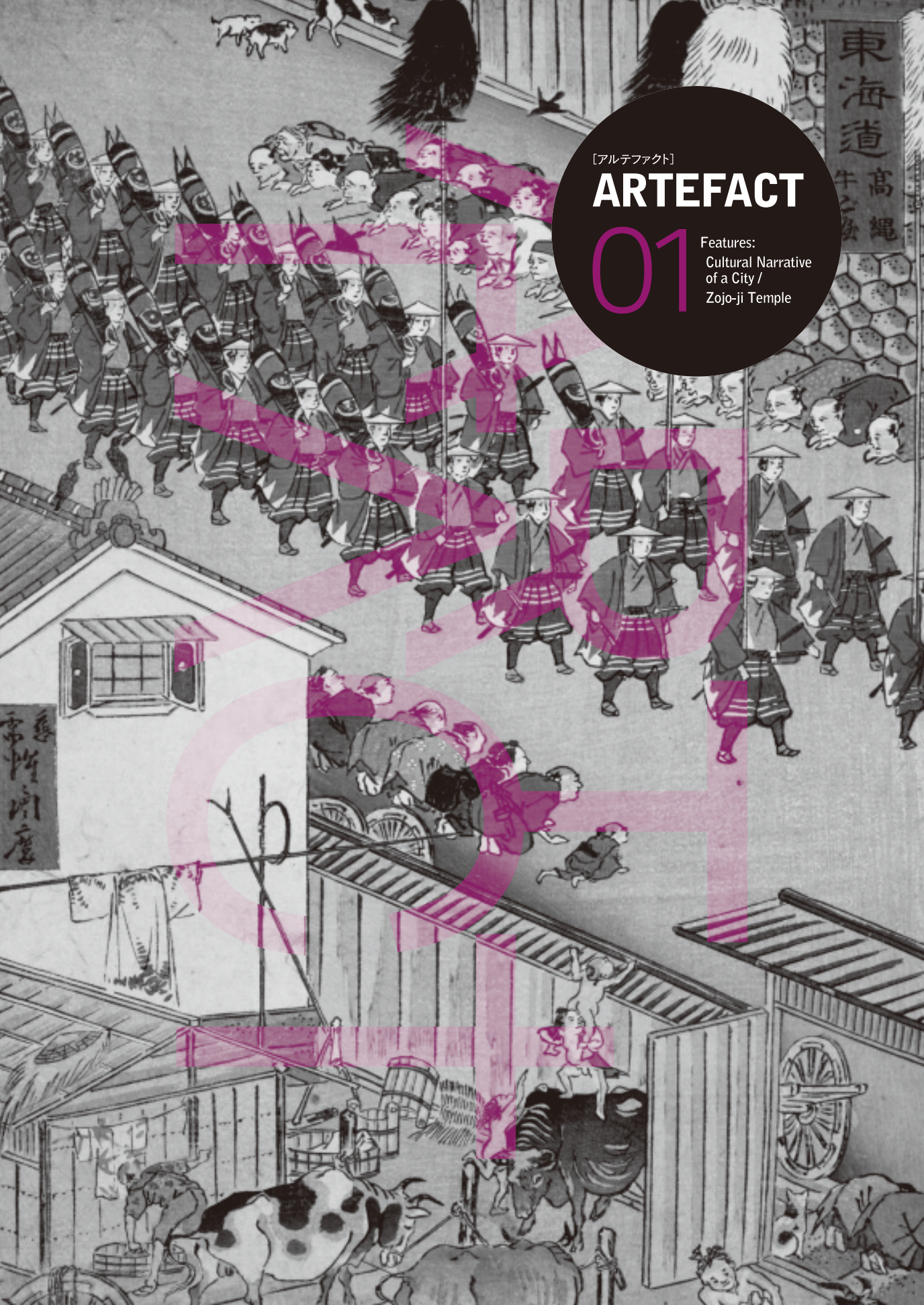
Not only rich in historical sites, the city is also the centre of contemporary art and culture. If we look at the numbers of art-related spaces, this becomes quite obvious. Minato ward houses more than 12,000 art-related locations, which is more or less the same number as in the whole of Osaka prefecture, and it surpasses the number in Kyoto prefecture.

Thus, the city welcomes visitors who are interested both in history and traditional culture and in contemporary culture.

However, through discussions with visitors to the university, we have become aware of several problems relating to the presentation of these wide cultural resources in Minato ward.

The first problem is the segregation of cultural resources.

As traditional and contemporary cultures live together in the same place, they undoubtedly share a cultural narrative and influence one other. Yet this cross relation is not apparent to visitors to the city, especially foreigners. KUAC welcomes many foreign researchers who are interested in contemporary art. Most of them do not know the traditional



［アルテファクト］

ARTEFACT

01

Features:
Cultural Narrative of a City /
Zojo-ji Temple